東洋語源物語

渡辺紳一郎

旺文社文庫

東洋語源物語

渡辺紳一郎

旺文社文庫

「矛盾」「杞憂」「完璧」など、我々が日常使う言葉の中には、中国の故事・成句にもとづくものが意外に多い。本書では、こんにち日本語に完全に同化した感のあるこれらの故事・成句を、著者独特のユーモアで読み物風に楽しく解説。また現代の世相に、さりげないアイロニーを加えることも忘れていない。

カバー　西村保史郎

東洋語源物語

渡辺紳一郎

旺文社文庫

60
1

¥300

¥300 0195 640-47 0724

〈旺文社文庫〉

亀井勝一郎
青春について〔22-5〕
青春が持つ混沌とした不安に人間の原型を見ようとする「青春論」。他に「近代恋愛詩」を併録

高橋和巳
現代の青春〔62-1〕
若き知識人、学生に多大の影響を与えた夭逝の文学者高橋和巳の全体像をさぐるエッセイ集。

渡辺紳一郎
西洋語源物語〔60-2〕
西洋に生まれながら日本語に同化したことばを著者独特のユーモアで読み物風に楽しく解説。

〔 〕内の太字は作者・斜字は作品番号

旺文社文庫

東洋語源物語

渡辺紳一郎著

東洋語源物語

渡辺紳一郎著

旺文社

Obunsha Library

旺文社文庫

東洋語源物語

渡辺紳一郎著

旺文社

目次

壓卷 一二
過則勿憚改 一三
暗中摸索 一三
衣食足知禮節 一四
以心傳心 一五
一網打盡 一六
一葉天下秋 一九
一擧兩得 二〇
一刻千金 二三
一壺天 二四
一將功成萬骨枯 二六
一炊之夢 二七
一邊倒 二九
慇懃 三〇

陰德陽報 三一
不問馬 三二
烏有 三三
遠交近攻 三五
乞骸骨 三七
蝸牛角上之爭 三八
和氏之璧 四〇
苛政猛於虎 四三
瓜田不納履 四四
畫餠 四五
鑿壁讀書 四六
畫龍點睛 四七
夏爐冬扇 五〇
寒江獨釣 五一

雁書 五四
邯鄲之步 五五
完璧 五六
管鮑交 五七
騎虎之勢 五八
疑心暗鬼 六一
緣木求魚 六二
附驥尾 六三
杞憂 六四
牛耳 六五
牛刀 六六
朽木不可雕 六七
懸牛首賣馬肉 六七
漁父之利 六九
口有蜜腹有劍 七二
國破山河在 七四
敬遠 七七

挂冠 八〇
雞口牛後 八二
荊妻豚兒 八三
螢雪 八五
鷄鳴狗盜 八六
雞肋 八七
逆鱗 八八
月下冰人 九〇
月旦 九二
卷土重來 九四
紅一點 九五
鴻鵠之志 九五
後生可畏 九七
吳越同舟 九九
吳下阿蒙 一〇一
刻舟・守株 一〇一
五十步百步 一〇四

五斗米 一〇五
鼓腹擊壤 一〇七
五里霧中 一一〇
言語道斷 一一一
塞翁馬 一一三
細事 一一四
細腰 一一五
先則制人 一一六
流石 一一七
左袒 一一八
山雨欲來、風滿樓 一二〇
四海兄弟 一二三
鞭死屍 一二三
死孔明走生仲達 一二四
四知 一二五
四面楚歌 一二六
秋扇 一二七

酒池肉林 一三〇
春眠不覺曉 一三一
食指 一三三
助長 一三四
不可使知 一三六
人生感意氣 一三七
心中賊 一三九
推敲 一四一
過猶不及 一四三
杜撰 一四四
掣肘 一四五
井底之蛙 一四六
折角 一四八
折檻 一四九
折衝 一五〇
糟糠之妻 一五三
太公望 一五四

泰斗 一五六
他山之石 一五七
蛇足 一五九
多多益辨 一六〇
他人鼾睡 一六一
端倪 一六二
男女同席 一六三
斷腸 一六四
畜生 一六六
朝三暮四 一六七
直躬 一六八
鼎立 一七〇
桃源 一七一
盜泉之水 一七二
桃季不言、下自成蹊 一七四
登龍門 一七五
假虎威狐 一七六
虎之卷 一七八
南柯夢 一七九
囊中自有錢 一八〇
囊中之錐 一八二
敗軍之將 一八三
背水之陣 一八五
盃中蛇影 一八六
量入爲出 一八八
馬鹿・逐鹿 一八九
馬脚 一九一
破鏡 一九二
白眼 一九四
白波 一九五
白髮三千丈 一九六
白眉 一九七
伯樂 一九八
馬謖 二〇一

跋扈 二〇三
破天荒 二〇三
伴食宰相 二〇四
半面識 二〇五
尾生之信 二〇六
效顰 二〇九
髀肉之嘆 二一〇
百聞不如一見 二一一
豹變 二一三
風聲鶴唳 二一四
覆水不返盆 二一五
不肖 二一六
釜中魚 二一七
物色 二一八
刎頸之交 二二〇
汨羅之鬼 二二三
暴虎馮河 二二四
旁若無人 二二六
庖丁 二二七
亡羊之歎 二三〇
木鐸 二三一
高枕而臥 二三三
先從隗始 二三四
煮豆燃萁 二三六
水清無大魚 二三八
未亡人 二三九
矛盾 二四〇
明鏡止水 二四一
孟母 二四三
沐猴而冠 二四四
藥籠中物 二四五
病入膏肓 二四六
油斷 二四八
羊頭狗肉 二五〇

餘桃　二五一
洛陽之紙價　二五三
梨園・杏林　二五五
柳營　二五七
流言飛語　二五八
艮賈深藏　二六〇
梁上君子　二六一
遼東之豕　二六二
艮二千石　二六五
壟斷　二六六
轉禍爲福　二六八
主要出典案内　二七四
中国史略年表　二八三
索引　二八九
『東洋語源物語』について　新開　高明
挿絵　西村保史郎

東洋語源物語

壓巻

「圧巻」（あっかん）。

「何々選手は本日のアッカンでした……」などとラジオのスポーツ・ニュースでよくいう。耳で聞くだけで文字で見ないと、「悪漢」「悪感」を連想する。運動部記者の文章は明治時代の古さを今なお持っている。それをそのままスポーツ・アナウンサーが使う。「完璧」とともに「圧巻」はスポーツ的学生用語だともいわれる。「カンペキ」「アッカン」と文字とその意味を知らないのが多いようだ。

「圧巻」とは、書類中の秀逸の箇所。一巻の中で止めをさす詩文のことである。これを転用して、すべての物事において数多くある同類の中で、特に目立って優れたのを圧巻という。

ナンバー・ワンとかベストとかいう場合にも用いられるが、「圧巻」はそうして第二番目を断然引きはなさなくてはいけない。

昔、科挙（文官試験）の成績を定め、姓名を発表するときに最優等の及第者の答案（巻）を最後に取り出して、他の答案の上にのせる——というならわしがあった。つまり、この最も優秀な答案（巻）が、他のすべての答案（巻）をおさえつける、圧するという形になる。これが「圧巻」という言葉の生まれた故事である。

過則勿憚改（過まって、改むるに憚るなかれ）

「過則勿レ憚レ改」（過まっては則ち改むるに憚るなかれ）。これを少し短くして「過まって、改むるに憚るなかれ」と、誰でもいったり、またいわれたりする。

『論語』の「子罕篇」に出ている孔子の言葉だとは、いまどき知らないで使われることが多いが、昔は横丁の隠居が、『論語』を引いて熊さん八さんを教訓した。

「過則勿憚改」、まちがったら、わるびれずに、いさぎよく改めろ――ということである。この全文は次のとおり。

子曰、主二忠信一、毋レ友二不レ如レ己者一、過則勿レ憚レ改。（子曰く、忠信を主とせよ、おのれにしかざる者を友とするなかれ、過っては則ち改むるに憚るなかれ）

「主忠信」、忠実で信用のある人に親しみ近づく。『論語』でも、ここの言葉は若い初学の弟子に孔子が教えたものらしい。

孔子が入門の新弟子に心得を語ったもの、いわば入学式における校長の訓示であろう。

「過則勿憚改」と、悪いことをしてけろりとされては困る。この場合の、「過」を道徳的の意味にだけ取らなくてもいい、文法、発音、文字……すべての技術的のものに当てはめると、話が解りやすい。

暗中摸索

「暗中摸索」（あんちゅう・もさく）。言葉の説明は、暗の中で手さぐりに物を探す――ことで、甚だ探すのに苦労することである。

しかし、この「暗中摸索」は、暗の中でも手さぐりで探し当てることができるという、逆の意味に用いるのが本来の意味である。

『隋唐佳話』という本に出ている物語。

唐の許敬宗という学者は、性が軽忽、つまり、そそっかしく、人の顔を、すぐ忘れてしまう癖があった。学者だから学問にかけては物憶えがいいのにどうしたものか、世間並みのことは非常識、人の顔を忘れたり、まちがえたりする。

「あの男のそそっかしいのも困りものだ」という陰口。

それを伝え聞いた許先生のいわく「世に知られていないありふれた人間の顔なぞ記憶するのはむだに労力を費すものである」と大見得を切り、それから、自分の尊敬する文壇の大家の名を何遜、劉孝綽、沈約、謝朓と並べたてて「こうした人たちなら、暗中摸索するも、また（識）知るべし」といった。暗中摸索著、亦可レ識。（この著は助辞）。

一般には「暗中摸索」を言葉通りに、「暗の中の手探り」、または「当て推量で当てはめる」という時に使っている。これに似た「暗中飛躍」は、暗の中で飛びはねる、人知れず活動することであるが、これは出典はなく、和製の漢文らしい。

「摸索」は、普通には「もさく」であるが、古い漢学の先生は「ぼさく」という。

許敬宗性輕傲、見レ人多レ忘レ之、或謂二其不一レ聽、曰、卿自難レ識、若遇二何（遜）・劉（孝綽）・沈（約）・謝一（朓）、暗中摸索著亦可レ識。――隋唐佳話（許敬宗性軽傲にして、人を見るもこれを忘ること多し。或ひとその聡ならざるを謂う。曰く、「卿（お前さんの意）は自ら識り難し、もし何・劉・沈・謝に遇へば、暗中摸索すとも、また識るべし」と）

衣食足知禮節（衣食足って礼節を知る）

「衣食足知二礼節一」（衣食たって礼節を知る）。

敗戦直後のありさまを顧みると、おんぼろ着物に、食う物もろくに食えず、まるで乞食みたいだった。この頃では身だしなみとか何とかいうようになった。衣食たって礼節を知るというのは、この事である。

汚い着物なら平気で、地べたに坐ったりできた。ろくに食う物がなくて腹をへらして痩せていると、つい乞食根性、泥棒根性が出てくるし、また、それを出しても恥ずかしくなかった。

衣食が人間らしくなってくると、紳士淑女の体面を重んずるようになる。戦争直後から十年間の我々の経験に照らしてみると、この間の事は、説明を要しないほど、はっきりしている。

二千五百年も前に、管仲が、簡単明瞭に喝破している。

斉の桓公の宰相管仲が著わしたといわれる『管子』の「牧民篇」にある言葉である。

倉廩實則知二禮節一、衣食足則知二榮辱一（倉廩みつれば則ち礼節を知り、衣食たって則ち栄辱を知る）

「倉廩」は穀物を入れる倉庫。

倉廩と、衣食の二つを合わせて、一般に「衣食足知二礼節一」といっているらしく、まちがいというわけでもなかろう。

戦争前までは、管仲の言葉も、単なる抽象論と思われたが、生活苦を味わった我々には実感のこもった言葉である。

以心傳心

「心を以て心に伝う」と和訳しないで、漢文のまま「いしん・でんしん」と、無線電信の語呂合わせみたいに読む。もともと、坊さんの言葉であるから、「如是我聞」を「にょぜ・がもん」といって「かくの如く、我聞けり」としないのと同じわけ。

業者が、その筋の役人に御馳走したり、候補者が名乗りをあげる事前に、選挙のボス的有力者を何らかの形で、振る舞う。しかも、肝腎の仕事のこと、また選挙のことには一言も触れない。この時に、この法教の有難い文句の「以心伝心」を用いる、もったいないことである。

『伝燈録』という仏教の本に「法を迦葉に付す、以心伝心」とあるのが出典。

「拈華微笑」ともいう。

お釈迦様が霊鷲山という所で多勢の弟子を集めた。その時、お釈迦様は蓮の華を「拈」って、皆の者に示した。ところが、多勢の弟子たちは、それが何を意味するか解らないので寂然たり、つまり、だまっていた。第一番の高弟たる迦葉が、ただひとり、それを見て破顔微笑、にっこり笑った。

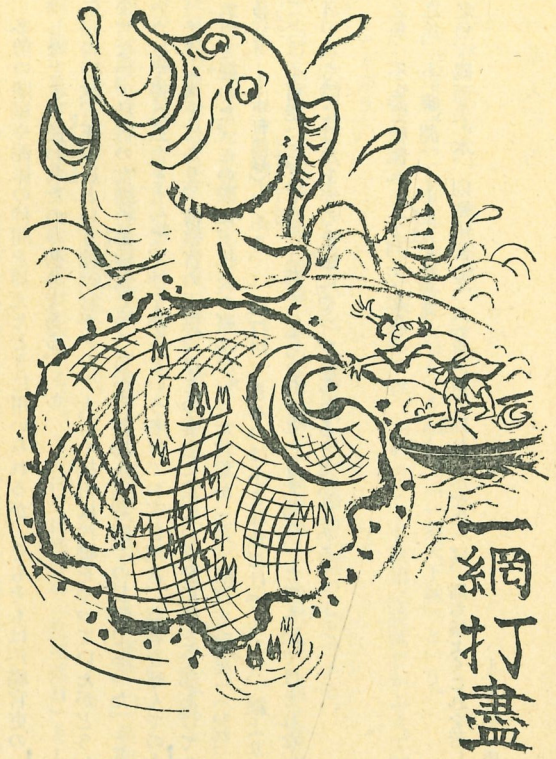
そこで、お釈迦様は「吾に正法眼蔵涅槃妙法、実相無相微妙の法門あり、不立文字、教外別伝、つまり文書にも言葉にもいい表わせない奥義を、迦葉に与える」といったという。

不立文字だから、あとで検察官に尻尾をつかまれる証拠を残さないわけである。聖なる仏陀の言葉が、贈収賄汚職に関連して使われるとは世も末である。

一網打盡

「一網打尽」（いちもう・だじん）。

泥棒や暴力団の一団をことごとく検挙するときに「一網打尽」という文字が新聞の見出しなどに現われる。読んで字の如く、投網でどっさり魚をとるありさま、ばさっと網を打ちおろして一挙に



魚をとり尽すことである。しかし「一網打尽」という言葉は、投網で大漁して喜んだときの言葉ではない。多勢の闇屋や泥棒の仲間を捕えたときに用いられるが、そもそもは汚職官吏の一統をごっそり検挙したときに使われたのが初めである。

宋の仁宗の時代、王拱辰という検察官がいた。大臣の杜衍は汚職をやっていたがどうしても尻尾をつかませない。杜衍の女婿の蘇舜欽という男が官報局（進奏院）の長官であった。この男が古い紙を払いさげて得た公金をもって、神を祭るという名目でお客を招き、芸者を呼んでの大盤振舞をやった。チャンスとばかり、検察官の王拱辰はこの宴会に集まった公用族を全部あげてしまった。杜衍も大臣を罷めた。この際に王拱辰が喜んでいった言葉が「吾一網打去盡矣」（われ、いちもうに打ち去り尽せり――東軒筆録）である。一網打尽できるのは小さな魚だけであって、網より大きな魚をとることは不可能。「呑舟之魚」（荘子にある文句）という大物は、とても網ではとれない。「荘子」には呑舟の魚も陸にはねあがると蟻にやっつけられると書いてある。

呑舟之魚、不レ游二枝流一。――列子・楊朱篇
呑舟之魚、不レ游レ淵。――說苑・政理篇
呑舟之魚、碭而失レ水、則蟻能苦レ之。（呑舟の魚も碭れて水を失へば、則ち蟻よくこれを苦しむ）
――荘子・庚桑楚篇――

一葉天下秋

「一葉天下秋」（いちよう・天下の秋）。

「一葉落知二天下秋一」（一葉落ちて天下の秋を知る）を略して「一葉天下秋」という。

「とうとうひとり脱退者が出たか。一葉落ちては、あのセクトも次第に脱落者がふえて解消するだろう」などと使う。

坪内逍遙の『桐一葉』でも知られている。一葉というのは桐の一葉のことである。

芝居の『桐一葉』の第六幕目の片桐邸、その名に因んで桐が植えてある、庭に吹き落ちてくる桐一葉、且元が、それを眺めて

「……はて、是非もなき定めじゃなあ」という。

桐の葉は夏の終わりには落ち始める、桐の一葉が落ちて、そろそろ秋に入りかかるという意味で、事物の一端を見て、その大勢を知るたとえである。

李子郷の秋蟲賦の中に「一葉落分天地秋」とある。「一葉落天下秋」――大集経「一葉知レ秋」――書言故事「階前梧葉已秋声」――朱熹「偶成」の末句。

逍遙の『桐一葉』の続篇が『孤城落月』であるが、このほうは漢文の「孤城落日」をもじったもの。

「孤城落日」は、ただ一つの城が、西の方、日がまさに沈もうとする所にある――という意味で、

頼りない心細いありさまを形容していう。

唐の王維（おうい）の詩の文句から来ている。

「愁見孤城落日辺」（愁いて見る孤城落日の辺）

一擧兩得

一つのことをして、一度に二つの利益をあげることを「一挙両得」という。

昔、弁荘子（べんそうし）という強い男が宿屋に泊まっていた。虎が現われたというのを聞いて、退治に出かけようとした。

その時、ホテルのボーイが彼を引き止めて「そんなに急ぐことはありませんよ。まあまあ、お待ちなさい。二頭の虎が牛を食べようとしています。いまに、この二頭は牛の肉の奪い合いで喧嘩（けんか）を始めますよ。二頭の虎が大喧嘩をやれば、小さいほうの虎は負けて殺され、大きいほうの虎は勝っても、そうとう傷ついて弱るでしょう。その傷ついて弱ってる大虎を刺し殺せば、一ぺんに二頭の虎を退治することになるでしょう、一挙両得ですよ」といった。

弁荘子は、ボーイのいうところをなるほどと思って、そのとおりにした。彼はやすやすと傷ついて弱った虎を刺し殺し、一ぺんに二頭の虎を退治したという評判が高くなった。（――春秋後語）。この物語には背景がある。

中国の戦国時代(1)に韓と魏の二国が一年以上も戦いを続けていた。秦の恵王は、どちらかを救おうとして、家来共に相談したが、なかなか意見が一致しなかった。その時、陳軫という賢い家来が、この「一挙両得」の物語をしたので、恵王は、どっちかの一方を救うのをやめて、しばらく傍観、一方が負け、勝った方も弱ったところで、一ぺんに両方の国を亡ぼしてしまった。(――戦国策・楚策)

「一箭雙鵰」、一本の矢で二羽のワシを射ること。「一石二鳥」というのは漢文ではなく、英語の Kill two birds with one stone.（一つの石で二羽の鳥を殺す）の飜訳である。

一刻千金

「一刻千金」（いっこく・せんきん）。

「なにを、ぐずぐずしているか、タイム・イズ・マネー、一刻千金だよ」という。英語と漢文の両方を使って、意味を強める。

英語の「時は金なり」の意味に「一刻千金」が使われるが、元の意味は、そんな事務的な忙しいことではなく、いたって、のんびりしたものである。

「一刻」とは昔の一時間、すなわち今の二時間。一刻が千金にも値するほど気持の良い時ということ。

(1) 紀元前四〇三～二二一年、晋が韓・魏・趙に三分されてから、秦に統一されるまでの間の時代。

「一刻千金、とても、よい眺めじゃのう」と、芝居の石川五右衛門が楼門の上からいう。宋の蘇東坡の名高い詩から来た文句である。

春夜

春宵一刻直千金　花有清香月有陰
歌管樓臺聲寂寂　鞦韆院落夜沈沈

この詩の中で、「声」は「人」になったのもあるし、「寂々」は「細々」となったのもある。

春宵一刻あたい千金、花に清香あり、月に陰あり、歌管楼台、声寂々　鞦韆院落、夜沈沈。（月有陰は朧月。声寂々は、高楼での管絃もやんで、今はひっそり静まりかえっているということ。鞦韆はブランコ、中国の古い画では美人が乗るもの。沈々は夜の更け行くこと）

宿屋や料理屋の掛け物によく見る詩であり、画である。

「一刻千金」に、よく似た文句は「一字千金」、これも一字が千金の値打のあるほどの立派な詩文という意味に使われる。

しかし「一字千金」の場合は「一刻千金」と違って、単なる形容ではない。

秦の呂不韋が『呂氏春秋』という書物を作ったとき、咸陽（秦の都）の城門に置き、千金を、その上に懸けて、一字でも加えたり削ったりすることのできる者には、その金を与えるという布告を

出したという話がある。

「一攫千金」は一つかみで千金を得ること、一度に巨利を博するという、ぼろ儲け、「濡れ手で粟の摑み取り」のことであるが、それに似たのが、「一擲千金」、よい度胸、大胆に賭けることで、高適の詩に「一擲千金都是胆」（――、すべて、これ胆）とある。

一壺天

「一壺天」（いっこてん）。

「壺中天」（こちゅう・の・てん）ともいう。茶人趣味などで、小さな所にひっこんで、独りでこっそり楽しんでいるという時に「壺中の天地を楽しんでいるよ」とか「壺中居ですよ」とかいう。小天地、あるいは別世界の意味である。ギリシア語のミクロス・コスモス、英語のマイクロコズム MICROCOSM.

汝南の費長房という人は市場の吏員であったが、その市場に薬を売る老人があった。

店先に一つの壺が懸けてあった。商売が終わると、いつでも、老人はその壺の中にとびこんで姿を隠すのであったが、誰もそんなことには気づかない。

費長房がある日、役所の窓から、それを見て、これは不思議と、老人に会いに行き、その中へいっしょにはいった。

すると、壺の中には立派な宝石で飾られた豪華な部屋があり、美酒佳肴がいっぱい並べてあった。そこで老人と大いに飲んで、また壺から出てきた――という話。『後漢書』の「方術伝」にある物語。この薬売りの老人は仙人であったわけ。

費長房者、汝南人也、曾為二市掾一、市中有二老翁一賣レ薬、懸二一壺於肆頭一、及二市罷一、輒跳二入壺中一、市人莫二之見一、唯長房於二樓上一覩レ之、異焉、因往再拝、翁乃與俱入二壺中一、唯見二玉堂厳麗、旨酒甘肴盈二衍其中一、共飲畢而出。（費長房なる者は、汝南の人なり。かつて市の掾〔地方官の属官〕となる。市中に老翁有りて薬を売る。一壺を肆頭〔店先き〕に懸げ、市罷るに及び、すなはち壺中に跳入す。市人これを見るなし。唯長房楼上においてこれを覩、異とす。因りて往きて再拝す。翁すなはち、ともに壺中に入る。唯、玉堂厳麗、旨酒甘肴其の中に盈衍〔みちみちている〕するを見る。共に飲み畢りて出づ）

翁は約束して、このことを他人にいうのを許さなかった。

それから後、翁は役所に費長房を訪ねてきて、「私は仙人であるが、過失があって人間世界に下されている。もう、ここを去ることになったからお別れに来た。下に酒を持ってきてあるからいっしょに飲もう」という。費長房が家来にそれを持ってこさせようとしたが、酒の器が重くて持てない。十人で担ぎあげようとしたが、びくともしない。その話を聞いて、翁は笑って、階段を下りていって一本の指で持ち上げてきた。器は一升入りくらいであったが、二日間、朝から晩まで飲んだが、いくらでも酒が出てきたという。

唐の詩人元稹の詩に

壺中天地乾坤外（壺中の天地、けんこんの外）という句がある。

一將功成萬骨枯（一将功成って万骨枯る）

「一将功成万骨枯」（一将・功成って・万骨枯る）。

多数の犠牲において、ある個人が、ぼろ儲けする時に使われる。

将軍の胸に輝く勲章は、戦場に倒れた無数の無名戦士の涙で光ってる……とすれば西洋式の表現である。

戦勝の功名は、将軍ひとりに帰し、彼をして功名をなさしめた多くの兵卒は枯骨となって野原に散らばっている、という意味。

唐の曹松の名高い詩の結句である。

己亥歳

澤國江山入戰圖　沢国の江山、戦図に入る
生民何計樂樵蘇　生民、何の計ありて樵蘇を楽しまん
憑君莫話封侯事　君にたのむ話すことなかれ封侯の事
一將功成万骨枯　一将、功成って万骨枯る

己亥の歳は唐の末世、僖宗皇帝の乾符六年（西暦八七九年）黄巣の乱(1)の最中である。

第一句の「図」（と）第二句の「蘇」（そ）第四句の「枯」（こ）と韻をふんでいる。日本語に直しての詩吟は、せっかくの韻もむだであって、詩の韻律を殺してしまう。

この詩は、われわれの先祖以来、あまりにも名高いものであったが、軍部の好まないところとあって、漢文教科書からは除かれていたこともあった。

「沢国」（たくこく）とは揚子江沿岸のクリーク地帯のこと。「戦図」は、作戦範囲、「樵蘇」（しょうそ）、樵は、木こり、蘇は、草刈り。

揚子江の下流地方は作戦範囲にはいった。住民は木を切り、草を苅るという日常生活を楽しむ計ができない。君に頼みたいのは、戦功をたてて大名に封ぜられるなどという話をしないことだ。なんとなれば、「一将功成万骨枯」だから。

一炊之夢（一炊の夢）

「一炊之夢」（いっすい・の・ゆめ）。

これには、いろいろのいい方がある。黄粱夢（こうりょうのゆめ）。黄粱一炊夢。邯鄲夢（かんたんのゆめ）。一場春夢。盧生之夢（ろせいのゆめ）。

一度、飯をたく間の夢という意味で、人生のたのみがたく、栄枯盛衰の浮世の、はかないことを

(1) 唐の末期（九世紀後半）に起こった農民の反乱。この乱により、唐の解体が早められた。

形容して「要するに一炊之夢にすぎない」という。晩年の人、または臨終において、人生をふり返って見ると、まあ「一炊の夢だった」と思うようだ。

『枕中記』という物語による。

唐の開元七年（西暦七一九年）、盧生という若者が立身出世を志し、馬で邯鄲へやってきて、とある宿屋にはいった。

そこには呂翁という仙人の術を心得た老人が泊まっていたので、身の上を物語る。

宿屋の主人が、これから飯をたこうとする、飯の来るのを待って盧生は眠ろうとする。

呂翁がリュックサックの中から青磁の枕を取り出して彼に貸してくれる。その枕の両端には穴があいている。盧生がその穴を見ているうちに、穴はだんだん大きくなり、トンネルのようになる、その中を進んでいくと立派な家がある……。それから、とても美人で、しかもしとやかな娘と結婚する。高文試験に及第、それから知事になったり、検事総長になったりする。一度は讒言に(1)会って死刑にされようとするが危うく免れる。後に位は人臣の栄をきわめ燕国公に封ぜられる。その間に子供は五人、孫は十何人もできる。八十すぎて病気で死ぬ。

盧生は、あくびして目が覚めれば、なんのことはない、もとの宿屋に寝たままであり、呂翁が、その傍に坐っている、主人は飯をまだ運んでこない。「なあんだ夢だったのか」と盧生がいうと、呂翁は「それが人生だよ」と教える。

しばらく考えていた盧生は、「なるほど立身出世といっても、はかないものだという道理が判りました、先生のお教えは有難うございました」と悟って帰っていった。

これが「邯鄲、夢の枕」の一席であるが、枕探し専門の泥棒のことを「かんたん師」というのはこの話からである。

(1) 他人をおとしいれるための、事実をまげた悪口。

一邊倒

「一辺倒」（いっぺんとう）。

「向米一辺倒」または「向蘇一辺倒」というが、この「一辺倒」（イーピェンタオ）は近頃になって、中国から輸入された言葉である。毛沢東の使った言葉。

右か左か、どっちかの一方に傾倒して、自主、中庸を得ないこと。

『近思録』という書物がある。宋の哲学者、周敦頤、程顥、程頤、張載の言葉を後継者の朱子が編集したもの。朱子学派のバイブルであって、明代の陽明学派のバイブル『伝習録』に対するものである。

『論語』の中の子夏の言葉の「切問近思」（切に問い、近く思う）から名付けたのが『近思録』。また同じように『論語』の中の曾子の言葉の「伝不習乎」（伝えて習わざるか＝伝不習乎、または、習わざるを伝うるか＝伝不習乎）から名付けたのが『伝習録』である。

『近思録』に、程頤の言葉として次のようなものがある。

「なまじっか、いろんな事を知ってる者に道理を説くのは難しいものである。酔払いを扶けるよ

うなもので、やっと一辺を救うと、今度は他の一辺に倒れてしまう、人間というものは一辺に執着するものであるのは困ったものである」

與レ賢說話、却似レ扶二醉漢一、救二得一邊一、倒二了一邊一、只怕二人執二着一邊一（賢と說話するは、却って醉漢を扶くるに似たり、一辺を救い得れば、一辺に倒了す、ただ人の一辺に執着するを、おそる）

慇懃

「慇懃」（いんぎん）。下の心を取り去って、「殷勤」とも書く。「ねんごろ」と振り仮名をしたもの。「インギンな仁だ」というのは、頭の低く、礼儀正しく、丁寧な人のこと。

しかし、このインギンの使い方は古めかしく、近頃では、もっぱら「慇懃無礼」として使っている。形だけは丁寧で礼儀正しいが、それが度を過ぎ、心の中で、こっちを馬鹿にしているのがありありと見える。そうしたのがインギン・ブレイで、場合によっては、単なる無礼よりも、腹が立つことがある。「慇懃を通じる」（通二慇懃一）というのは、「人妻と慇懃を通じ……」などの例で判るように、内通、密通の意味である。

司馬相如という人は漢時代の名高い学者、いわゆる「漢文」の手本となるほどの名文を作った。彼は不良の文学青年であった。卓という富豪に文君という美人で才女の娘があった。若くて夫を失い、家に帰っていた。軟派の司馬相如、馬車は持っていたので貴公子と見えた。文君の侍女を買収して、文学ファンの文君に近付き、ついに「慇懃を通じ」てしまった。自動車を持ってるから金でもあるかと思ったら、財産はそれだけ。アパートには「四つの壁」があるだけ。文君は勘当された。両人は長安の銀座にバーを開業、文君がマダムとなり司馬相如は店に顔を出すと営業妨害となるから、台所で、ふんどし姿で食器を洗った。卓家の親類がこれを恥ずかしがって財産を分けて、バーを廃業させたという。漢の武帝の時だから、二千百年も前のロマンスである。

「文君当壚」といって中国の画題に使われる。「壚」というのは酒がめを置くところ。

陰徳陽報

「陰徳陽報」（いんとく・ようほう）。

人知れぬ善事を行なう者には、陽に幸福が来る、という意味。

勧善懲悪式の講談には必ず出てくる文句、仏教の御経くさいが、さに非ず。『賈誼新書』といっても、今はやりのポケット版ではなく、漢代の書物であるが、その中に次のような話がある。

戦国時代の孫叔敖という人の物語。彼が幼い頃遊びに出て帰ってきたが、心配そうな顔色、飯も食わない。母親が、そのわけを問うと、泣いて答えるには、「きょう、私は両頭の蛇を見ましたから、数日中に私は死ぬでしょう」と。母親が「その蛇は今どこにいるのか」と問うと、「両頭の蛇を見ると死ぬという話を聞いているので、ほかの人が見るといけないから、その蛇を殺して土に埋めてきました」という。

「陰徳ある者は、天報ゆるに福をもってするというから、おまえは死にはしないよ」と母親がいった。孫叔敖は後に仁者の名が高くなり楚の荘王は車をもって迎えて長官とした。彼が来るという話を聞いただけで地方が治まったという。

有二陰徳一者、必有二陽報一、有二陰行一者、必有二昭名一。（陰徳有る者は必ず陽報有り、陰行有る者は必ず昭名有り〔必ず名が明らかに知れる〕）

——淮南子

有二陰徳一者、必亨二其榮一、以及二其子孫一（陰徳有る者は必ず其の栄を亨け、以て其の子孫に及ぶ）

——説苑

不問馬（馬を問わず）

孔子が役所から帰って見ると自宅が火事で馬小屋が丸焼けになった。この報知を聞いた孔子は「馬は大丈夫か」ということを尋ねなかったという。彼が、まず尋ねたのは「誰か怪我人はなかったか」ということであった。凡人なら、まず第一に、なにはさておき「馬は大丈夫か」というところを、さすがは聖人だけあって、家畜のことは問題にせず、人間の安否を気づかったというのである。特に「馬を問わず」というところをもって見るに、孔子の持っていた馬は相当の逸物だったろう。

馬小屋が焼けて馬丁が大火傷でも新聞の記事にならない。なっても二、三行の豆記事だが、ダービー優勝の名馬が焼けたとなると何段ぬきか知らないが、とにかくニュース・バリューがある。孔子をモニターにしたら叱られるだろう。馬に着物を着せたり、馬を自動車に乗せたり、まさに「お馬様」である現代に当てはめてみると、孔子の言葉はよく解る。

この「不問馬」を説明する御隠居さんが出てくるのが落語のクラシック「うまや火事」である。女房は髪結、亭主は、いわゆる髪結の亭主で怠け者、江戸時代には例外的の女尊男卑の夫婦生活だが、物識り老人、横丁の隠居が意見する、「お前のように、いくら働きがあっても女がいばり散らすというのはよくないよ、人倫にもとるよ……」と、学のある老人、頭に詰まってる漢学のウンチクを出す癖がある。その時に論語の「廐焚けたり」の話を髪結にして聞かせる。それからある日女房が転んで亭主愛用の茶碗を壊してしまった。亭主は、その時、茶碗のことは何にもいわないで、「女房や怪我はなかったか」といった孔子的の言葉で女房を感激させる。なあに、茶碗は夜店で買った安物。髪結である女房に休まれては、こちとらあ飯が食えねえ。

廐焚、子退レ朝曰、傷レ人乎、不レ問レ馬。（廐焚けたり。子朝より退く。曰く、「人を傷つけたるか」と。馬を問はざりき）——論語・郷党篇

烏（有）

「烏」、鳥の頭の方の横棒が一本足りない文字である。カラスは、ちょっと離れて見ると目が見え

ないからであろう。烏の字がつく熟語で今でも使われるのは「烏有」。丸焼けになったときに「烏有に帰す」という。カラスのように真黒焦げになったという意味ではない。カラスとは関係なく烏(う)という発音を借りただけのもの。「烏有」(いずくんぞあらんや)と読む。漢の学者司馬相如の文章に出てくる架空の人物「烏有先生」は、この世に実在しない人物ということ。

「おこのさた」「おこがましい」などの「烏滸」は南方(広西省)にいた昔の未開人種。規律のない集りを「烏合之衆」これは東漢光武皇帝の将耿弇の伝記にあり、「突騎(1)を発して烏合の衆を蹂る」と。

「烏喙」はカラスのくちばしのこと。欲深い人相をさす。戦国の越王勾践のことで忠臣范蠡が「長頸烏喙、患難は共にすべきも、安楽をともにすべからず」といって逃げ去った。

「誰知烏之雌雄」(たれかカラスの雌雄を知らんや)、物の是非善悪の互いに紛らわしいこと。これは『詩経』にある文句。

「烏鳥之私情」、子が親を養おうとする心がけ。孝行で名高い李密という人の『陳情書』にでてくる。カラスは「反哺」といって親を養い返すものと思われた。カラスの子はふくれて大きく見えるから、それをまちがえて子が親を養うのだと見たらしい。

「烏頭白」は無理な注文。秦王が人質となった燕の太子丹に、カラスの頭が白くなり、馬に角が生えたら許すといった。

「烏兎」、日月のこと。大陽に三本足のカラスがいるという伝説。兎は月のこと。

(1) 先頭をきってつき進む騎兵。

遠交近攻

「遠交近攻」(えんこう・きんこう)。

一種の国策であって、中国の戦国時代からの政策であり、今でも世界の各方面に、これに似た政策が行なわれているようである。

遠くて直接の利害のないものと交わり、利害相反する隣と争うのは、自然の傾向でもある。遠い国と連絡を取って、隣りの国を両方から挟み打ちしようという国策が「遠交近攻」である。

この「遠交近攻」を、はっきりした政策として打ち出し始めたのは、戦国時代のこと、秦の宰相范雎である。雎は睢と似ているので、范睢ともいわれる。

范雎は始め魏の家来であった。須賈という人に従って斉の国に使いした。斉王は范雎の話が面白かったので、彼に金と牛と酒を贈った。すると須賈はそれは范が国家の秘密を洩らしたからだろうと疑い、帰ってから魏の宰相魏斉に告げた。

魏斉は怒って、范雎を笞で撃って、胸を折り、歯を拉いた。范雎は死んだふりをした。

魏斉は范雎を簀で巻いて便所に置き、酔っぱらいの客に、かわるがわる小便をひっかけさせた。

(中国では、仇の頭蓋骨を小便壺に使ったり、悪まれ者の像を立てて人々に小便させたりした)

范雎は番人に助けられて便所から脱け出し、張禄と変名して隠れていた。

その頃、秦の使者王稽が魏へ来たが、こっそり范雎を車に乗せて秦に帰り秦の国王に推せんし

た。

その時に、范雎が秦王に、すすめたのが「遠交近攻」の策である。即ち、遠い斉、楚と仲よくして、近い韓、魏、趙を攻めるのである。

やがて、范雎は用いられて秦の宰相となった。そうしているうちに、魏の使いが秦へやって来た、その使いというのが外ならぬ須賈であった。

范雎は、ぼろぼろの着物で、旧知の須賈に会いに行った。

「やあ、范か。お前生きていたのか」と驚いて、飯を食わせ「お前は、素寒貧で困ってるようだなあ」と、綿入れの上着を与えた。

それから、范雎は須賈の車を運転して大臣官邸まで行き、「君が来たことを宰相に通じよう」と門へ、はいった。

須賈は、しばらく待っていたが、范雎は出てこない、門番に、「范雎はどうした」と尋ねると、門番のいうには

「范雎なんて来ませんよ。さっきおはいりになったのは我が国の宰相張様でござるぞ」。須賈は欺されたことを知って、恐れ、中へはいって謝罪した。

范雎は須賈を責め、「お前が死刑にされないのは、綿入れをくれて、昔の好しみを忘れていなかったからだ」といった。

范雎は諸侯の使いたちを招いて大宴会を催した。須賈の前には、切藁と豆とを混ぜたものを出した。つまり馬料を食わせた。

「須賈よ、お前が魏の国へ帰ったら国王に、こう告げろ、早く魏斉の首を斬ってこい、さもなければ、こっちから行って大梁（魏の都、今の開封）を占領するぞと」

須賈は帰国して、范雎の話を魏斉に話した。魏斉は出奔して、そして死んだ。

魏齊怒、笞二擊雎一、折レ脅拉レ齒。雎佯死。卷以レ簀、置二厠中一、使二醉客更溺一之。（魏齊怒って、雎を笞撃し、脅を折り歯を拉く。雎いつわり死す。巻くに簀を以ってし、厠の中に置き、酔客をして更るる之に溺せしむ）――史記・范雎伝

范雎は志を得て秦の宰相となったが、

「一飲之徳必償、睚眦之怨必報」（一飲の徳も必ずつぐない、がいさいの怨も必ず報ゆ）というやり方であった。「睚眦」とは、睨むこと。いつの頃やら、彼を睨んだというだけのことも忘れないで、怨みに思って仇討ちした。その代り一度、飯を食わしてくれたというくらいのことにも恩義を感じて、それを償った。

日本の股旅者が「一宿一飯の恩義」というが、由来は、この范雎にある。

乞骸骨（骸骨を乞う）

「乞骸骨」（がいこつ・を・こう）。

老臣が引退を願う時に、謙遜して使う言葉。老人だから、こんな古い言葉を使うのである。「元

老」などというもののあった頃には、しばしば用いられた。年寄って、骨と皮ばかり、役にも立たず、人間の廃物である骸骨だけが残っている、それを払い下げてもらって、故郷に葬るといった意味である。

医学生が骨骼を調べるために、骸骨をもらうことではない。

英語で、痩せた人のことをスケレトンという。新聞電報の原文のこともスケレトンというが、これに肉を付けて普通の文章に直すのである。

楚の項羽の参謀長は范増という老人。項羽にすすめて、漢の劉邦を殺させようとしたが、項羽は彼の計画を実行しない。それで天下の大勢は、もう決まった。漢のものだという見通しがついた。そこで、范老人、憤慨して辞職した。「乞骸骨」とは、彼がいいだした文句である。仙人みたいに干からびた老人だったろう。

范增大怒曰、天下事大定矣、君王自爲之、願賜二骸骨一歸二卒伍一。（范増、大いに怒って曰く、天下の事大いに定まる、君王みずから、これを為せよ。願わくは骸骨を賜いて卒伍〔平民〕に帰せん、と）——史記・項羽本紀。

蝸牛角上之爭（蝸牛角上の争い）

「蝸牛角上之争」。天下の形勢に関係のない小ぜり合い、大局に何ら影響を与えない小さな争い——を、蝸牛の角の上の争いという。

近頃は、西洋風の言葉のほうが、耳に聞こえやすく、感覚も新しいというらしく、「コップの中の暴風」などといって、議会における政党の楽屋の、意味もないいざこざ、空騒ぎを形容する。ア・ストーム・イン・ティー・カップという英語では、「茶わん」であり、これをティー・ポットともいう、これは「どびん」、日本語でコップといえばガラス製である。

『荘子』の「則陽篇」に、カタツムリの物語がある。蝸の左の角の上に、触という国があり、右の角の上に、蛮という国がある。両国が土地争いから開戦、戦死者数万という大戦争になったという。この物語には説明がついている、「天下は一蝸なり、今四海を以て大となす」だが、広大な宇宙にくらべると、極微量の世界、それを魏の中の一部分である梁、そのまた一部分である梁の中の王が戦争している——電子顕微鏡的事実にすぎない、というわけ。『ガリバー旅行記』にあるリリパット（小人国）の戦争の話に似ている。

唐の白楽天の「対酒」（酒に対す）と題する詩に「蝸牛角上、何事を争う。石火光中、此の身を寄す」と。太平記は、これをさらに孫引きして「蝸牛の角の上、三千界、石火の光の中、一刹那」と、お経の文句のように使っている。

和氏之璧（和氏の璧）

「和氏之璧」（かし・の・たま）。

立派な才能がありながら、一般に認められないのを「か氏の璧」という。

「あたら、和氏の璧も、あの審査員共の顔ぶれじゃ、認められないよ」とは、落選組への慰めである。

周時代、楚の卞和が、楚山で発見した宝玉である。玉磨かざれば光なしで、これは原石であった。

原石のことを璞という、大和言葉では「あらたま」という。翡翠は外に汚い皮をかぶっている。この皮を取れば中に美しい部分が収まっている。しかし、硬玉であるから、磨いて固い皮を取除くのは大変な労力がいる。そうした労力をかけて、中がつまらない石だったら大損である。そこで原石のまま鑑定して、中身が磨く労力に値するか否かの見当をつける。

こうした事を知らないと、中国の歴史や物語の「璧」の話は面白くない。

さて、卞和は璞を楚の厲王に献上した。厲王は「玉人」という専門家に目きかせたが、石ころに過ぎないという鑑定、卞和は詐偽罪で、左の足の筋を切られた。厲王が死んで、次の武王に、卞和は再び例の璞を献上した。玉人の鑑定は今度も石ころ、彼は右足の筋を切られた。

武王が死んで即位したのが文王。卞和は璞を抱いて楚山の麓で三日三晩泣いた。しまいには涙の代りに血が流れた。結膜炎にでもなったのだろう。「卞和泣玉」という。文王はそれを聞いて、訳を尋ねさせた。卞和のいうには「私が泣いているのは、足の筋を切られたためではなく、私が発見した宝玉を、ただの石ころだといって、貞士をインチキ扱いにするからである」と。そこで文王

は、その璞を磨かせたところ、立派な宝玉であり、「和氏之璧」と命名、天下の名宝となった。『韓非子』の「卞和篇」にある話。

楚人和氏得二玉璞楚山中一、奉而献二之厲王一、厲王使二玉人相レ之、玉人曰石也、王以レ和爲レ誑、而刖二其左足一、及二厲王薨武王卽位一、和又奉二其璞一而献二之武王一、武王使二玉人相レ之、又曰石也、王又以レ和爲レ誑、而刖二其右足一、武王薨、文王卽位、和乃抱二其璞一而哭二於楚山之下一、三日三夜、淚盡而繼レ之以レ血、王聞レ之使二人問一其故一、和曰、吾非レ悲レ刖也、悲二夫寶玉而題レ之以レ石、貞士而名レ之以誑、此吾所二以悲一也。王乃使二玉人理一其璞一而得レ寶焉、遂命曰二和氏之璧一。（楚人和氏玉璞を楚の山中に得、奉じてこれを厲王に献ず。厲王玉人をしてこれを相さしむるに、玉人曰く、石なりと。王、和を以て誑くと為して、其の左足を刖る。厲王薨じ、武王即位するに及び、和、又其の璞を奉じてこれを武王に献ず。武王玉人をしてこれを相しむ。又曰く、石なりと。王又和をもって誑くと為して其の右足を刖る。武王薨じ、文王即位す。和すなはち其の璞を抱きて楚山の下に哭すること三日三夜、涙尽きてこれに継ぐに血を以てす。王これを聞きて人をして其の故を問はしむるに、和曰く、吾は刖らるるを悲しむに非ざるなり、かの宝玉にしてこれに題するに石を以てするを悲しむ。貞士にしてこれに名づくるに誑くを以てす、此れ吾の悲しむ所以なりと。王すなはち玉人をして其の璞を理めしめて宝を得たり。遂に命じて和氏の璧と曰ふ）

「刖」（げつ）、足の筋を切る刑罰。

後に、この璧が趙の国に伝わり、秦の昭王が十五城との交換を申し込んだことにより「連城璧」といわれ、藺相如の手柄で「完璧」（五八頁参照）の言葉が生まれた。

苛政猛於虎（苛政虎よりも猛し）

「苛政猛二於虎一」（かせい・とらよりも・たけし）。

「かせい、とらよりも、もうなり」ともいう。

苛政は、むごい政治ということになっているが、どんなのが、むごい政治であるか。

「苛」という字は、「煩」とか「細」とかに近い。

「苛税」または「苛征」といって、税金に関係があるようである。

なぜ、虎よりも、おそろしいというか。これは『礼記』の物語である。

孔子が弟子たちを連れて山東省の泰山の麓にさしかかった。と見ると、ひとりの女が墓の前で泣いている。孔子が、なぜ泣くのかと尋ねると、その女がいう、

「私の家は狩人ですが、舅は虎に食われました。次に夫も虎に食われました。それから、またもや子供が、虎に食われて死にました。それで泣き悲しんでいるのです」

「では、なぜ、そんな恐ろしい土地を去らないのか」

「ここは税金が安いからです」

そこで、孔子は弟子たちにいった。

「どうだお前たち、ひどい税金というものは、虎よりも恐ろしいというわけだ」

『礼記』の「檀弓篇」にある話であるが、終わりの孔子の言葉は、小子識レ之、苛政猛二於虎一。（「小子これを識せ」とは「お前たち、よくおぼえておけ」ということ）

瓜田不納履（瓜田に履をいれず）

「瓜田（かでん）に履（くつ）をいれず」。

学生時代の同級生で役人をしている男がある。この男に、お土産を持っていったり、また、どこかで御馳走しようとすると、彼はその好意を拒絶して「瓜田に履をいれず――だからなぁ」という。旧友の好意であっても、それが贈賄の疑いを受け、誰かのメモにでも書かれて、汚職事件で引っぱられると困る……という場合に、この「瓜田の履」という文句を使う。

「李下の冠、瓜田の履」と、二つ続けて使うこともある。

「李」のなってる木の下で手を上にやって帽子を冠り直したり、メロンの畑の中で、腰をかがめて靴の紐を結びなおしたりすると、すもも泥棒やメロン盗人とまちがえられる。だから、こうした疑いの目で見られるような行動は慎む、という意味である。

『列女伝』に出ている話、斉の威王の第何号かの虞姫がいった言葉、「瓜の田を通り抜ける時には足が痛くても靴を脱いだり（または、はきかえたり）しない。李の園を通る時には、冠を整えない」これが元であるが、『文選』にある古い詩のほうがよく引用される。

君子防二未然一　不レ處二嫌疑間一　（君子は未然を防ぐ、嫌疑の間に処らず）
瓜田不レ納レ履　李下不レ整レ冠　（瓜田に履を納れず、李下に冠を整さず）

「納履」は、靴をはき代える――という説と、靴をとる――という説と二つある。どっちにしても疑われる。

畫餅（がべい）

「画餅」（がべい）。

「政府の社会政策は、項目だけ見ると実に立派なものであります。しかし、我々国民の欲するところは、その政策の実行である。実行の意志もなく、また実行が不可能なことは明らかであります。盛沢山の項目は、要するに画に描いた餅にすぎません……」と、これはある日のラジオのニュース解説である。

ラジオを耳で聞いて「ガベイ」では、何のことか判らないから、この漢語を「画に描いた餅」という。意味は明らかで、「画に描いた餅」は、本物の餅でないから、食べられない、腹のたしにならないということである。

いっそのこと「画に描いたビフテキ」といえば、もっと判り易いかも知れない。

漢文の「画餅」をラジオは和訳して「画に描いた餅」という。

「画餅」とは、食えないというところから実用にならない例えであり、転じてむだ、徒労の意味にも用い、「画餅に帰す」という。

三国時代の魏の文帝が盧毓という人を吏部尚書といって、今の内閣官房長官みたいなものに任命して、内閣を作ろうとした時の話。文帝は「お前のような人間だけを集めてくれ」、いろいろ、手腕のあるという評判の高い人間を文帝は好まなかった、「有名人を採用してはいけない、地面に餅の画を描くようなものだ、食べられないよ」といった。

莫レ取二有レ名者一、如レ畫レ地作レ餅、不レ可レ啖也。（名有る者を取るなかれ、地に画きて餅を作るがごとし、啖ふべからざるなり）――三国志・魏志・盧毓伝

「鍛レ氷為レ璧、不レ可レ用也」（氷を鍛りて璧〔環状の玉〕と為す、用うべからざるなり）というのも同じ意味。

鑿壁讀書（壁を鑿って書を読む）

「鑿レ壁読レ書」（壁をうがって書を読む）。

読書奨励は、螢の光、窓の雪であるが、そんな物で読書できるはずがなく、あまり実用的の話ではない。狡くて実用的の話に、「鑿壁読書」というのがある。

「穿レ壁引レ光（壁を穿って光を引く）」ともいう。『西京雑記』にある話。漢の匡衡は読書家だったが、長屋住まいの貧乏人、燈油を買う金がない、そこで壁に穴をあけて、隣の家の燈火によって読書した。長屋の有難さである。

ところが、その村に長者があった。読めもしないのに蔵書が多く、いわゆる「積んどく屋」だった。そこへ行って、ただ働きするから本を読ましてほしいと頼んだ。長者は感心して給金の代りに本をくれた。それで大学者になれた。後に彼は、元帝の宰相となった。

匡衡勤レ學、無レ燭、隣舎有レ燭而不レ逮、衡乃穿レ壁引二其光一而讀レ之、邑大姓文不識、名二家富多一レ書、衡乃與レ其客作而不レ求レ償、願二得一レ書遍讀一レ之、主人感歎、資給以レ書、遂成二大學一。（匡衡、学に勤め、燭なし、隣舎、燭あれどもとどかず、衡すなわち壁をうがち、その光を引いて之を読む、邑の大姓、文不識、家富み書多きに名あり、衡すなわち、それがために客作して償を求めず、書を得て遍く之を読まんことを願う。主人、感歎して資給するに書を以てし、遂に大学を成す）

畫龍點睛（がりょうてんせい）

「画竜点睛」（がりょう・てんせい）。竜の画を描いて、最後に「睛」（ひとみ）を描き入れるという意味。最後の肝腎な一点を仕上げて仕事を完成させること。

「せっかくの宴会も帰りの御土産がなくて、画竜点睛を欠くねえ……」などと、反対の意味に使う場合が多い。「画レ竜不レ点レ睛（竜を画きて睛を点ぜず）」で事を行なって、その要を欠くときに用いる。『水衡記』という書物にある物語。張僧繇という画家が金陵（今の南京）の安楽寺の壁に、四つの竜を描いた。見事なできばえであったが、四つの竜の目玉を白く描き残して、瞳を入れなかった。どうして、そんなことをするのかと尋ねられると、いつでも、こういうのであった。

「もし、この竜に瞳を入れると、いきなり飛び立ってしまうからだ」と。

「なあに、あんなでたらめをいっている、そんな馬鹿なことがあるものか」という皆の陰口が耳にはいった。そこで、チョウソウヨウ画伯は「しからば見ていろ」と、四つの竜のうち、一つの竜の瞳を入れた。しばらくすると低気圧が来て、電光、雷鳴のピカドンと共に、壁が、ぱっと破れて、くだんの竜は雲に乗って天高く登ってしまった。

しかし瞳を入れなかった残りの三つの竜は、どれも元のままの画としてじっとしていた。

それで、「画竜点睛」とは、詩や文章を作って、最後に一字あるいは一句を下して、全篇、それがためにいきいきと躍動するような場合に使う。

張僧繇于二金陵安樂寺一、畫二四龍于壁一、不レ點レ睛、每曰、點之卽飛去、人以爲レ誕、因點二其二一、須臾雷電破レ壁、一龍乘レ雲上レ天、不レ點レ睛者皆在。（張僧繇金陵の安楽寺において、四竜を壁に画き、睛を点ぜずして、つねに曰く、これに点ずれば即ち飛び去らんと、人以て誕〔でたらめ〕となす。因りて其の一に点ずれば、須臾にして雷電壁を破り、一竜雲に乗じて天に上る。睛を点ぜざる者は皆在り）

夏爐冬扇

「夏炉冬扇」（かろ・とうせん）。
「無用の長物、夏の火鉢と、冬の扇で、間の抜けたもんだ」
「夏炉冬扇」を、さかさまにして「冬扇夏炉」ともいう。
「扇」（せん）といっても、折りたたみ式の「扇子」（せんす）は日本の発明で、昔の中国の「扇」は、団扇（うちわ）である。
漢末の王充の『論衡』に

作二無益之能一、納二無レ補之說一、猶如二以レ夏進レ爐以レ冬奏レ扇、亦徒耳。（無益の能をなし、補うなきの説をいるるは、なお、夏をもって、炉をすすめ、冬をもって、扇をすすめるが如し、また、いたずらのみ）

孟子の「緣レ木求レ魚（きによってうおをもとむ）」（六四頁参照）が、キノボリウオというものがあるにしても一般世界に通用しないように、この「夏炉冬扇」も、世界的常識ではない。
スェーデンでは、まさに文字どおり、「夏炉冬扇」が普通のこと、季節に合ったことである。
北緯六十度七十度の北の国のこととて、夏は太陽の輻射熱で暑いが、二、三日も長雨が続くと寒くなる。が、さりとてスチームを通すほどでもない、電気ストーブで部屋を暖める、夏炉である。
冬は、往来こそ寒いが、室内は暖房装置、店の構えでも、ショーウィンドー式に、ガラス張りである。暖く湿度のある空気が、冷たいガラスに当たると氷って、内から外、また外から内が見えない。そこで、扇風機を回して絶えず空気を攪拌すると、ガラスが曇らない、「冬扇」である。

寒江獨釣

「寒江独釣」（かんこう・どくちょう）。
田舎の古めかしい宿屋に泊まると、床の間で、しばしばお目にかかるのが「寒江独釣の図」である。
小さな舟がただ一つ、蓑笠の人が釣糸を垂れている図柄。寒々と、いかにも物淋しく、旅愁を感じる。描くほうからすれば、簡単で手が省ける。大家に似たような名前のサインがある。これを描いて宿賃を稼いだり、少なくともチップ代りにする。
道具屋が「かんこう・どっきん」などというが、「かんこう・どくちょう」のまちがいである。
唐の柳宗元、字は子厚の五言絶句(1)。『唐詩選』にはないけれど、掛け物の画題として名高い。

(1) 五字で一句の漢詩が「五言」で、「絶句」とは四句から成るもの。従って全体で二十字の漢詩を、「五言絶句」という。

江雪　　こうせつ

千山鳥飛絶　　千山、鳥飛、とだえ
萬徑人蹤滅　　万径人蹤滅す
孤舟蓑笠翁　　孤舟、蓑笠の翁
獨釣寒江雪　　独り釣る、寒江の雪

「鳥飛、とだえ」を「鳥、とぶこと絶ゆ」と読む人もある。また「独り釣る、寒江の雪」を「独り寒江の雪に釣る」ともする。

どっちでもよろしい。第一、二、四句の「絶」（ぜつ）、「滅」（めつ）、「雪」（せつ）と韻をふんである詩の音楽的効果は、飜訳ではなくなってしまう。

一応の意味を知ってから、上から順々に下へと御経よみにすることを、おすすめする。今の北京語で読むのも面白いが、日本式の音（おん）は唐時代の発音に近いことも忘れてはならない。

「千山」と「万径」とは対句であって、共に「多くの」というだけの意味。「人蹤」は「人の足跡」。

柳宗元が中央から田舎に左遷された時の詩で、彼のやるせない気持を自然の景色にことよせて表わしている。世捨人の、のんきな「独釣」ではない。

画の中に詩があり、詩の中に画がある——という中国の詩や画を味わう手引きともなるのが、この「寒江独釣」である。

「蓑」（みの）の音は「すい」ではなく、「さ」である。

雁書

「雁書」（がんしょ）。

「雁信」、「雁帛」、「雁素」（素は白い絹）、いずれも同じ意味。「雁の、たより」とも「雁の手紙」ともいう。

漢の蘇武がシベリアから、布に手紙を書き、雁の足に結び付けて放したのが、漢の皇帝にとどいたという物語。

漢の武帝の天漢元年（西暦前一〇〇年、ケーザルの生まれた年）蘇武が捕虜交換のため匈奴に使した。匈奴は捕虜を、なかなか返さない。それのみか蘇武も捕われてしまった。降参して家来になれというが従わない。穴ぐらの中に入れられ、飲食も与えられなかった。そうすれば降参するものと単于は考えた。

しかし、蘇武は雪と毛布をかじって耐え、数日経っても死なない。よほど頑丈な男であった。匈奴は「こりゃ、普通の人間ではない」と驚き、今度は彼をバイカル湖畔(2)に移し、雄羊を飼わせ、それが子を生んだら帰国させるといった。野鼠や草の実を食って頑張った。その間、「節」（せつ）と

(1) 紀元前四世紀の末から後一世紀にかけて、モンゴル地方で活躍した遊牧騎馬民族。(2) ソ連、シベリア中南部にある淡水湖。

いって、漢の皇帝から賜った使のしるしの棒を手放さない。「節」は牛の毛を棒にぶら下げたものであるが、牛の毛がすっかり落ち、桿だけになってしまった。こうして、シベリアに止まること十九年、昭帝の始元六年になって、両国の和議なって帰国することができた。匈奴は、蘇武は死んだと発表したが、雁の手紙で生存が判っていたので、匈奴も彼を返した。行く時には壮年の彼も、帰国した時には髪が真白であった。

こんな苦労をしても八十歳まで生きたというから、超人的に丈夫な人だったろう。

唐　李白

蘇武在二匈奴一　蘇武、匈奴に在り
十年持二漢節一　十年、漢節を持す
白雁上林飛　白雁、上林に飛び
空傳一書札　むなしく伝う一書の札
牧羊邊地苦　牧羊、辺地に苦しみ
落日歸心絕　落日、帰心絶ゆ
渴飲二月窟水一　渇しては、月窟の水を飲み
飢餐二天上雪一　飢えては、天上の雪をくらう
東還沙塞遠　東還、沙塞遠く
北愴二河梁別一　北、河梁の別を、いたむ

泣 把二李 陵 衣一　　泣いて李陵の衣をとり
相 看 涙 成レ血　　相みて涙、血を成す
（「東還沙塞遠」は、東の方、漢に帰ろうとしても、砂漠が広く広がり、その間にはとりでがあって、行くことがなかなか困難であるということ）

李陵は漢の将軍、匈奴を征して敗れ、捕われて降った。だから、帰ることができなかった。蘇武が、いよいよ帰国しようとする時、李陵と蘇武が、橋の上で別れた。これを「河梁別」といい、唐人の詩の題となる。「河梁」は、川に掛けた橋のこと。李陵と蘇武は、夕日の落ちようとする川の橋の上で、互いに詩を作って泣いて別れたという。その時の李陵の詩の始めの文句が「携レ手上二河梁一」（手を携えて、河梁に上る）であるところから、「河梁吟」というのが送別の歌という意味に使われる。

邯鄲之歩（邯鄲の歩）

「邯鄲之歩」（かんたん・の・ほ）。

日本の昔からの伝統あるやり方を軽んじて、アメリカあるいはソ連などの西洋のやり方を学んでも、西洋とても、それぞれ伝統があって、学ぶのは難しい、表面だけを真似ても、どうにもならない。よそのものを真似してるうちに、自分の本来のものも駄目になる――といったような保守的な

仁が、新し物好きの連中を苦々しく思う時に、この「かんたんのほ」とか「かんたんのあゆみ」だという。

おのれの本分を捨てて、他を真似る時は、元のものと、新しいものと、二つとも駄目になるという話である。

『荘子』の「秋水篇」にある物語。

燕という開けない国の、そのまた片田舎の奇陵という所の少年が、文明国である趙の都である邯鄲にやってきて、文化人の歩き方を羨み、その真似をして、まだ十分に熟練しないうちに、郷里に帰ることとなった。都のステップも、まだできないのだが、田舎の歩き方は忘れてしまっている、そこで、這いながら帰った。

『荘子』には「行を邯鄲に学ぶ」とあるが、この昔話を引用した『後漢書』には「歩を邯鄲に学ぶ」とある。

不レ聞三夫壽陵餘子之學二行於邯鄲一與。未レ得二國能一、又失二其故行一矣、直匍匐而歸耳。（かの寿陵の余子の、行を邯鄲に学びしを聞かずや。未だ国能〔その国のおくにぶり〕を得ざるに、また其の故行を失ひ、ただ匍匐して帰るのみ）
――荘子・秋水篇

昔有下學二歩於邯鄲一者上、未レ得二其髣髴一、又復失二其故歩一、遂匍匐而歸耳。（昔歩を邯鄲に学ぶ者有り、未だその髣髴を得ざるに〔まだおおよその所すら充分でないのに〕またまた其の故歩〔もとの歩き方〕を失ひ、遂に匍匐して帰るのみ）
――後漢書・班固伝

完璧

「完璧」。カンペキという言葉が盛んに使われる。新聞のスポーツ欄にもしきりに出てくる。学生の流行語でもある。カンペキとは疳癖（癇癖）と書いて神経質で、わがままな殿様などを形容する講談言葉であった。

学生などしょっちゅう、必要以上に、カンペキという言葉を使っていながら、いざ「完璧」という字を見せられるとカンギョクなどという。璧というのは玉の一種、環状をなしている玉。「ぎょく」というのは、丸い、いわゆる「たま」とは限らない、翡翠、瑪瑙などの半透明な石のこと。「璧」は、詳しくは、環の太さが内孔の径の二倍あるものである。（ついでにいうが、環とは、輪の太さと内孔の径が同じもの）だから、璧は環よりも穴が小さい。

さて、「完璧」だが、漢学のほうでは二つの意味がある。第一は「完」が動詞の場合。第二は完が形容詞の場合。

第一では、人から借りたものを大切に返すこと。戦国時代、趙の藺相如という外交官の話から来ている。秦の昭襄王は武力で趙に迫り、趙王の宝である「和氏の璧」と十五城との交換を申しこんだ。藺相如が璧を擁して秦に使した。昭王は十五城を与えるつもりはなく、璧をただ取りした。藺相如は、「その璧に疵があるから、しらべる」といって手に取り「柱にぶっつけて、璧を壊して、自分の頭を壊す」といった。そしてこっそり使者に璧を持ち帰らせた。これが「完璧」、璧を

完うす——である。完璧而返（璧を完うして返る）——史記・藺相如伝

第二の「完璧」は、完全な璧、すなわち全然無疵の璧の意味であるが、こんな制限された漢字の言葉を使うなら、その故事くらい知っているべきだと、いささか講義めいて恐れ入る次第。欠点がないとか、申し分がないとかの意味なら「完全」で完全だ。

管鮑交（管鮑の交わり）

「管鮑交」（かんぽう・の・まじわり）。

管仲と鮑叔の交わり。このふたりの親交は東洋史では模範とされている。

両雄、並び立たずということは古今東西の通則。共同の敵がある場合には連合するが、その敵が亡ぶと両人が敵となる。

この原則の例外として、西洋史ではギリシアのエパミノンダスとペロピダス(1)であるが、東洋史では、この管仲と鮑叔である。

周の時代。戦国になる前が、春秋時代(2)といって、国王の権威は地に落ち、北の方からは野蛮人が侵入してくる。その時に当たり、「覇者」として「尊王攘夷」を実現したのが斉の桓公、その参謀

(1) エパミノンダス（前四一八～三六二）もペロピダス（前四一〇～前三六四）も、古代ギリシア、テーベの軍人にして政治家。ふたりの間の友情は長く語り伝えられている。(2) 紀元前七七〇～四〇三年の周の衰退期の時期。この後の時代が戦国時代。

長が管仲である。

斉の殿様の家に、お家争いがあった。糾という公子の家来が管仲。小白という公子の家来が鮑叔であった。管仲は小白を暗殺しようとしたが、矢が、小白の帯のバックルに当たって失敗したことがあった。

後に、小白が殿様となった、これが桓公である。その時、桓公は、鮑叔の推薦で管仲を家老にした、「怨みを置いて、これを用う」（置レ怨而用レ之）のであった。

管仲と鮑叔は若い時からの親友、いっしょに商売をしたが、管仲が儲けの多くを取っても鮑叔は「管仲は貧乏だから当り前だ」といった。いっしょに戦争に行った時、管仲は三度も逃げた。すると「管仲には老母があるからやむを得ない」と鮑叔はいった。

そして、敵方の者を自分の主人に推薦するのであった。管仲は感激して「我を生む者は父母、我を知るものは鮑子」（生レ我者父母、知レ我者鮑子）といった。――史記・管晏列伝

管仲のやった事、すなわち自分の主人の死に殉ずることもしないで、敵の桓公に仕えたのを非難したのに、孔子は弁護している、「管仲がいなかったら、文明も亡びて、我々は野蛮人の風俗になり、髪を振り乱し、着物を左り前にしているだろう」と、管仲が中国文明を擁護した大功をたたえ、少しぐらいの事は問題でないとした。

微二管仲一、吾其被レ髪左レ衽。（管仲、微りせば、吾それ髪を被り、衽を左にせん）――論語・憲問篇

「微」なかりせば、というのを、漢学者は「なかつせば」という読癖がある。

唐の杜甫も詩で、管鮑の交わりをたたえている。

貧交行（ひんこうこう）

翻レ手作レ雲覆レ手雨　手を翻せば雲となり、手をくつがえせば雨となる
紛紛軽薄何須レ数　ふんぷんたる軽薄なんぞ数ふるを須ひん
君不レ見管鮑貧時交　君見ずや管鮑、貧時の交はりを
此道今人棄如レ土　この道、今人、棄てて土の如し

ちょっと掌を動かすと雲となり、掌を下に向けると雨となる、たちまちの間に変わる、いわゆる「お天気」というもので、頼みにならない。この詩を作った時の杜甫は文官試験に落第して困っていた。昔の友達も知らん顔して相手にしてくれなかったという。こうした交友の道を、「近頃」の人間は、ちりあくたのように捨ててしまっていると歎いている。「近頃」といっても、今から千何百年もの昔のことであって、奈良の大仏様ほどの古さの「近頃」である。

騎虎之勢（騎虎の勢い）

「騎虎之勢」（きこ・の・いきおい）。

虎に乗って走り出すと、その勢いが急でブレーキがきかないから、下りることができない、いったん、やり始めたら途中でやめられない、という意味。

「騎虎の勢、一徹に、とどまり難く見えにけり」である。

隋の高祖楊堅は、始め周（といっても、孔子のいた古代の周ではなく、南北朝時代(1)の周）の宣帝ににらまれていたので、小さくなっていた。

宣帝の皇后は楊堅の娘である。宣帝が死んだので、楊堅は宮中へ入ってきて、皇后に代わって、勝手に政治をとり百官に命令した。皇后は家来を使わして告げさせた。大事は既定事実となってしまった、こうなったからには、騎虎の勢いだから、もう下りることはできません、頑張ってください、と。いざとなると、女のほうが思いきったことをするというのは、これだ。楊堅は毒食わば皿まで式に、とうとう周の天下を奪って、隋の高祖皇帝となった。

當二周宣帝崩一、高祖入居二禁中一、總二百揆一、后使二人謂二高祖一曰、大事已然、騎虎之勢不レ得レ下、勉レ之。（周の宣帝崩ずるに当りて、高祖入りて禁中に居り、百揆〔百官〕を総ぶ、后、人をして高祖に謂はしめ曰く、大事すでに然り、騎虎の勢、下るを得ず、之を勉めよと）

——隋書・独孤皇后伝

(1) 四二〇～五八九年の、揚子江流域およびその南部地方を支配した南朝と、華北地方を支配した北朝とが対立した時代。五八九年、隋の全国統一をもってこの時代は終わる。

疑心暗鬼

「疑心暗鬼」（ぎしん・あんき）。詳しくいうと「疑心生二暗鬼一」（ぎしん・あんきをしょうず）。『列子』という二千何百年も昔の書物にある言葉「諺曰疑心生二暗鬼一（諺に曰く疑心暗鬼を生ずと）」だから、ずいぶん古いことわざである。自分の心に疑うところあれば、種々の恐ろしい妄想を生ずるという意味。「心迷いて暗鬼を生ず」ともいう。

「鬼」を「おに」と読むのは正しくないようである。「おに」とは、いわゆる赤鬼、青鬼のたぐいで、恐しい顔をして頭に角が生え、虎の皮の猿股をはき、鉄棒を持っているものと相場がきまっている。

漢文でいう「鬼」（き）は、そんな化物ではない。先祖の鬼（き）とは、先祖の魂（たましい）のことである。「鬼」とは目に見えない無形のものらしい。「鬼神」（きしん）と続けて熟語になるが、陽の魂を「神」（しん）といい、陰の魂を「鬼」（き）ということになっている。だから、「護国の鬼」の場合、「ごこくの・おに」と読むべきではなく「ごこくの・き」とすべきだと教える先生もある。

「神出鬼没」は、変化が計り知られないことであるが、いわゆる神様が出たり、「おに」が消えたりすることでは、ないようである。

「鬼哭啾啾」とは多数の人が枕を並べて殺された場合に使う古い形容であるが、これは杜甫の「兵

車行」という長詩の中の一節にある、「君、見ずや、青海のほとり、古来白骨、人の収むるなく、新鬼は煩冤し、旧鬼は哭す、天くもり雨湿い、声啾啾」。

君不レ見青海頭　古来白骨無二人収一
新鬼煩冤旧鬼哭　天陰雨湿聲啾啾

緣木求魚（木によって魚を求む）

「緣レ木求レ魚」（木によって魚を求む）。

魚は川へ行って求むべきもの。木に登って求めるのが蟬なら話が判るが、それで魚を求めるというのは見当違いである。「勉強もしないで、映画を見に行き、試験にパスしようなどとは、木によって魚を求むるがごとしだ」と使う。

この言葉は孟子が斉の宣王と政治論をやってる時に、孟子がいったもの。

手段と目的が合わないから不可能だ——という時に「緣レ木求レ魚」という。

宣王の目的は、分裂した周の天下を統一して四方の野蛮人を中国文化で感化しようというのであった。そして、その手段として、富国強兵を致して、武力統一を考えていた。

そこで、孟子が、そうした大きな目的なら、まわりくどくても仁政を行なわなければだめだ、一の武力で八の武力を抑えるのは物理学的に無理である。天下の統一を武力で計ろうとするのは「猶二緣レ木而求レ魚一也」（なお木によって魚を求むるがごときなり）といった。

（1）もだえ苦しむこと。

孟子は日本の有明海にいる「むつごろう」を知らなかった。「むつごろう」なら、岸の杭にへばりついてるから木によって求めることができる。また南洋には「木登り魚」というのがいる。

欲下辟二土地一、朝二秦楚一、莅二中國一而撫中四夷上也。以二若所レ爲、求二若所レ欲、猶二緣レ木而求レ魚也。（土地をひらき、秦楚を朝せしめ、中国に莅んで、四夷を撫せんと欲するなり。かくのごとき〔若〕の為すところを以て、かくのごときの欲するところを求むるは、なお木によって魚を求むるがごときなり）——孟子・梁恵王篇上

附驥尾（驥尾に付す）

「附二驥尾一」（きび・に付す）。

「先輩の驥尾に付しまして……」とか、「なんだ、あいつ、他人の驥尾に付して……」とかいう。

「驥」は一日に千里を行くという伝説的の駿馬のこと。

「附驥尾」とは、蠅が駿馬の尾に止まって、しがみつくだけの努力で一日に千里を行くこと。それから、すぐれた人に付き従うこと、また尻馬に乗ることである。先輩を立てて謙遜したり、また他人を軽蔑したりする時に使う。

『史記』の「伯夷伝」にある言葉。

顔淵雖二篤學一、附二驥尾一而行益顯（顔淵、篤学なりといえども、驥尾に付して、行ますます顕る）

顔淵という人は孔子の弟子である。篤学だといっても、孔子の驥尾に付して、その行が名高いのである。

蒼蠅之飛、不レ過二十歩一、自託二騏驥之尾一、乃騰二千里之路一、然無レ損二於騏驥一、得レ使二蒼蠅絶レ群也。（蒼蠅の飛、十歩に過ぎず、自ら騏驥の尾に託して、すなわち千里の路をかける、しかれども、騏驥に損するなく、蒼蠅をして群を絶たしむるを得るなり）

「騏驥」は一字ずつでも同じ意味。

「展二驥足一」（驥足をのばす）とは、すぐれた才能を存分に働かせること。三国の呉将魯粛が、劉備に龐統を推せんした手紙から。彼は「非二百里才一」（百里の才に非ず）、知事では役不足だから「展二其驥足一」（その驥足を展ば）してやれとある。

「驥服二塩車一」（驥、塩車に服す）。名馬が塩を運ぶ車を引いているということで、賢士の賤役に服するたとえ。『戦国策』にある文句。

「老驥伏櫪」老いた名馬が厩の根太に寝ること。世に用いられない賢者が徒らに凡人の間に年をとるたとえ。魏武帝の詩の文句から。「志在千里」（志、千里に在り）と続く。

杞憂

「杞憂」（きゆう）。「かかる政策をとっていては、当然インフレとなることを我が輩は杞憂するものである」と、卓を叩く、これは選挙の応援演説などでよく聞く文句である。

「心配にたえない」とか「憂うるものである」とか、いえば判るところを、それでは力が入らないというのだろう、「杞憂」という言葉を使わないと演説ではないと考える向きがあるようだ。当然たるべきものを心配するのは「杞憂」ではない。

「杞憂」とは、無用の心配、取越苦労のことである。

周時代の『列子』という本の「天瑞篇」にある物語。

杞という国に、とても心配性の男がいた。天が崩れ落ちはしないかと不安のあまり食も進まず、おちおち寝ることもできなかった。天という物は丸屋根ではないのだから決して崩れてこないと教えられて、やっと安心。

ところが今度は、大地が崩れやしないかと心配し始めた。「大地は固い岩でできていて崩れる心配はない」と教えられるまで安心しなかった。こうした調子で、心配しなくてもすむのに心配するのを「杞憂」というのである。「杞人の憂」ともいう。

ところで、原子爆弾、水素爆弾、そのほか、もろもろの新しい爆発力が発明されつつある現代に

あって、杞憂必ずしも杞憂ではなくなったかの感がないわけでもない。杞人の憂と常人の憂との境は、何をもって区切るかは難しくなってきた。

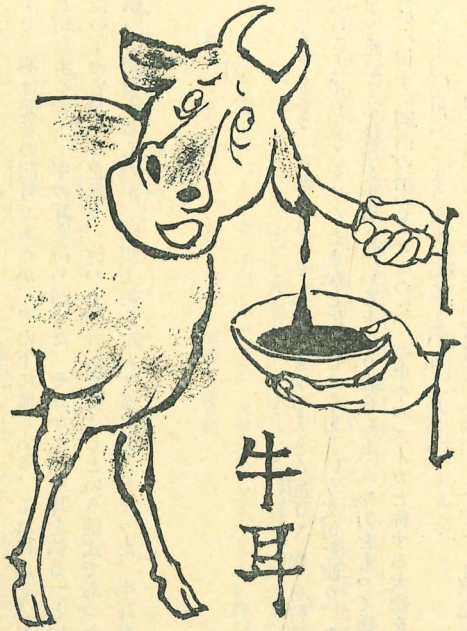
天地が裂け人類が滅亡するということが「杞憂」に終わることを願うや切なるものがある。

杞國有下人憂二天崩墜一、身無二所レ寄、廢二寢食一者上。（杞国に人の天の崩墜して身の寄る所なきを憂へ、寝食を廃する者有り）——列子・天瑞篇

牛耳

「牛耳」（ぎゅうじ）。「牛耳を執る」（執二牛耳一）というが、これを略して「牛耳る」と、ら行四段の動詞とする。団体や党派のなかで、リーダーとして事実上の支配者となることであり、仲間のうちで幅をきかせることでもある。「何々党は急進派が牛耳を執っている」などという。

誰かにいばられて、こっちがすっかり参ってしまった時に「何々君に、すっかり牛耳られちゃった」ともいう。「牛耳る」という言葉は旧制の高等学校生徒のスラングが一般に用いられたもの。明治、大正の学生には、まだ古い漢文が重要視された証拠である。『左伝』という古い歴史書の定公八年の条と、哀公十七年の条に、この「牛耳」の話が出ている。西紀前五世紀ごろ、春秋時代といって、中国が多くの諸侯の国に分かれて、戦争と平和を、くり返していた。ちょうど今の世界のように、同盟条約や平和会議が各国の間で、いろいろと結ばれた。今なら同盟条約の調印式という



ところであるが、昔は、諸侯間の盟には、牛の耳を割いて血を取り、その血をすすって盟の証拠としました。

盟という文字で、明は発音の記号であるが、その下に皿がある。これは血を入れる器らしい。その同盟の儀式を司会する者が、牛の耳を持ち回った。それから「牛耳を執る」という文句ができた。始めは、位の下の者が牛耳を執り、位の上の者が監視するという儀式であったようであるが、後には牛耳を執って司会するものが、同盟条約を左右する実力者となった。牛耳を執るものが「盟主」となった。

牛刀

「牛刀割レ鶏」（ぎゅうとう、にわとりをさく）。牛を切る大きな庖丁で鶏を料理する。小さいことをするのに大げさな道具立てをするときなどに、この牛刀という文句を使う。また人間を牛刀に見立てて、大事を処置する技量を小事に用いるという場合にも、「牛刀をもって鶏を割く」という。「竹槍や火炎びん相手に国内の治安を守るのに、戦車やバズーカと称する大砲を使うのはおかしいよ、鶏をさくに牛刀を用いるようなものだ」という人がある。

「鶏を割くになんぞ牛刀を用いん」とは孔子の言葉で、『論語』にある。孔子が弟子たちを連れて、武城という小さな都会に来た。そこには子遊という弟子が代官をしていたのだったが、まるで天下を治めるような本格式の政治を行なっていた。

そこで孔子が「鶏をさくに……」といったのである。すると子遊がいった、「私は先生に習ったとおりを、ベストを尽くしてやってるつもりですが、」孔子が弟子どもにいった「これは、やられた、子遊のいうのが正しい、さっきの言葉は、あれは、じょうだんだ」と。

子之二武城一、聞二絃歌之聲一、夫子莞爾而笑曰、割レ雞焉用二牛刀一、子遊對曰、昔者偃也、聞二諸夫子一、曰、君子學レ道則愛レ人、小人學レ道易レ使也、子曰、二三子、偃之言是也、前言戲レ之耳。（子、武城に之き、絃歌の声を聞く。夫子莞爾として笑ひて曰く、「雞を割くになんぞ牛刀を用ひん」と。子遊対へて曰く、「昔、偃（子遊の名）や、これを夫子に聞けり、曰く、君子は道を学べば則ち人を愛し、小人は道を学べば使い易きなり、と」と。子曰く、二三子（お前たち、と弟子たちに呼びかけたことば）、偃の言是なり、前言はこれを戯れしのみ」と）——論語・陽貨篇

朽木不可雕（朽木えるべからず）

「朽木不レ可レ雕」（朽木・えるべからず）。

「雕」（ちょう）は「彫」と同じ。

朽ちた木は彫刻することができない——という意味である。朽ちた木に彫刻してはいけない——という意味ではない。

処置なし、手のつけようがないと、匙を投げることである。

これは孔子の言葉であって、俗に「腐木は、彫るべからず」というが、それはまちがい。「腐木」でも「朽木」でも同じようなものだが、「腐木」のほうは『漢書・劉輔伝』にある言葉である。

「腐木不レ可二以為一レ柱、卑人不レ可二以為一レ主」（腐木は、もって柱となすべからず、卑人はもって主となすべからず）、腐った木は柱には使えないと、卑人が主となれないのにたとえられている。

『論語』の「公冶長篇」のほうは、「朽木不レ可レ雕也、糞土之牆、不レ可レ杇也」

糞土の牆は、ぼろぼろの土で作った壁。「杇る」は上塗りすること。「糞土の牆はぬるべからず」。「朽木」と「糞土牆」を合せて「朽木糞牆」という。

宰予晝寢。子曰、朽木不レ可レ雕也。糞土之牆、不レ可レ杇也。於レ予與何誅。（宰予昼寝ぬ。子曰く、朽木――、糞土之牆――、予においてか、何んぞ、せめん）

「宰予」は孔子の弟子。「昼寝」は「ひるね」であるが、「ひるね」くらいのことで、孔子が匙を投げて「もう責めない」というのは、どうしたものであろうか。

そこで、この「ひる寝」を「昼寝」と読んで、簡単な「ひるね」ではなく、複雑な「ひるね」であろうと、いろいろに想像されている。

それにしても、「あまり派手な昼寝は、やめたほうがいいだろう」くらいで、笑って、すみそうなものと思うのだが。

孔子も、何か虫の居どころが悪かったのだろう。

懸牛首賣馬肉（牛首を懸けて馬肉を売る）

「懸二牛首一売二馬肉一」（牛首を懸けて馬肉を売る）。

「羊頭狗肉」と同じように、看板と商品が違っていること。

「牛首馬肉」のほうは、政府の命令と、政府の行なっていることが違っている場合に用いる。

戦国時代の話。斉の霊公は、いささか変態で、男装の麗人を好んだので、宮中の婦人に男装させた。現在のスラックス姿の女性みたいなもので、これが一般の流行となってしまって、男女の区別がつかなくなった。

そこで霊公は、これは困ったものだと考えて、女性の男装は、これを厳禁す、という命令を布告した。

しかし、宮中は別で、霊公は、美人に男装させて楽しんでいた。

世間では禁令にもかかわらず、女性にして男装のものが多い。霊公は、晏子という賢い人に、女性の男装が多くて困ったものだ、禁令を出しても効き目がないといった。その時の晏子の答えが、次のごとくである。

「内では女の男装を奨励しておきながら、外で、それを厳禁だというのは、

猶下懸二牛首于門一而売中馬肉於内上也（なお牛首を門にかけ、而して馬肉を内に売るがごとし）

内でも厳禁すれば、外でもやめるでしょう」。『晏子春秋』に書いてある話。

漁父之利（漁父の利）

戦国時代の話。趙の国が燕の国を攻めようとした。

燕では攻められると困るので蘇代という使いを趙の王様のもとにおくった。蘇代が趙王に物語ったのが「漁父の利」の話である。

この物語で戦争を取りやめたのだからたいしたもの。

「きょう、私が、こちらへ来る時に国境の川を渡りました。ふと見ると、大きなハマグリが砂地に出て、貝の口をあけて、日なたぼっこをしているところに、カワセミ（一説に、シギともいう）がやってきて、口ばしでハマグリの肉に食いつきました。ハマグリは急に口をしめて、カワセミの口ばしを固くはさみました。カワセミはハマグリの肉をはさみ、ハマグリはカワセミの口ばしをはさみ、両方とも頑張って放しません。そこへ漁父（漁師）が来て、これはしめた、と両方を取っていきました。いま、燕と趙とが、戦争をすれば、持久戦になるでしょう。そして両方とも国力を弱めた時に、あの強い秦の国が漁父となって、やすやすと両方の国を取ってしまうでしょう」と述べた。

趙王はなるほど、そうだと、燕に戦争をしかけることをやめた。——戦国策・燕策

ふたりがつまらない争いをしていると、結局、第三者に、うまうまと、してやられることを「漁

父の利」といい、「あいつに漁父の利をしめられた」などという。

「ギョフの利」というのを「やかましい漢学者は「ギョホの利」と発音する。カワセミは「鷸」、ハマグリは「蚌」、それで「鷸蚌之争」あるいは「鷸蚌相持」ともいう。

口有蜜腹有剣（口に蜜あり腹に剣あり）

「口有レ蜜腹有レ剣」（口に蜜あり、腹に剣あり）。

見かけは柔和であるが、その実は陰険な人間のこと。蜜蜂といえば、西洋では勤勉を表わすことになっているが、中国では李林甫という男にたとえられて、人を刺すほうに重きを置いている。

唐の玄宗の宰相李林甫は、皇帝の左右に媚事して、上の意を迎合し、もって寵を固うし、言路を杜絶し、聡明を掩蔽した。

御史といって、皇帝に意見を申し立てる役目の官吏を集めて「皇帝の行列の馬を見ろ、一たび鳴けば、御役目御免になるではないか」と、おどかした。

自分より才能のある者を妬んで、それを排斥するという陰険な性質。「口有レ蜜、腹有レ剣」と、いわれた。夜、「偃月堂」に独坐、沈思するところあれば、その次の日には必ず誰かが殺された。こんな男が宰相を十九年もやっていて、「養二成天下之乱一」（天下の乱を養成）した。

李林甫爲レ相、尤忌二文學之士一、或陽與レ之善、陷以二甘言一、而陰陥レ之、世謂林甫口有レ蜜腹有レ剣。（李林甫、相となる、もっとも文学の士を忌む、あるいは、陽にこれと善くし、くらわしむるに甘言を以てし、而して陰にこれを陥る、世にいう、林甫、口に蜜あり、腹に剣ありと）——通鑑綱目

國破山河在（国破れて山河あり）

「国破山河在」（国破れて山河あり）。

「国破れて山河ありというが、その山河すら、全国いたるところに外国軍の基地がある、富士山の裾野も演習地にされている、国破れて山河なしか」などというのを聞く。

唐の杜甫の詩で名高い文句である。芭蕉も『奥の細道』の平泉のところで、この詩を引用している。

「国破山河在」、安祿山の(1)反乱によって、唐の都が破壊された時の有様である。廃墟に草木が繁っている。

春望

國破山河在　城春草木深　　国、破れて山河あり、城、春にして草木、深し、
感レ時花濺レ涙　恨レ別鳥驚レ心　　時に感じて、花にも涙を濺ぎ、別を恨んで、鳥にも心を驚かす、

(1) 唐時代の人で、七五五年、范陽で挙兵し、一時洛陽で皇帝を自称した。

烽火連三月一家書抵二萬金一　烽火、三月に連らなり、家書、万金にあたる、
白頭掻更短　渾欲レ不レ勝レ簪　白頭、掻けば、さらに短く、すべて簪に、たえざらんと欲す。

感時――時勢の非なることに感じて。
花濺涙、鳥驚心――花、涙を濺ぎ、鳥、心を驚かす、という読み方、つまり解釈もある。どっちにしても、ノイローゼ的な状態なのであろう。平時なら心を楽します花と鳥であるのに。
烽火――のろし、狼煙、敵の来襲の合図。
連三月――三カ月も続く。
家書――家人からの手紙。家人からの手紙は万金の値打がある。万金を出しても家書が欲しい。この場合、家人の消息が絶えてるのを示す。
渾欲不勝簪――かんざしを差すことすらできないほどである。簪とは、冠を止めるヘヤピンのこと。

敬遠

「敬遠」とは読んで字の如く、敬い遠ざけることである。『論語』にある孔子の言葉から来ている。「敬二鬼神一而遠レ之」これを「鬼神を敬して、これを遠ざく」と読むことになっている。
漢文で「鬼」（き）というのは、画によくある角を生やし、虎の皮のふんどしをして金棒を持っている、あの「おに」ではなく、死んだ人の、たましい。まあ、鬼神と二つ合わせて神様と思えば、わかりやすい。
神様などというものは、まあ尊敬して遠ざける、もっと詳しくいうと、近づいて汚してはならない――という意味のようである。
ところがこの孔子の言葉をわざと曲解、あるいはよく知らないで誤用する。
表面は尊敬するふりをして、その実は厄介者扱いにして遠ざけることに使われる。
「敬遠主義」などというのも、はれ物扱いにすることである。名誉総裁とか顧問とかいういかにも尊敬したような偉そうな名前を奉って、実際の仕事から遠ざける。「これに遠ざかる」ではなく「これを遠ざける」である。「敬遠される」というのはけむたがられることである。
それほど昔でもないころ、どこの学校にも御真影(1)というものがあった。校長室などに置いて汚したり焼いたりしたらたいへん。久米正雄(2)の父は御真影が焼けたので自殺した何人かの学校長のひとりであったという。運動場のはるか向こうの方にコンクリートの奉安所というのを作るのが各学校の常識となった。これはまさに文字通りの「敬遠」である。奉安所なるものは、要するに、ていの良い不燃性隔離物置きであった。

樊遅問レ知、子曰、務二民之義一、敬二鬼神一而遠レ之、可レ謂レ知矣。（はんち知を問う、子曰く、民の義を務め、鬼神を敬してこれを遠ざく、知というべし）――論語・雍也篇。

（1）天皇・皇后の写真。（2）大正から昭和にかけて活躍した作家。昭和二十七年没。

挂冠（けいかん）

「挂冠」（けいかん）。

新聞などを見ると、大臣が辞職する時に、この「けいかん」というのを使う。「桂冠」と誤記あるいは誤植されることが多い。高官の冠だから、月桂冠という西洋式のものと混同されがちである。

「挂」とは懸けること。「挂冠」というところを「解冠」ともいう。

漢の王莽という政治家は賢人であるという評判が高く、人気のあったのを利用して、後には化の皮を脱いで、漢の朝廷を奪った。

その王莽が、まだ猫をかぶっていた頃の話。逢萌という学者がいた。官吏であった。その頃、王莽が自分の子供を殺した。逢萌は、友達に語った。「三綱つまり君臣、父子、夫婦の三つのあいだがらを保つ道義がなくなった、今のうちに逃げないと、禍がほかの人間にも及んでくるよ」と、たちに、官吏のユニフォームの冠の紐を解いて脱ぎ、それを東都の城門に挂け、家族を引き連れて、舟に乗り遼東へ逃げてしまった。

解レ冠挂二東都城門一、將二家屬一、浮レ海客二於遼東一。（冠を解きて東都の城門に挂け、家属をひきいて、海に浮かび遼東に客となる）——後漢書・逢萌伝

もっと大臣をやっていたいのを無理にやめさせられて、「挂冠」もないものだ。自分のほうから御免こうむって辞職することが「挂冠」である。

雞口牛後

寧爲二雞口一、勿レ爲二牛後一。——史記・蘇秦伝

「鶏口牛後」（けいこう・ぎゅうご）。鶏の口ばしと、牛の尻尾。鶏口とは、小さいものの上に立つこと。牛後とは大きいものの下につくこと。

戦国時代の雄弁家蘇秦は東洋のデモステネス(1)であるが、この蘇秦の言葉から来ている。「むしろ、鶏口となるも、牛後となるなかれ」（寧爲二鶏口一、勿レ爲二牛後一）を略したのが「鶏口牛後」である。

小企業の社長と、大会社の平社員とどっちがいいか。これは簡単には答えられない。サラリーマン根性では、昔の言葉をひっくり返して「むしろ牛後となるも、鶏口となるなかれ」かも知れない、「寄らば大樹の陰」ということもある。

戦国時代の話。西の端にある未開の秦が最も強く、他の六つの国は、おどかされて、びくびくもの、土地を割いて、秦に従い、自国の安全を計ろうとしていた時に、蘇秦が雄弁を振るって六国を説いて回った。

(1) 紀元前三八四～三二二。古代ギリシアの雄弁家であり政治家。

「六国の軍隊を合わせれば、秦の軍隊の一〇倍もある。六国が力を合せて対抗すれば各国は独立を完うすることができる。それなのに、強い秦の家来になるのが安全を計る道だというのか。ことわざに、いうではないか、鶏口となるも牛後となるなかれ」。長い物には巻かれろ式の態度の六国に蘇秦が活をいれたのである。

蘇秦が放浪して帰っても、妻は機を下らず嫂は、めしも食わせなかった。今や彼が六国の国連議長となって帰ってみると、皆ペコペコだった。

「同じ人間でも、富貴なれば畏れおののき、貧賤なれば軽んじるのか、洛陽負郭の田（都の城壁の外に接した便利な田）を持ってたら、こんな出世はしなかったろう」と、親族友達に千金を散じた。

荊妻豚児

「荊妻豚児」（けいさい・とんじ）。自分の妻や自分の子供を謙遜していう言葉であるが、漢文を習った西洋人が驚く。いくらなんでも、いばらのトゲだらけの妻だの、人間の子供を豚の児だのというのは無茶すぎると。

しかし、やたらに「荊妻豚児」と口から出まかせに呼んだのではなく、これには古い由来がある。後漢の時代というから二千年近く前、西洋でいうならば、だいたいキリストの時代から使い始めた。「荊妻豚児」の歴史も古いものだ。

「荊妻、豚児」と並べるが、起こりは別々である。

「荊妻」の方は後漢の梁鴻という人の妻、孟光が、荊の花を、かんざしとして使っている。西洋種のローズなら立派だが、野ばらの花を頭に挿した貧乏くさい女房でござんす、——と梁さんがいったことから「荊妻」がはじまった。——列女伝

「豚児」の方は、有名な赤壁の戦(1)のあとで、負けたほうの曹操が、自分を負かした敵将孫権を褒めて「子を生むなら孫権のようなのが欲しい、劉景升の児子（自分に降参した青年）は豚犬のごときのみ」といったのが始まりである。

「細君」というのは、本来は諸侯の夫人のことである、これが後に自分の妻をさしていうようになった。漢の曽呂利新左衛門ともいうべき東方朔が、自分を諸侯になぞらえ、ふざけて自分の妻を「細君」といった物語から始まる。

他人の妻を「細君」というのは誤りかもしれない。——漢書・東方朔伝

生レ子当レ如二孫仲謀一、劉景升児子、若二豚犬一耳（子を生まばまさに孫仲謀〔仲謀は孫権の字〕の如くなるべし。劉景升の児子は豚犬のごときのみ）——三国志・呉志・呉主伝

(1) 二〇八年、揚子江南岸の赤壁という地で行なわれた戦い。蜀の劉備と呉の孫権の連合軍が、魏の曹操を大敗させた。

螢雪

「螢雪」（けいせつ）。卒業式の歌で、おなじみのもの。「諸子、螢雪の功、むなしからず……」などと校長が祝詞に用いる紋切型。スコットランド民謡オールド・ラング・サインのメロディにのせて歌うのが「螢の光、窓の雪」。

漢文では「雪案螢窓」といって「雪の机、螢の窓」となっている。

『日記故事』という古い本にあるのを和訳すると、「晋の孫康、若きときより心が清らかで、むやみにつまらぬ人間と交わらず。家貧しくして油無し。かつて、雪に映じて書を読む。後、官吏となって大臣に出世した。いま書案(机)を雪案というのはこれによる。晋の車胤幼にして恭謹博覧、(1)貧しくして常には油を得ず、夏日には、練り絹の中に数十の螢を包み、書を照らして之を読み、夜を以て日に継ぐ。後、官吏となって次官に進んだ。今、書窓を螢窓というのは、これによる」——官僚出世主義の玉子の糞勉強である。

昔の書物だから一寸角もある文字だったろう。雪に照らしたり、螢を燈にしたりして本を読んだこともある——と一度か二度のことを、出世してから後輩を励ますタネにしたのだろう。孫康は冬だけ勉強、車胤は夏だけ勉強したみたいでもある。この御両人、うまくいったから自慢になるが、はずれくじで出世し損なった方が、はるかに多いのは当り前、そうした連中からすると出世という

(1) 学問に熱心で、見聞が広いこと。

当りくじを夢みる青年の徹夜勉強が、いじらしくなる。宋の晁沖之の「暁行」という七言絶句[1]のがそれである。

老去功名意轉疎　獨騎三瘦馬一取二長途一
孤村到レ暁猶燈火　知有二人家夜讀レ書

（老い去って功名、意うたた疎なり。独り痩馬に騎して長途を取る。孤村、暁に到って、なお燈火。知る、人家に夜、書を読むあるを）

〈年を取ってしまって、功名を競う気持もすっかりなえてしまった。やせ馬にまたがって、はるばる旅をして、ある辺鄙な村を通ったが、そこには、暁方になってもまだ燈のついている所があった。こんな所にも夜を徹して猛勉している人がいるのかと感慨しきりである〉

鶏鳴狗盗

「鶏鳴狗盗」（けいめい・くとう）。ケイメイ・コウトウといってもまちがいではない。が、これはやかましい漢学者のいうこと、クトウというのが普通である。

「変った芸当を持った子分」という意味にも使うが、また「つまらない三下やっこ」という意味にも使う。

（1）七字の句四句からなる漢詩。第一・二・四句の末の字に韻をふむのが原則となっている。

戦国時代の話。斉の宣王の甥、孟嘗君という人は食客数千人[1]もあり、その名は天下に高かった。秦の昭襄王に招かれて、その国に行った。昭王は孟嘗君を殺そうとした。そこで、孟嘗君は昭王の愛する第何号かの妃に取りいって助けてもらおうとした。妃のいうには「狐の白い毛だけを集めた衣」をくれたら、助命を頼んでやろうという。孟嘗君の宝物だった唯一枚の「狐白裘」、これは昭王に献上してしまったもの。食客のうち狗盗をなす者（犬のようなすばしこい小ぬす人）を使って、秦王の蔵から「狐白裘」を盗ませて、妃に献上。妃の助命運動が効を奏した。孟嘗君は姓名を変えて逃げ出した。

秦の国境にある関所が名高い函谷関、ここへ来た時は夜中である、朝まで関所の門は開かれない、といって、ぐずぐずしていると追手につかまる。その時に鶏の鳴き声をまねることの上手な食客がいて声帯模写をやった。近隣の鶏が、それを聞いて皆鳴き出した。番兵は夜が明けたと思って門を開いた。孟嘗君の一行は無事に秦を出た。――史記・孟嘗君伝

雞肋

「鶏肋」（けいろく）。

鶏の肋骨である。周りに肉の付いたのをしゃぶっていると、なかなか捨てられない。チューインガムのしゃぶり粕みたいなものである。

（1）客分としてかかえた家来。

「鶏肋、捨てがたし」といって、役にも立たないものでありながら、惜しくて捨てかねる。

三国時代(1)、楊修は学を好み、俊才ありという男であったが、曹操の主計官となった。その頃、曹操は漢中を占領し、そこを足溜りとして劉備を攻めようとした。

しかし、そこから進むこともできなかった。さりとて、漢中を守るのは難しい。

曹操は「鶏肋」といった。ほかの者には何の事か判らなかった。楊修だけは、その意味が判ったので、こういった。

「鶏肋というものは、食べられもしない。ただ捨てるのが惜しいだけである、帰るという方針は決まった」と。曹操は、ここにおいて軍を返した。

修獨曰、夫雞肋食レ之則無レ所レ得、棄レ之則如レ可レ惜、公歸計決矣。(修ひとり曰く、それ雞肋は之を食えば則ち得るところなし、之を棄つれば則ち惜しむべきがごとし、公の帰計、決せりと)——後漢書・楊修伝

逆鱗(げきりん)

「逆鱗」(げきりん)。

(1) 二二〇～二八〇年の間の、魏・蜀・呉が中国を三分した時代。

「逆」は、ギャク(呉音)と読んだり、ゲキ(漢音)と読んだりする。別に規則があるわけではなく、多くの場合、ギャクであるが、「逆旅」(宿屋のこと)、「逆浪」(さかまく波)、「逆睹」(予見すること)及び「逆鱗」は、ゲキと読むのが普通である。

「逆鱗」とは天子の怒りのこと。天子を竜にたとえて「竜顔おんうるわしく」などという。

「逆鱗」も竜の鱗である。

『韓非子』の中の「説難篇」にある伝説から来ている。

それによると、竜は、おとなしい動物であって、人が平気で騎ることができる。しかし喉の下にさしわたし一尺ほどの鱗で、逆に生えているのがある。もし人がそれに触れると、その時は怒って、人を殺すという。

韓非子は、この語の次に、こう付加えている。「君主にも逆鱗があるから、これに意見をいう時には、その逆鱗に触れないようにすればいい」と。

もとは君主だけに「逆鱗」という言葉を使ったが、世の中が民主的になって、君主の言葉も普遍化されて、ワンマン社長のことを、「何々天皇」という。そうした私製天皇的社長の機嫌を損ずることを「とうとう逆鱗に触れて……」などと恐れる。

夫龍之爲レ蟲也、可二狎而騎一也。然其喉下有二逆鱗徑尺一。若人有二嬰レ之者一、則必殺レ人。(それ竜の虫たる、狎して騎るべきなり。然れども其の喉下に逆鱗の径尺なる有り。もし人これに嬰るる者有れば、則ち必ず人を殺す)——韓非子・説難篇

月下冰人

「月下冰人」（げっか・ひょうじん）。
結婚の仲人のことである。
「月下老」と「冰上人」を合せたのが「月下冰人」である。「冰」は「氷」に同じ。
唐の韋固という青年が旅行の途中で宋城に宿り、そこで月の光で書物を調べている老人を見た。側にある袋に寄りかかっている。その書物は何かと尋ねると、天下の結婚登録書だという。袋の中には赤い縄がはいっている。「赤縄」である。何する縄かと尋ねると、これは夫婦の足を繋ぐ縄である。これで一度繋ぐと仇同士でも、外国人同士でも、夫婦になってしまう、といった。韋固は独身であった。そこで老人がいった「君のお嫁さんは、この宿屋の北で菜っ葉の立売をやってる陳姿さんの娘だ」と。
韋固は、冗談だと思って、そんな話を聞き流して忘れてしまった。それから十四年、官途に就き、知事の娘と結婚した。娘の年は十六、七、養女であり、実父は宋城で死んで、赤ん坊の時、乳母が青物を売って養っていたことが判った。この宿屋を「定婚店」という。
これは『続幽怪録』の話。
次の「冰人」のほうは『晋書』の「芸術伝」にある話。
晋の令狐策という人が、夢に氷の上に立って、氷の下の人と語ったが、占いの名人索紞に相談す

ると、それは氷上の陽と、氷下の陰と言を交えるのだから、結婚の媒介を意味していると解いた。それから間もなく、太守の田豹という人が、その倅のために令狐策に頼んで、張公の娘を嫁に貰うこととなり、縁談が成立した。

唐韋固、少未レ娶、旅二次宋城一、遇二異人一、倚レ嚢坐、向二月下一検レ書、固問、答曰、天下之婚爾、因問二嚢中赤繩子一、云繫二夫妻之足一、雖二仇家異域一、繩一繫レ之、終不レ可レ易。（唐の韋固、わかくして、いまだ娶らず、宋城に旅次〔次はやどを取る意〕す。異人に遇う。嚢によって坐し、月下に向いて書を検す、固、問う、答えに曰く、天下の婚のみと、因って嚢中の赤繩子〔繩子で、なわの意〕を問ふ、云ふ、夫妻の足を繫ぐ、仇家異域といえども、繩一たび之を繫げば、つひに易ふべからずと）

索紞字叔徹、善二術數占候一、令狐策夢立二氷上一、與二氷下人一語、紞曰、氷上爲レ陽、氷下爲レ陰、陰陽事也、……媒介事也、君當二爲レ人作一レ媒。（索紞、字は叔徹、術数占候を善くす。令狐策、夢に氷上に立ち、氷下の人と語る。紞曰く、氷上を陽となし、氷下を陰となす、陰陽の事なり、……媒介の事なり、君まさに人の為めに媒をなすべし）

月旦

「月旦」（げったん）。新聞や雑誌などの見出しに「新聞月旦」とか「何々月旦」とかいう言葉を見

受ける。月旦とは月の初日、「ついたち」のこと。

後漢の許劭が従兄の靖と郷里の人物を批評して、毎月一日に、見出しをかえて発表した。この故事から、人物批評のことを「月旦」というようになった。

人物批評の形で各新聞を批評するのが「新聞月旦」である。しばしば「人物月旦」と書いてあるが、それは、あまりにも御丁寧、屋上屋を架するものであり、馬から落馬式で、これはまちがいの部類に入れてもいいだろう。「月旦評」というのはまちがいではない。

『三国志』の中の大立者たる魏の曹操が、まだ下っぱで有名でない時、この人物鑑定の大家である許劭先生のところへやってきて、辞を卑くし、礼を厚くして、「ひとつわたくしの人物を目利きしていただきたいものですが」といった。

劭先生は、じっと曹操の顔を見たが、どうも気に入らない、礼儀ただしく、言葉は丁寧だが、油断のならない面構え。劭先生が、そこで曹操にいったのが名高い言葉である。「君は清平の(1)奸賊、(2)乱世の英雄だ」といったのである。

どさくさ紛れに大いになすところあらんとした曹操は大喜びで帰っていった。

「乱世之英雄」という文句が気にいったからである。曹操の「乱世の英雄」ぶりは、三国志にくわしく紹介されている。

一説では、「治世之能臣、乱世之姦雄」とある、これなら遠りょするに及ばない。

(1) 平和な時代。(2) 悪人のこと。

初劭與二従兄靖一、俱有二高名一好レ共覈二論鄉黨人物一、毎月輒更二其品題一、故汝南俗、有二月旦評一焉（初め劭と従兄靖と、倶に高名有り、共に郷党の人物を覈論〔あれこれ論ずる〕するを好み、毎月すなはち其の品題〔人物批評の相手〕を更む。故に汝南〔地名〕の俗に、月旦評有り）――後漢書・許劭伝

卷土重來

「巻土重来」（けんど・じゅうらい）。

「あの関取は今場所は意外にも不振でしたが、実力があるんですから、来場所の巻土重来が期待されています」

「このチーム惜しくも敗れましたが、巻土重来すべきで、一度くらいの失敗で、そう気を落とすな」

「また次の試験で巻土重来すべきで、一度くらいの失敗で、そう気を落とすな」

一度失敗したものが、勢いを盛り返して出直すこと。「巻」は「捲」と同じ。昔は「才」（てへん）があってもなくても、同じように使った。

強い風が土を巻く勢いで重ねて来る、一度衰えた勢力を回復して再び襲い来たる――という意味。

この文句は唐の杜牧の詩で名高い。

杜牧は杜甫と区別するために、「小杜」ともいわれる。

楚の項羽が漢の劉邦（後の高祖）に敗れて、揚子江上流の舟付場である烏江まで逃げてきた。烏江の亭長が舟を用意したが、項羽はそれに乗らないで自殺した。川向こうの子弟八千を引き連れて出陣したのに、今、ひとり手ぶらで、おめおめ郷里に帰られるか、父兄に会わせる顔がない、と項羽は自殺したのである。

杜牧が、この烏江亭へ来て詩を作った。

（烏江亭に題す）

題二烏江亭一

勝敗兵家不レ可レ期　勝敗は兵家期すべからず
包レ羞忍レ恥是男兒　羞を包み恥を忍ぶ、これ男児
江東子弟多二才俊一　江東子弟、才俊多し
卷土重來未レ可レ知　巻土重来、いまだ知るべからず

最後の「未可知」（いまだ知るべからず）は未知数に属する、できるか、できないか未知数である。あるいは、巻土重来ができたかも知れない、という意味。

紅一點

「紅一点」（こう・いってん）。「紅一点の婦人代議士」とか「紅一点の女博士を交えて」とか、多

勢の男性の中に、たったひとりの女性がいる時に使われる。七福神(1)の中で紅一点の弁財天、六歌仙(2)の中の紅一点は小野小町――。

「万緑叢中紅一点」という文句を略したもの。青々とした中に、ただ一つ赤い花が開いている――という詩から来ている。背景となる繁った青葉を多勢の男性にたとえ、ただひとつ、ぽっつり開いているのを女性にたとえた。この場合、女性といっても、目立って美しいことを必要条件とするわけであり、美しくもない、しかも若くもない女性では、「紅一点」というのは、もったいない。それで、わざと、字をまちがえて「黄一点」などとする悪い仁がある。

多数の男性中ただひとりの女性という意味だけではなく、多くのつまらない物の中に、一つの優れたもののある場合にも使わないでもない。

これは宋の学者で政治家、王安石の「柘榴」の詩である。

萬綠叢中紅一點
動レ人春色不レ須レ多

二番目の句は「人を動かす、春色、多きをもちいず」で、たった一点の紅がきわめて印象的であるという意味。これは王安石の詩ではなく、唐人の作者不明の詩であり、王安石が自分の持ってた扇に、これを書いたのを、彼の自作だと誤った――という説がある。政治家としての王安石には敵が多かったので、こんな一説が出たのかもしれない。「一点紅」は芸者のこと。

(1) 日本・中国・インドの古伝説から考え出され、福徳の神として信仰された七神。恵比寿・大黒天・毘沙門天・弁財天・布袋・福禄寿・寿老人。(2) 平安時代初期の、六人の歌人。在原業平・僧正遍昭・喜撰法師・大友黒主・文屋康秀・小野小町。

鴻鵠之志（鴻鵠の志）

燕雀いずくんぞ鴻鵠の志を知らんや。「燕雀安知二鴻鵠之志一」。講談などによく出てくる文句。豪傑が大酒を飲んで代金の足りないとき、無銭飲食をするとき、こうした言葉で飲屋の主人を煙に巻く。鴻は雁の一種、鵠はスワンである。ツバメやスズメのような小鳥には大きな鳥の気持は察することはできないという意味。

秦の盛んなころ、陳渉という人が労働者として働いていた。彼は仲間にいった「立身出世しても、昔の友達を忘れないようにしよう」と。何かのはずみで自分ひとり出世すると、自分が特別に偉いからだと自惚れて旧友を忘れたふりしたり、旧友に威張ったりする奴がいて全く胸くその悪い憎いものだ――から、こういったのだろう。

ところで仲間は、あざ笑って「労働者のくせに大きな法螺を吹くもんだ」と問題にしない。

そこで陳渉が「燕雀いずくんぞ……」といったのである。

鴻鵠をコウコウと読むのはまちがい。したがって正鵠(1)もセイコウではなくセイコクが正しい。陳

(1) 弓の的の中心にある黒星のことで、転じてものごとの急所をいう。

渉は、その後、南のほうで呉広と共に、秦に向かって反旗をひるがえし、革命の第一声を挙げた。陳渉は労働者であったときから秦を亡ぼそうと大きな志を抱いて同志を求めていたのだったが、周りの者には彼の野心が判らなかったわけ。

陳渉、呉広は失敗して殺されたが、各地に兵を挙げる者が多く出て、秦末大動乱の先駆者となった。

大事件や革命の口火となることを「陳呉となる」というが、それは陳渉と呉広を合わせたものである。

陳渉少時嘗與人傭耕、輟レ耕之壟上一、悵恨久レ之、曰、苟富貴無二相忘一、傭者笑而應曰、若爲二人傭耕一、何富貴也、陳渉太息曰、嗟呼燕雀安知二鴻鵠之志一哉。——史記・陳渉世家（陳渉少時嘗て人と傭耕す。耕を輟めて壟上にゆき、悵恨これを久しうして曰く「苟くも富貴ならば相忘るる無けん」と。傭者笑ひて応へて曰く、「若傭耕を為す、何ぞ富貴ならんや」と。陳渉太息して曰く、「ああ、燕雀いずくんぞ鴻鵠の志を知らんや」と）

後生可畏（後生おそるべし）

「後生可レ畏」（後生おそるべし）。これは『論語』子罕篇に出てくる孔子の言葉である。中年すぎた人間はだいたい価値が決まって将来性がないが、青年は、未知数であって、将来どんな偉大な人間になるか判らない——という意味である。

「後生畏るべし。いずくんぞ来者の今に如かざるを知らんや」（後生可レ畏、焉知二来者之不一レ如レ今也）。近頃の若い者は、まったくなってない——とか、いまどきの若い者はほんとにだらしないよ——とかよく聞かれる言葉であるが、こうした声に対して、教育家としての孔子が抗議した、二五〇〇年前のことである。

この「後生おそるべし」をもじって「校正おそるべし」としたほうが多く用いられている。いい加減な、やっつけ仕事の校正は、まさに、おそるべきものがある。それでも一見して、「魯魚之誤」（ろぎょのあやまり）、詳しくは「魯魚、焉馬、虚虎之誤」という程度のものなら、読むほうでも誤りと気が付くから無難であるが、誤りと解らないような誤りはまったく困りもの。たった一字の仮名のまちがいで、意味が全然逆になるような場合がある。

例えば、数十行、数百行を費して大いに論じ、最後に「かるが故に、私は彼の議論に反対したい」と、大見得を切ったところ「た」が「な」と校正違いで、「反対しない」とされてしまう。筆者は泣くに泣かれずである。また「反対しない」が「反対したい」にされることもある。こうした時に「校正おそるべし」という。

どこの新聞社も「校正」係といったのを、今では、すべて「校閲」係と呼んでいる。「校正」は、下っ端仕事であると思われるので、「校閲」としたらしいが、実は校正という仕事は厄介なもの、労多くして、満点が普通で、すべて減点主義で成績が決まる。それで「校正」が嫌われ、「校閲」となった。

呉越同舟

「同じ飛行機に自民党・社会党の面々が乗り合わせて呉越同舟さ」などという。一つの舟に乗っているということだけが共通の事実であとは喧嘩仲間、舟の中では、にらみ合いだが、岸にあがると大喧嘩を始めるわけ。

呉越同舟のお手柔らかなのが同床異夢である、これは解消前の夫婦生活。

呉と越とは春秋時代の二国、北に呉、南に越、共に今の江蘇、浙江のあたり、隣りどうしで仲の悪いので歴史上名高く、たがいに勝ったり負けたりのシーソー・ゲームを読けた。

呉王、闔閭が、越王、勾践に破られた、これが一回戦。

闔閭の子、夫差は父の仇を報いるため、つらい思いを忘れぬようにと、薪の中に寝て準備をした、そして会稽山に勾践を破った、これが二回戦。

勾践は、会稽の恥を残念がり、甚だ苦い胆を、しょっちゅう嘗めて緩む心を励まし復仇の機会を待った、参謀の范蠡の助けによって夫差を会稽山に破った、夫差は美人西施にうつつを抜かしていて負けた。これが第三回戦。「会稽の恥を雪ぐ」という、飲み屋で勘定の足りない時に「会計の恥」というのは、これをもじったもの。

(1) 両地方とも、中国東部、東シナ海に面した省で、江蘇は揚子江下流域、浙江はその南隣り銭塘江下流域に位置する。

「臥薪嘗胆」とは、夫差と勾践のふたりのやったことを合わせたもので、辛苦して復仇の機会を待つことである。

李白の詩で「蘇台覧古」「越中懐古」の二つは名高いが、前者は夫差の栄華、後者は勾践の勝利を述べ、共に今は何もないと結び、芭蕉の「夏草」思想のお手本である。

蘇臺覧古

舊苑荒臺楊柳新　菱歌清唱不レ勝レ春
唯今惟有二西江月一曾照呉王宮裏人

旧苑荒台〔荒れはてた楼台〕楊柳新たなり、菱歌〔菱を摘む乙女たちの歌う歌〕清唱春に勝へず、唯今、惟だ西江の月有るのみ、曾て照らす呉王宮裏の人（西施を指す）

越中懐古

越王勾踐破レ呉歸　義士還レ家盡錦衣
宮女如レ花滿二春殿一　唯今惟有二鷓鴣飛一

越王勾践呉を破って帰る。義士家に還って尽く錦衣
宮女花の如く春殿に満つ、唯今惟だ鷓鴣〔鴣の一種〕の飛ぶ有るのみ

「呉下阿蒙」（ごかのあもう）。「非二復呉下阿蒙一」（また、呉下の阿蒙に非ず）というのが全文である。

呉下　阿蒙

しばらく会わないうちに、驚くべき長足の進歩をとげてる人のことを「呉下の阿蒙に非ず」という。

呂蒙という軍人が、将軍となり、政治のほうも考えなくてはならなくなったので、親分の孫権に注意されて、大いに書物を読んで学問に励んだ。

ある日、呂蒙は、幼なじみの魯粛という男に出会った。呂蒙はもと呉（今の江蘇省あたり）の田舎者であったので、魯粛は、昔のつもりで馬鹿にしていたが、だんだん話をしているうちに、呂蒙は昔の無学な田舎者ではない、学問的議論の堂々たるのに魯粛は驚ろき、呂蒙の背中をたたいて、「おまいは、もはや呉の片田舎の蒙ちゃんじゃないよ」といった。

これを原文で「非復呉下阿蒙」である。「阿蒙」の「阿」は、敬称の反対、愛称である。

「おまいは、武略のほうは相当なものと認めていたが、ただ、それだけだと思っていたのに、今じゃたいした学識、どうも驚きいった」。

呂蒙はいった「士というものは、別れて三日なれば、刮目して待つべし」と。「刮目」とは、目をよく拭くことである。「まあ、見ていてくれ」というかわりに「刮目して待つべし」という。何年たっても進歩しないの人間のことを「呉下の阿蒙」とか「呉下の旧阿蒙」とかいう。

士別三日、即當二刮目相待一（士、別れて三日、即ちまさに刮目して相待つべし）——三国志・呉志・呂蒙伝注

刻舟・守株

刻舟膠柱・守株待兎

「刻舟」（こくしゅう）。事物に拘泥して変に通じないこと。頑固で応変ということを知らないことで、融通のきかない人のすることを「舟に刻むが如し」という。『呂氏春秋』という古い書物に出てくる物語。

「楚人の江を渉る者あり、剣を水中に堕す、すなわちその舷に刻み記して曰く、これ剣の落ちし所なりと。舟の止まるを待ち、その刻みし処に従って水中に入りて之を求む」とある。「刻舟」を「刻舷」ともいう。また刻舟膠柱（こくしゅう、こうちゅう）と続け「舟に刻み、ことじ(1)に、にかわす」と読む。「膠レ柱鼓レ瑟（柱に膠し、瑟を鼓す）」ことじを膠で付けて琴を弾く——という融通のきかないこと。これは『十八史略』の春秋戦国、趙のところに出てくる文句である。

江戸小ばなしで、銀きせるを落とした話となって「刻舟」が使われている。——ちょき舟(2)に乗りし客、親より大切にする百匁程ある銀きせるを浅草川に落とし「南無三々々」と云う。せんどう肝を潰し「どこらへ落ちました」「ここだここだ」。せんどう尻ひっからげ「ここかえここかえ」と云いながら指に唾をつけ、舟の小べりへしるしを付ける。——

（1）琴の胴の上に立てて弦を張り、その位置によって音を調整する道具。

（2）猪牙舟。江戸で造られた、細長く先のとがった屋根のない舟。隅田川を上下して吉原通いの客をのせたりした。

古い習慣にとらわれて時世の変化を知らないのを「守レ株待レ兎」（株を守って兎を待つ）という。略して「守株」（しゅしゅ）とだけ。『韓非子（かんぴし）』にある物語。百姓が畑を耕していると兎が木の切り株に首をぶっつけて死んだ。これはしめたと、畑を耕すのをやめて毎日切り株を番して兎の来て死ぬのを待って国中の笑いものとなった。北原白秋の「待ちぼうけ」は、これを童謡に作ったもの。五つの歌の第一番は次のとおり。

待ちぼうけ、待ちぼうけ、ある日せっせと、のらかせぎ、そこへ兎が、とんでて、ころりころげた、木のねっこ。

五十歩百歩

少しの違いで、結局は同じことであるというときに「それは五十歩百歩だ」という。「Aは再軍備しないという、Bは再軍備するというが、どっちにしたって、要するに五十歩百歩じゃないか」などと使われる。

こうした使い方のほかに「目くそが鼻くそを笑う」という意味にも使われる。「五十歩百歩」は孟子の言葉から始まっている。

戦国時代といっても本場の中国のそれで、BC四世紀の大昔のことだ。どこの国も富国強兵の競争で、軍備のために重税を人民から取り立て、人民を兵隊に徴発した。それで民衆は困りはてていた。

その頃孟子は「民を苦しめる政治をしてはいけない。民を愛する道徳的な政治をすべきである。大砲よりもバターである（まさか、そんなことは、いわなかった）。そうすれば軍備は貧弱でも、国民が団結して良い国となり、周囲の国々は、それに感化されて戦争はなくなり、世の中に平和が来るであろう」と、国々を説いて回った。

ある国王が孟子にいった「私は先生の教えに従って、人民を大切にしているが、私の国は良い国にならない、どうも先生の道徳政治は実際には役に立たない」と。すると、孟子がいった「王は戦争がお好きだから、戦争の話でたとえましょう。戦争の真最中に、戦線から逃げたやつがある。Aは五十歩で踏みとどまりBは百歩退却した。そこでAはBを卑怯（ひきょう）だといった。百マイナス五十で五十歩だけ多く逃げたから」。王はいう「それは、おかしい、五十歩でも百歩でも、逃げたことには変わりはない」。孟子「それがお判（わか）りなら、あなたが人民を大切にするというのも、よその国王とたいした変わりがないということがお判りでしょう」。

五斗米（ごとべい）

「五斗米」（ごとべい）。これはゴトマイと読むのは漢文らしくない。白米、新米と「米」をマイというが、「五斗米」の場合は、米飯、米食、米寿、米国のように「ベイ」というのが正しいことになっている。

「五斗米」とは安月給、薄給のことである。有名な晋の陶淵明の言葉である。「五斗米のために腰を折ること能わず」とあって、安月給で、ペコペコするのは我慢ができない——ということである。

陶潜は、字は淵明である。彭沢という所の長官になって、八十日目に検察官がやってきた「束帯（礼服）で検察官をお迎えする規則になっています」と、下役が彼にいった。ところで、その検察官は彼の同郷で彼の後輩、しかもくだらない男である。

すまじきものは宮仕え、安月給のために、郷里の小僧っ子に頭を下げなくてはならない、こりゃご免蒙ろうと、即日、辞職して郷里へ帰ってしまった、今から千五百年も前の話である。その時の彼の言葉が「われ、あに五斗米のために腰を折って、郷里の小児に向かわんや」である。不下爲二五斗米一折腰向中郷里小人上（五斗米のために腰を折りて、郷里の小人に向はず）

「帰りなん、いざ、田園まさに蕪んとす」というのが彼の帰去来辞の初めであるが、帰るべき田園もない我々は、「何事も五斗米のためだ、七重の膝を八重にでも折るよ」だ。

帰去來兮、田園將レ蕪、胡不レ帰、既自以レ心爲二形役一、奚惆悵而獨悲。（帰りなんいざ、田園まさに蕪れんとす、なんぞ帰らざる。既に自ら心を以て形の役〔体のために使われる〕となす、なんぞ惆悵として独り悲しまんや）——帰去来辞

鼓腹撃壌

「鼓腹撃壌」（こふく・げきじょう）。

大平を楽しみ謳歌する形容。腹鼓を打ち、地面を叩いて調子を取ること。

太古の帝（皇帝というのは秦始皇帝以後）堯の話。堯は舜と並び称せられる聖天子、堯舜の時代は孔子の理想とした治世である。考古学的に見て、太古の帝は小国の大統領ほどの者であったろう。

堯は宮廷の費用を倹約、したがって税の軽い政治を行なった。天下を治めること五十年。果たして天下がよく治まっているのか、治まっていないのか、人民が堯を君主にしていたいのか、したくないのか——ということが堯自身に判らなくなった。そこで彼はアンケートを行なうことにした。まず、側近の家来に尋ねたが、答がない。政府の役人に問うたが知らない。民間に問うてみたが、知らない。

そこで、堯は町人の着物で微行し自分で調べることにした。

町の賑やかなところで「童謡」を聞いた。「童謡」という言葉は古くから使われている。

立レ我烝民一　我が烝（衆）民を立つる
莫レ匪二爾極一　なんじの極（堯の至極の徳）にあらざるなし
不レ識不レ知　しらず、しらず

順二帝之則一　帝の則に順がうと

われわれ人民が暮らしていけるのは、あなたのお陰である。われわれは、しらずしらずに、帝の規則に従っている、という「童謡」である。「不レ識不レ知」という文句は、我々は今でも使っている、「しらずしらずに泣けてくるのよ……」という歌の文句、堯時代の「童謡」の文句とは、しらずしらずに使っているわけである。

農村へ行ってみると、ひとりの老人が、食物を口に入れて食べながら、腹鼓を打ち、地面を叩いて拍子をとりながら次のように歌っていた。

日出而作　　日出でて作し
日入而息　　日入って息ふ
鑿レ井而飲　　井を鑿って飲み
耕レ田而食　　田を耕して食す
帝力何有二於我一哉　　帝力なんぞ我にあらんや——十八史略・堯舜

この老人は堯が治めていることを知らない。それほど天下がよく治まったというのである。この老人には税金もなかったのだろう。

「鼓腹撃壌」を略して、「鼓腹」だけでも善政で天下が治まり、人民が満足していることを形容す

鼓腹撃壌

る。

五里霧中

「五里霧中」（ごりむちゅう）。「五里霧中で、何が何やら、さっぱり見当が付かない」という場合、「ごり・むちゅう」というように聞こえる。五里と霧中を離し、霧中の形容が五里とするのはまちがい。「ごりむ・ちゅう」とするのが正しい。

「五里夢中」と、五里の道を夢中で歩くマラソン的夢遊病のことではない。「五里霧（ごりむ）」という霧の中――というのが「五里霧中」である。

心が迷ってなすところを知らない、という場合に「五里霧中」という文句を使うが、元の意味は、そんな精神的なことではなく、ほんとうに大霧の中に在って方角が判らなくなることである。

後漢の裴優という魔法使いは三里の霧を起こすことができた、ところが、それよりも偉い魔法使いの張楷は五里の霧を起こすことができた。

「五里霧」というのは、この張楷の「道術」（魔法のこと）の作用である。中国の伝説的歴史には、しばしばこの霧を起こす話があり、これを戦争に使って敵を悩ます。

太古の黄帝の時代に賊が霧を起こした、煙幕を使った戦術か、あるいは霧を利用しての兵法かであろうか。

黄帝が「指南車」というものを作って霧の中で方角を知って敵を破った。指南車は羅針盤のことらしい、車の上に木彫の人形を置き、その手が磁石の仕掛けで常に南を指すように造ったものだという。

周の時代にも、帰り道を忘れた者に、周公が指南車を与えたという。それで教導、教え導くことを「指南」という。

張楷字公超、性好二道術一、能作二五里霧一、時關西人裴優、亦能作二三里霧一。（張楷字は公超、性道術を好み、能く五里霧を作す。時に関西〔函谷関の西の地方の総称〕の人裴優も亦能く三里の霧を作せり）

――後漢書　張楷伝

黄帝與二蚩尤一戰二於涿鹿之野一、蚩尤作二大霧一、兵士皆迷、於レ是作二指南車一、以示二四方一。（黄帝と蚩尤と、涿鹿の野に戦ふ。蚩尤大霧を作し、兵士皆迷ふ。ここにおいて指南車を作り、以て四方を示す）

――古今注

言語道斷

「言語道断」（ごんご・どうだん）。「ごんごどうだんな男だ」「そんな言語道断な話があるものか」。言語道断と書いて「べらぼう」などと仮名をふることもある。「げんご・どうだん」と発音するのはまちがい。これは仏教の言葉であるから、いわゆる坊主読みに「ごんご」という。

「一言居士」（いちごんこじ）「清少納言」（せいしょうなごん）のときと同じように「ごん」とする。面倒くさいけれど習慣だから仕方がない。どうにもこうにも、お話にならない、というのが「言語道断」である。正確にいうと、言語道断の悪事――とすべきであるが、形容詞の「口に出して語れないほどの」というだけで大悪事を意味させている。法華経や瓔珞経にある文句では、「言語道断」は「妙法」の形容詞である。言葉に出して述べることのできない奥深い真理であると、妙法を褒めたたえて「言語道断」としたもの。これをふざけて悪いことに使っているうちに、今では、「もってのほか、話にもならない」という悪い方面専門となった。

仏法のありがたい言葉が逆に使われる例が少なくない。般若は巴利語(1)のパンニャ（知識）である。「摩訶般若波羅密多」（大知識到二彼岸一「だいちしきもてひがんにいたる」）の中の般若である。能狂言で鬼女の面を冠ったのが、「あな恐ろしや般若の声」という。鬼女の方が御経の声を恐れるのである。それをまちがえて鬼女のことを般若といい、その面を般若の面という。

法華経に「大法螺を吹いて大乗法の雄猛を表わす」とある。一般に「法螺を吹く」とはナンセンスな嘘で自慢することだが、「法螺」の「法」は仏法の「法」。

吹二大法螺一、撃二大法鼓一、演二大法義一、表二大乗法雄猛一。（大法螺を吹き、大法鼓を撃ち、大法義を演じて、大乗法の雄猛を表わす）――法華経

(1) セイロン・ビルマ・タイ・カンボジアなどで仏教の典籍に用いた言語。

塞翁馬

「塞翁馬」（さいおうのうま）。禍と思ったのが福の元であったり、福と思ったのが禍の元であったりする。禍福は、ねじ合わせた縄のようなものであるという時に、この「塞翁の馬」を使う。「塞翁が馬」ともいう。

元の熙暭機という人の詩に「人間万事塞翁馬」とある文句も使われる。

下世話には「人間万事、西行が猫」などという語呂合わせみたいなものだが、頼朝が銀の猫を西行に与えた、西行はその猫を浮浪児に与えた、大将軍から坊さんに、坊さんから乞食の子に、と銀の猫が転々とするところに当てはまらないでもない。

「塞翁馬」という物語は、『淮南子』という古い珍話集に出ている。「塞」は要塞の塞で、塞翁というのは国境近くに住んでいる老人ということ。「昔、国境近くに老人が住んでいた。飼馬が、国境の外に逃げた（禍）ところで、その馬が名馬を連れて帰って来た（福）、翁の子が名馬に乗って落ちて、びっこになった（禍）、一年の後、戦争になって総動員、村の青年は全部戦死、翁の子は片輪だったので兵役を免れて助かった（福）」という。

会社で不遇、左遷されて出世せず重役にもなれなかったのが幸いして追放にもならず、戦後三等重役になった、ところで、社用族の宴会続きのため身体を壊して死んだ。宝くじに当たったため贅沢するようになり、それが過ぎて借金して首が廻らず、ついに首をくくった。などと、人間万事塞

翁が馬。

「寒翁馬」は、幸運をつかんだ者の戒めとなり、また不幸な者の慰めとなるわけである。

細事

宰相不レ親二細事一

「細事」（さいじ）。読んで字の如く、細かい事、ちいさな事である。「そんな細事は、ほっとけ」、「細事にこだわる」などという。「不レ親二細事一」（細事を、みずからせず）という文句がある。これは人の上に立つ指導者は細かい事を自分でしない——ということで、往々にして、頭脳粗雑な大臣、社長などの自己弁護にも使われる。詳しくいうと「宰相不レ親二細事一」（十八史略）で、ごみ箱を覗きこんで鋭いところを見せようとした東条首相の場合と逆である。

しかし問題は、何が本当に「細事」であるかを決めることである。細事と見えて大事だったり、その反対に大事と見えて細事だったりする。

漢の中興の英主、宣帝の宰相は丙吉という人。

ある日、都大路で、ギャングの大喧嘩、「群闘死傷」に出会ったが、知らん顔していた。それから、車を引いた牛が、はあはあ、喘いでるのに出会った、「この牛は何里ぐらい車を引いてきたのか」と詳しく尋ねさせた。

「大事件を見すごしながら、牛が、どうしたなどと、つまらんことを尋ねるものだ」といった家来があった。その時、丙吉はいった「ギャングの喧嘩なら警視総監の掛りだ。大臣は、そんな細事を自分で処理すべきものではない、捨て置いてよろしい。

今、春だというのに、牛が喘ぐのは、季節はずれに暑いからだろう。これは気候の異変である、これは大臣として捨ておけない、農業を本とする国民全体の生活に関することだ」。

昔の中国では、農業用の暦が天下の最も重大事、宰相は現代の気象台長や天文台長を兼ねたようなものだったらしい。

細腰

「細腰」（さいよう）。昔は細い腰の女を美人だとした。日本でいう「柳腰」である。もっとも加賀の千代女[1]みたいに「一抱えあれど柳は柳かな」という柳でも困るが。

「願為二軽羅一巻二細腰一」（願わくば軽羅となりて細腰を巻かん）[2]などといって、「ほそごし」が美人ということであった。健康美を本当の美とする現代感覚からすれば、おかしな話である。「細腰」のことを「楚腰」ともいうが、それは「楚荘王好二細腰一」（楚荘王、細腰を好む）という故事がある。斉の霊公は男装の女性を愛したが、楚の荘王は腰のほっそりした女性を好んだ。

多くの官女たちは、王様のお気に入ろうと、腰を細くしようとした。腰を細くするには減食が一番ということになったが、次第にコンクールが劇しくなって、減食の度が甚しくなり、餓死する者

(1) 江戸初期の女流俳人（一七〇三～七五）。(2) うすい絹織物。

が多くでたほどだという。

楚荘王好二細腰一、故朝有二餓人一。（楚荘王、細腰を好む、故に朝に餓人有り）——荀子・君道篇

先則制人（先んずれば人を制す）

「先則制人」（先んずれば人を制す）。

「先んずれば人を制すだ。何をぐずぐずしてるか、早いとこ、やってしまえ」向こうが、手出しをしないうちに、こっちから手を出せば、よく人のうわ手に出られるという諺である。

秦を亡ぼそうとして謀反をした項梁は、項羽の叔父であり、彼に兵法を教えた。項梁が戦死したので、項羽が、その後を継いで大将となったのである。

この項梁に、会稽の長官、殷通という男が秦に謀反することを勧めた。今や江西地方一帯に反乱が起こっている、秦を亡ぼすチャンスである、先んずれば人を制し、後れれば人に制せられる、という諺があるではないか、早いところ謀反すべきだと、いったのである。

會稽守殷通、謂二項梁一曰、江西皆反、此亦天亡レ秦之時也、吾聞先則制レ人、後則爲二人所一レ制。

（会稽の守、殷通、項梁に謂って曰く、江西、皆反す、これまた天、秦を亡ぼすの時なり、吾聞く、先んずれば則ち人を制し、後れれば人の制する所となる、と）——史記・項羽本紀

流石（さすが）

流れる石——と書いて「さすが」と読むことになっている。ずいぶん無理な読ませ方である。さすがに近頃は、「流石」などと、書くことは少なくなった。この「流石」は夏目漱石の「漱石」と関係が大いにある。「枕石漱流」という古い文句がある。「石に枕し、流れに口そそぐ」であるが、これは登山家の野宿といった仙人的詩人的の原始生活を意味する。

六朝時代(1)の晋の頃に孫楚という仁があった。すこぶる負けん気の男で、自分がいいまちがいをしても、決してまちがったといわない、何かと、こじつけていいのがれる、今の世にも、多かれ少なかれこうした性質を持った人はある。弁解、いいのがれの名人は政治家に多い。国会における閣僚の答弁の、ことごとくとはいわざるも、その少なからざる部分において、こじ付けのいいわけ、強弁コンクールの選手である。

さて、孫楚はある時「枕石漱流」というべきところをまちがって「漱石枕流」といった。誰かが、そのまちがいを指摘して「石に口をそそぎ、流れに枕す——では意味をなさない。枕石漱流の

(1) 南北朝時代（四二〇～五八九）の、南朝側の四つの王朝（宋・斉・梁・陳）と、これ以前の呉・東晋の二王朝を加えて六朝という。

まちがいだろう」と注意した。

すると、孫楚先生、強情我慢という因果な生まれつき、「うん、まちがいだった」といえばいいものを、「漱石枕流が何がまちがいか、それで正しいよ」と頑張った。そして「石に口そそぐ――のは、歯を磨くためである。流れに枕する――のは、耳を洗うためだよ」と、ぬけぬけといい抜けた。

このいい抜けは「さすがに巧い」と皆が感心した。「流石」を「さすが」と読むのは孫楚の話からだという。枕石漱流、漱石枕流――晋書・孫楚伝

「漱石枕流」とは負け惜しみ、ごまかすこと。

左祖

「左祖」（さたん）。「僕は君の説に左祖しよう」味方する、かたを持つ、加勢する――ことを左祖という。

漢の高祖（劉邦）の皇后は呂氏の出である。呂后という。高祖が漢の皇帝となったのも呂氏のお蔭が多い。また呂后も相当な女政治家である。将軍の韓信を、だまして殺させたのも彼女の仕事である。高祖の死後、呂后は漢の天下を奪った。今まで皇帝の下の王（すなわち大名）は劉氏一族に限られていた規則を破って、呂氏一族をも大名にした。呂后が死んだときに天下は劉氏と呂氏の二派に分れた。都にあった軍隊の大将は呂氏であった。そのとき周勃という男が軍門に入り「呂氏の

ためにするものは右袒せよ、劉氏のためにするものは左袒せよ」と叫んだ。「袒」とは片はだぬぎ——のことである。すると「軍中、皆左袒」であった。全軍が劉氏の側に立つことを示した。この軍隊を率いて呂氏を滅ぼし、劉氏をたてて皇帝とした。漢の文帝がそれである。右袒、左袒と面倒くさいことをしたものだ。——史記・呂后本紀

右手なり左手なりを挙げればもっと手っ取り早いのに、なぜ片はだを脱がせたのであろうか。挙手だと数えているうちに、形勢をみて変更するものがあるかもしれない。「袒」なら、するのに手間がかかるが、おいそれと右左を脱ぎ直すわけには参らない。それで、「右袒、左袒」としたのだと思うがそこまで詳しく説明した注釈をみたことがない。

山雨欲來、風滿樓（山雨来たらんと欲して風楼に満つ）

「山雨欲レ来、風満レ楼」（山雨・来たらんと欲して・風・楼に満つ）。

何事か起ころうとする、その前に、その兆が現われる、そういった時に「山雨来たらんと欲して……」という。

「双方殺気立って、にらみ合っている、山雨来たらんと欲して、風楼に満つ」、古流なスポーツ記者や旧派のスポーツ・アナウンサーの、よく使う言葉である。

唐の詩人、許渾の詩の中にある一句である。

咸陽城東樓

一上二高城一萬里愁　蒹葭楊柳似二汀洲一

溪雲初起日沈レ閣　山雨欲レ來風滿レ樓

鳥下二綠蕪一秦苑夕　蟬鳴二黃葉一漢宮秋

行人莫レ問當年事　故國東來渭水流

ひとたび高城に上れば、万里愁う。蒹葭楊柳汀洲に似たり。

渓雲初めて起って日、閣に沈み。山雨、来たらんと欲して風、楼に満つ。

鳥は緑蕪に下る、秦苑のゆうべ。蟬は黄葉に鳴く、漢宮の秋。

行人、問うことなかれ、当年の事。故国東来、渭水流る。

咸陽は秦の都。蒹葭はよし・蘆の類。汀州は中洲。緑蕪は雑草。秦苑も漢宮も昔の宮殿で、唐時代には廃墟であった。渭水は川の名。

秦の古都咸陽城の東の楼に登って景色を眺める。昔の盛んだった都も荒れはて、蘆や柳が繁って川の中洲みたいになっている……というのが詩の始めのほうである。古い都はすべて廃墟となってしまっている、昔のままなのは渭水が東に流れているだけである。

「昨日少年今白頭」（昨日の少年、今は白頭）というのも許渾の「秋思」という詩の一句である。

四海兄弟（しかい・けいてい）

「四海兄弟」（しかい・けいてい）

「四海同胞」ともいう。孔子の弟子に司馬牛というのがいた。司馬牛には桓魋という大悪漢の兄があった。桓魋は孔子を殺そうとしたこともあった。司馬牛は悲しんで「人には皆、兄弟がある。私だけが兄弟を失って独りぼっちです」といった。

孔子の高弟で助教格の子夏は、それを慰めて次のようにいった。「死ぬのも生きるのも天命であり、富貴、天運による――ということを聞いた。君子（徳のある人）は敬して失うなく、人と恭しくして礼があるならば、四海のうち、皆兄弟である。だから、君子なら兄弟のないことを苦にしなくてもいいだろう」と。またある時、司馬牛が「君子とはどんな人間でしょうか」と先生に尋ねた。孔子「君子は憂えたり、おそれたりしないものである」司馬牛「憂えず、おそれずを、君子というのですか」孔子「内に省りみて、疚しくなければ、いったい何を憂えたり、おそれたりするのか」。

司馬牛と子夏、司馬牛と孔子の二つの話は共に『論語』の「顔淵篇」に出てくる。

「内省不レ疚（うちにかえりみてやましからず）」も、よく使われる言葉、大いに疚しくても、平気を粧って、これを豪語する人もある。司馬牛についての論語の話は、桓魋という悪者の兄があったということを知らないと、はっきりしない。

司馬牛憂曰、人皆有二兄弟一、我獨亡。子夏曰、商聞レ之矣、死生有レ命、富貴在レ天。君子敬而無レ失、與レ人恭而有レ禮、四海之内、皆爲二兄弟一也。君子何患乎無二兄弟一也（君子なんぞ兄弟無きを患へんや、と）

「商聞之矣」の「商」は子夏のこと、彼の本名は卜商である。

司馬牛問二君子一。子曰、君子不レ憂不レ懼。曰不レ憂不レ懼、斯謂二之君子一矣乎。（ここにこれを君子といふか、と）。子曰、内省不レ疚、夫何憂何懼。

鞭死屍（死屍に鞭うつ）

「鞭二死屍一」（ししに・むちうつ）。死んだ人の生前の行為を非難すること。

「あいつは、いやなやつだったなあ」「でも、死んだ人を悪くいうもんじゃないよ」「死んだって、悪かった人間は、悪いというよ」「死屍に、むちうつのはよくないよ」……と、故人の言行を攻撃することを「死屍に鞭うつ」という。死屍は死体という意味。

『史記』の「伍子胥伝」にある話から始まっているが、これは、ただ死んだ人間を非難するといったような、なまやさしい事ではなく、本当に死体を鞭で打ったという話。

伍子胥の兄を楚の平王が殺した。伍子胥は呉に逃げ、呉の軍隊の先導となって楚に攻めいり、都を陥れた。兄の怨みを晴らそうとしたが、平王は、もう死んでいた。そこで、彼は平王の墓をあば

いて死体を掘り出して鞭で打ったという。

死孔明走生仲達（死せる孔明生ける仲達を走らす）

「死孔明走ニ生仲達一」（死せる孔明・生ける仲達を走らす）。

昭和二十八年共産党の徳田球一[1]は、とうに北京で死んでいるのに、まだ生きてるものと思って、日本の警官が探し回っていた。そこで、「死せる徳球、生ける警察を走らす」などというのが新聞に書かれた。

三国時代。蜀の宰相諸葛孔明は五丈原で魏軍と対陣中に死んだ。

魏の将軍司馬仲達はスパイを放って、敵の将軍が死んだことを知った。

天下の名将諸葛孔明の兵法を恐れていた仲達は、動くと敵の計略にかかるというので、今まで動かなかった。いよいよ敵将孔明が死んだとあれば、もう心配はないと、蜀軍を攻めようとした。

すると、今までひっそりとしていた蜀軍は、旗を、こっちに向け、鼓を鳴らして、反撃してきそうな勢いを示した。

さては、孔明が死んだというのはまちがいで、まだ生きているのかと、仲達は恐れて、蜀軍に近よろうとしなかった。『通鑑綱目』に

百姓為レ之諺曰、死諸葛、走ニ生仲達一（百姓、これがために諺して曰く、死せる諸葛、生ける仲達を走らしむと）とある。

（1）一九二二年に、日本共産党を創立。以後書記長をつとめたりしたが、政府や占領軍に追われ、地下生活に入った。北京で病死（一九五三）。

四知

「四知」（しち）。秘密は必ず露れるものであるという場合に用い、特に、贈賄を拒絶する場合に、硬骨（民間の常識からすると野暮で頑固な男）な役人が使う言葉である。

天知る、地知る、我知る、お前知る——の四つで「四知」というわけ。

後漢の時代に、楊震という人が東萊という所の太守となった。赴任の途中、昌邑という所に宿をとった。すると、夜おそくなって、昌邑の長官をしている王密という男が、こっそり訪ねてきた。この王密はかつて楊震が引き立ててやった後輩である。王密は金十斤（いくらに当るか判らないがとにかく相当の大金らしい）を、ふところから出して、楊震に贈ろうとした。

その時、楊震は「僕は、お前を昔なじみとして知っている、それだのに、お前は僕を忘れたのか」と、いって金を受取らない。王密はいう「野暮なことを、いわないで、この金を収めてくださいよ、こんな暗い夜だから、誰にも見られやしませんよ、誰も知らなけりゃ、いいじゃありませんか」。すると楊震がいったのが四知である。「天が知っている、地が知っている、僕が知っている、お前が知っている、これでも、誰も知らないということはないだろう」と開き直られて、王密は愧じて引きさがった。——後漢書・楊震伝

原文では「天知、地知、我知、子知」である。天知、地知、我知の三知は安全であろうが、子知の四番目が危い。

汚職は、いつでも贈ったほうから、ばれるようである。

四面楚歌

総好かんを食ったり、村八分にされたりして、ひとりの味方もなくなった時に「四面楚歌」という。秦が亡んで、漢の劉邦と楚の項羽が天下を争った。初めのうちは項羽が、しきりに勝ったが、長駆、補給線が延びすぎて、劉邦の逆襲に会い、とうとう垓下というところで包囲されてしまった。

スターリングラードのパウルス元帥だ。

漢の軍隊に包囲されたのであるから、夜、四方から漢の歌が聞こえるのは当り前である。ただ敵に包囲されたというのなら「四面漢歌」であるはずである。

ところが「四面楚歌」という。これには深い訳がある。漢の参謀長の張良の謀略である。楚の歌を知っている部下をして、あっちからも、こっちからも楚の歌を歌わせた。夜になって「四面楚歌」である。これを聞いた項羽は、「漢は、すでに楚を平らげたのであろうか、楚の人間が多く漢の軍隊に加わるとは、おれは裏切られた」と、がっかりした。

楚は、まだ漢に攻められず、楚の人間も、項羽を裏切ってはいなかったのである。つまり、項羽

は張良の謀略に、ひっかかったのである。その時の項羽の詩が名高い。「力山を抜き、気は世を蓋う、時、利あらず、騅逝かず、騅の逝かざるを如何にすべき、虞や、虞や、なんじをいかんせん」と。抜山蓋世の勇とは、これから来ている。騅は彼の愛馬。虞というのは彼の愛人である。

項羽は、ここで虞美人を殺したのち、囲みを破って逃れ、烏江というところで自殺した。

虞美人が殺されて血を流したあとから赤い花が咲いた。それがヒナゲシであり虞美人草ともいう。

秋扇

「秋扇」(しゅうせん)。

夏、暑いうちには重宝がられ、離さずに用いられるが、秋風が吹いてくると、棄てられる。倦かれて寵愛が衰え、やがては顧みられなくなること。

漢の宮女、班婕妤の「団扇詞」から出ている。

「婕妤」というのは漢代の最高女官、そのサラリーは列侯に相当したという。

「倢伃」とも書く。

班婕妤は、学者班彪の伯母である。班彪の三人の子が、『漢書』の著者班固、西域に大功を立てた班超、女流学者として名高い班昭(曹大家ともいう)である。

だから班婕妤は成帝の後宮にあって、美貌だけではなく、学芸才能もあった。

成帝の寵愛を一身におさめた大スターも、やがて趙飛燕というニューフェースが現われるにいたって、君寵を失った。

そこで、「怨歌行」を作った。それが「秋扇」のおこりである。

新裂二齊紈素一　新たに斉の紈素を裂き
鮮潔如二霜雪一　鮮潔、霜雪の如し
裁成合歡扇　裁ちて成る合歓の扇
團圓似二明月一　団円、明月に似たり
出レ入二君懷袖一　君の懐袖に出入し
動搖微風發　動揺、微風発す
常恐秋節至　常に恐る秋節の至るを
涼飈奪二炎熱一　涼飈炎熱を奪ふや
棄レ捐篋笥中一　篋笥の中に棄損せられ
恩情中道絕　恩情中道に絶ゆ

「紈素」は山東省の名産、白絹。「合歓扇」は、合わせうちわ。絹を両面から張り合わせ、中に骨を入れてある。人の愛情の相合って離れないのにたとえる。「涼飈」は、涼しい大風、秋の台風。

酒池肉林（しゅちにくりん）

以レ酒爲レ池　懸レ肉爲レ林

「酒池肉林（しゅち・にくりん）」で長夜の宴（うたげ）を張るなどということは社用ででもなければとてもできない芸当だよ」などという。

酒の池、肉の林で、飲み放題、食い放題の形容である。徹夜の豪遊を、中国の白髪三千丈式の大げさな形容をしたのではなく、本当に酒の池、肉の林を作ったという歴史的事実に基づいた話から来ている。

中国の歴史で、暴君の見本として、夏の桀王（けつおう）、殷の紂王（ちゅうおう）のふたりが挙げられ、これを合わせて「桀紂（けっちゅう）」という。このふたりが共に酒池肉林を実演した。桀は力よく鉄の鉤（かぎ）を伸ばすという力持、頭はよくなかった。末喜（まつき）という女のいうとおりになり、民財を絞りあげての豪遊、肉の山、乾肉の林、そして酒の池には舟を浮べた。太鼓の合図で三千人が牛飲した。桀は殷の湯王（とうおう）に亡ぼされた。

殷の最後の王が紂、猛獣を撲（なぐ）り殺すという力持のところは桀と同じだが、頭も悪くない、「智は以（もっ）て諫（かん）を拒（ふせ）ぐに足り、言は以て非を飾るに足る」というから、今の世の大政治家に似ているところもある。これがまた申し合わせたように、妲己（だっき）という女に、すっかり打ちこみ、女のいうとおりになった、例によって税金をとりたてての贅沢（ぜいたく）、またもや酒池肉林で「長夜の宴」を張った、そして

数々の乱暴な政治を行なったので周の武王に亡ぼされた。

「殷鑑（いんかん）（鑑はかがみ、手本の意味）遠からず夏后（かこう）の世にあり」（殷鑑不レ遠、在二夏后之世一）というのは、紂の先例は桀であるという意味。

「桀の犬（けんぎょう）に吠ゆ」とは、仕えるところに従って忠を致すという意味である。桀は悪天子の代表であり、堯は聖天子の代表である。

春眠不覺曉（春眠暁（あかつき）を覚えず）

「春眠不覚暁」（春眠・あかつきを・おぼえず）。

「春眠（しゅんみん）、あかつきを、おぼえず――か、寝坊だなあ、もう起きないと遅刻するぞ」あまりにも有名な文句である。

唐の孟浩然（もうこうねん）の詩から。

春　曉

春眠不レ覺レ曉　春眠、暁を覚えず
處處聞二啼鳥一　処々、啼鳥を聞く
夜來風雨聲　夜来、風雨の声
花落知多少　花落つること、知んぬ多少ぞ

中国語は単綴語（モノシラビック）であるから、「多」と発音しても、意味がよく判らない。「多少」という時の「多」といって、「多」を表わす。我々日本人も「多少」で「少しは」の意味に使っている。「ス」といっても、意味がはっきりしない時は、「鳥のス」とか、「すっぱいス」とか、いうたぐいである。それで「花落知多少」は、「多分沢山の花が落ちたろう」と解する人もある。また「知」は「不知」という反語であり、「多少」は「どれほど」とする、つまり「いったい、どれくらい花が散ったかしら」と解する人もある。

文法が簡単不明瞭な漢文、ことに詩の文句は、いろいろに解釈される。どっちが正しいということはない。両方を知っていて、自分の好きな解釈を採用すればいい。

食指

「食指」（しょくし）。第二指、すなわちひとさし指のこと。第二指を、なぜ「食指」というのか不明、飴でも舐め食うためなら第二指が正に食指である。

これには異説もあって「食指」とは第四指、つまり薬指だともいわれる。そんなことはどっちでもかまわない。

「食指を動かす」という。うまい料理を見て食べたくなる——という意味に使う。食物以外の欲についても転用して「食指を動かす」という。なんでも欲しくなることである。

春秋時代の大昔の話。鄭の国の殿様に、楚の国からスッポンを贈ってきた。ちょうどそのころ、鄭の若君が殿様に会うために自分の家を出かけた。すると、若君の食指（ひとさし指）がひとりでに動いた。そこで若君は家来にこういった。「今日はきっとうまい御馳走が食べられるに違いない」と。

御殿へ行ってみると、予想どおりスッポンを料理していた。

「食指動」（しょくし・うごく）とは美味を得る前兆を意味する。ただし、殿様は若君の予言を無効にさせようと思って、スッポン料理を食わせなかった。若殿は怒って鍋に指を入れて舐めたという。大変な貴公子だ。舐めるのも食べる一種であり、予言を有効にしようというわけ。

いつの間にか、自動詞の「動く」を、他動詞の「動かす」にして「動食指」となり、「食指を動かす」という。物を欲しがる意味になってしまった。

(一)巨指（親指）(二)食指 (三)将指（中指）(四)無名指 (五)小指

助長

「助長」（じょちょう）。

「この生徒は理科の成績が良い、その才能を助長したら物理学者になるかも知れない」

「助成」（じょせい）というのは読んで字の如く助け成す——であって、力を添えて成し遂げさせることであるが、この「助成」よりも一層積極的なのを「助長」だと思って、「助長すべし」だとか「助長しなくてはならない」とかいう。

しかし「助長」を、そのように使うのは誤りである。まちがって使われても、多くの人がそう使えば普通になることもあるが、この「助長」は『孟子』の言葉としてあまりにも名高いのであるから、一般にまちがって使われても、それに従いたくない。

「助長」とは、速成を望んで、かえって事を損うことである。よけいな世話をやいて相手に迷惑をかけることでもある。

『孟子』の中に出てくる昔話。

昔、宋（人智の開けない地方、馬鹿者の多い地方の代名詞とされた）というところに、百姓がいたが、自分の植えた苗がなかなか伸びない、どうしたら早く伸びるだろうかと心配のあげく、苗を一本ずつ引っぱって長くした。そのため、すっかりエネルギーを使ってしまい、家に帰って「ああきょうは疲れたぞ、なにしろ、苗を助けて伸ばしたから」という。彼の子が、おどろいて畑へ行って見たところ、苗は皆枯れてしまったという。

勿二助長一也　無下若二宋人一然上（助け長ぜしむることなかれ、宋人のごとく、しかするなかれ）

宋人有下閔二其苗之不レ長、而揠レ之者上（宋人、その苗の長ぜざることを閔へて、これを揠く者あり。閔＝憂、揠＝抜）

芒芒然歸、謂二其人一曰、今日病矣。予助レ苗長矣（ぼうぼうぜんとして帰り、その人に言って曰く、今日病れたり、われ苗を助けて長ぜしむ、と）

其子趨而往視レ之、苗則槁矣（その子、趨り往きてこれを見れば、苗すなわち枯れたり）
助レ之長者、揠レ苗者也、非二徒無一レ益、而又害レ之（これを助けて長ぜしむる者は、苗を揠く者なり、ただ益なきのみに非ずして、而して、またこれを害ふ）――孟子・公孫丑篇上。

不可使知（知らしむべからず）

「不レ可レ使レ知」（知らしむ可らず）。孔子の言葉として『論語』に書いてある名高いもの。「民は之に由らしむべし、之に知らしむべからず」であって、封建的な政治を意味するものとして、よく引かれる。

人民というものは政府の政策に盲目的に従わせればよい、人民には何も知らせてはならないというのが、孔子の政治思想である、――と非難する。また、儒教は民を愚にする封建的専制政治を主張するものだ、アンティ・デモクラシイだと非難される。

孔子に対する、この非難は当らない。それは漢文の読み違いである。

「可」という字は、できる、つまり可能の意を表わすのであって、決して「可」（べし）が命令、「不レ可」（べからず）が禁止ではない。日本の言葉では「べからず」は禁止であり、「この土手に登るべからず」であるが、漢文の「不可」は禁止ではない。不可解、不可能、不可思議は、フカカイ、フカノウ、フカシギである。不可解とは、「解しては、いけない」という意味ではなく、「解することができない」である。

孔子は「人民には政府の政策に従わせることはできるが、人民に政府の政策を知らせることはなかなか、できない」と、なげいたもの。

新聞などでよくみる世論調査において「わからない」階級が多いのに驚くのと同じだ。

孔子が、政治をやってみて彼の方針を人民に理解させようとしたが、それが、できなかったと嘆息した。

「知らしむべからず的政治」などというのは、漢文の文法初歩を知らないのか、それとも知っていながら自分につごうよく曲解したかである。

子曰、民可レ使レ由レ之、不レ可レ使レ知レ之――論語・泰伯篇

人生感意氣（人生意気に感ず）

「人生感二意気一」（人生・意気に感ず）。
「飲みに行こうよ」
「よし、人生意気に感ずだ、行って大いに飲もう」
なぞと、簡単にいう。これは、同気相求めるというだけのこと。遊興するくらいのことだけで、人生、意気に感じては、原作者に叱られる。
唐の元勲たる魏徴の詩の中にある文句。

「述懐」と題して『唐詩選』の最初に出てくる長い詩の終わりにある文句。魏徴が唐の高祖の命を受けて山東省方面の強敵を討とうと出かける時の詩である。

この詩は長く難しい文句が多く、それを説明すると講義録みたいになるからやめる。最後の四句だけ説明する。

季布無二二諾一　季布に二諾なく
侯嬴重二一言一　侯嬴は一言を重んず
人生感二意氣一　人生、意気に感ず
功名誰復論　功名誰かまた論ぜん

「季布」、昔、楚の国に季布という人があった。任侠の士で「季布一諾」といって、彼が一度OKといえば、決して裏切らなかった。

「侯嬴」、昔の魏の国の人。一度約束したら決して、それを破らず、信陵君の知遇には死をもって報いた。

この昔のふたりの士のように、魏徴も唐の天子の知遇に報いるために、これから難しい仕事をしに出向くのである。一身の功名は、いまさら問題ではない「人生感意気」である。

心中賊（心中の賊）

「心中賊」（しんちゅう・の・ぞく）。

明の哲学者王陽明の言葉である。

山中の賊を破るのは易しいが、心中の賊を破るのは難しい――というのであるが、山中の賊といっても、日本的の山賊ではなく、水滸伝的な一つの国家ともいうべき組織をもった一大ギャングが、王陽明のいう「山中の賊」である。

叛乱を討伐した王陽明にして、はじめていえる言葉である。普通の哲学者の言葉なら、単なる形容で、なんらの権威がない。

破二山中賊一易、破二心中賊一難、區區翦二除鼠竊一、何足レ爲レ異、若諸賢掃二蕩心腹之寇一、以收二廓清平定之功一、此誠大丈夫、不出之偉績。（山中の賊を破るは易く、心中の賊を破るは難し、区区、鼠竊を翦除するは、なんぞ異と為すに足らん。もし諸賢、心腹の寇を掃蕩し、もって廓清平定の功を収むれば、これ、まことに大丈夫、不出の偉績なり）

（1）中国の代表的な大衆小説。宋江を首領とした百八人の豪傑たちが、河北・山東の地を横行し、悪徳官僚を相手にして活躍する武勇伝。

王陽明は弟子たちに、こう教えた、

「良知というものが生まれながらに人間の心に在って、聖人も馬鹿も、その点では区別はない、天下古今の同じきところなり」と。

良知之在二人心一、無二間二於聖愚一、天下古今之所レ同也（良知の人心に在るは、聖愚を間つるなく、天下古今同じき所なり）

山賊が、この話を聞いて「では、先生にお尋ねしますが、私にも、その良知てえのがあるんですかねえ」

「ある」

「じゃ、そのある証拠を見せてください」

「よし、では、お前ここで裸になれ」

「そんなことくらい、平ちゃらで……」

と、賊は着物を脱いだ。すると王陽明は、さらに、

「それから、褌も、はずせ」

「なんぼなんでも、褌は困りまさあ、それじゃ、先生、ストリップじゃありませんか」

「それ見ろ、褌を取るのは困る——というのが、正に良知のある証拠だ」

この話は、西洋には通用しない。西洋人なら山賊でなくても、紳士淑女でも平気で同性の間なら、生まれながらの素っ裸になる。素っ裸は、ギリシア以来なれている。

推敲

「この文章は表現がまずいよ、もっと推敲したまえ」とか、「文章は一応よめるが、思想が足りない、いま少し推敲の必要があるね」とかいう。

推敲とは文章を練り直すことだが、必ずしも形の上の文句だけでなしに、文章の内容についてもよく考えることである。

推は「押すこと」、敲は「たたく」ことだ。

なぜ、押したりたたいたりすることが、詩や文章の字句を練ることになるのか。これには故事来歴がある。

唐の詩人賈島（浪仙）は苦吟で名高い。彼の詩の中にも「風光別我苦吟身（風光別る我が苦吟の身）」というのがあるほど。

彼が、「僧推月下の門」（僧は推す月下の門）という文句を考えついたが、次に「僧敲月下門」（僧は敲く月下の門）という文句を考えついた。さてこの二つを並べてみると、どっちも面白い。「推す」にしようか「たたく」にしようかと思案に余って、まあ一種の軽い神経衰弱にかかった。

寝ても、さめても「推す」か「たたく」かと、そればかり考えていた。ロバに乗って往来を歩きながら「推す」か「たたく」かと、手真似を続けていたものだから、つい偉い役人の行列にぶつか

ってしまった。千何百年も前のことだ。たちまち「無礼者」と捕えられて、その役人の前に引っ立てられた。

幸いにも、この役人というのが、名高い学者の韓愈（退之）、我が国の菅原道真は韓愈のイミテーション。潮州へ左遷される前だった。事の始終を聞いた韓愈が「たたく」ほうが面白いという判決を下した。

うるさい漢学者は、「推敲」をタイコウと読む、参考までに。

過猶不及（過ぎたるは、なお及ばざるがごとし）

「過猶レ不レ及」（過ぎたるは、なお及ばざるがごとし）。

「過ぎたるは及ばざるがごとし」と、中の「なお」を省いて使われることが多い。

われわれは、諺のように、この文句を日頃使っている。

「腹がへって働けない」というのと、「大飯を食って働けない」というのは、身体が、だるくて働けないという点で同じである。こうした場合、食事に関しては「過ぎたるは及ばざるがごとし」という。適量よりもプラスであってもマイナスであっても困る。

この言葉は二千五百年も前に孔子がいい始めたものである。『論語』の「先進篇」に出ている。孔子の高弟に子貢という理財家があった。この子貢が同門の子張と子夏との比較を先生と論じた。

子貢「あのふたりは、どっちが賢なのでしょう」

孔子「子張は過ぎてる、子夏は不足している」

子貢「そうすると、子張のほうが、まさっているのでしょうか」

孔子「過ぎるということは、不足しているのと同じようなものである」

子張の姓は顓孫、名は師。子夏の姓は卜、名は商。

子貢問、師與レ商也孰賢。
子曰、師也過、商也不レ及。
曰、然則師愈與。
子曰過猶レ不レ及。

子貢問う、師と商と、いずれがまされると
子曰く、師や過ぎたり商や及ばずと
曰く、しからば則ち、師まされるかと
子曰く、過ぎたるは、なお及ばざるがごとし

いわゆる漢文式の訓読では、「賢」も「愈」も共に「まさる」というから、文字を見ないで、耳で聞くだけでは混乱をきたす。

「賢」という字は、この場合、俗にいう「頭がいい」といった程度のものであろう、物覚えとか、物判りとかの意味で、そんなに難しい哲学的や倫理学的の会話ではないようだ。頭脳明晰という意味の「賢」なら、いくらあっても「過ぎる」ということは有り得ない。

「愈」の「まさる」は、英語のベター。

「ちゃっかりと、うっかりとでは、どっちが良いとはいえないね」と、孔子が批評したものであ

る。

だから「過猶不及」とは、別に普遍妥当性のある哲理ではない。たとえば、金銭の如き、足りないのは大困り、有りあまるということはない、「多多益弁」（一六〇頁参照）である。

杜撰

杜撰は普通に漢音で読むと「とせん」であるが、これに限って「ずさん」と読むことになっている。宋時代の中国南部の発音を留学帰りの坊さんが流行させたものらしい。

「この文章は、どうも杜撰だ、も少し辞句を練りたまえ」「文章は、ともかくとして、内容が杜撰だ、こんなものを書いては、きみの頭が杜撰だという証明になるよ」などと、上役が下っ端の書いたものに文句をつける時、しばしば、この「杜撰」という言葉が出てくる。「杜撰」とは、ぞんざい、疎漏、粗雑なやっつけ仕事を意味するようである。

漢文のほうでは、著作や議論に誤りが多くて信用することのできないのを「杜撰」という。典故も出所もない時に「杜撰」というのである。「杜撰」という言葉の、よって来たるところも知らないで杜撰呼ばわりするのも「杜撰」というわけである。

杜黙の詩の選集、すなわち『杜撰』にある詩は規則はずれが多かったからだという説が第一。杜撰という人の作った文章は根拠がなかったからだという説が第二。

また道教の書五千巻の中で、ただ『道徳経』二巻だけが本物で信用することができる、あとの五千マイナス二の四千九百九十八巻は、みな蜀の道士で杜庭光という人が撰した信用できない物であるからだという説が第三。

このほか諸説紛々、いずれを「杜撰」の出典であるかと決定することは難しい。うっかり、どれが、その出典だなどとすると杜撰のそしりを免れないことになる。

(一) 杜黙爲レ詩、多不レ合レ律、故言レ事不レ合レ格者、爲二杜撰一。（杜黙詩を為る。多く律に合せず。故に事を言ひて格に合はざる者、杜撰となす）——野客叢書

(二) 杜撰作レ文、無レ所二根據一。（杜撰文を作り、根拠する所無し）

掣肘

「掣肘」（せいちゅう）。

「あの敏腕の専務も、ああ社長や株主に掣肘されては、仕事ができないだろう」などと、他人の臂を横から引っぱって邪魔すること。

宓子賤という人が魯の殿様に仕え、単父という地方の長官となった。彼は殿様の側近にあった書記ふたりを借りて使った。ところで、書記が字を書こうとすると、長官は必ず臂を引っぱって邪魔する。

それでありながら、書記の字が下手くそだといって怒る。ふたりの書記は困って、そんなのはな

いだろうと、殿様のところへ帰って、そのことを告げた。

おかしなこともあるものと、殿様は、このことを孔子に話した。

孔子は、しばらく考えていたが、「それは、彼が殿様を諛めてるんじゃないでしょうか」といった。殿様は讒言を信じて、宓を掣肘して仕事の邪魔になったことに思い当り、「単父は、私の領地とは思わない、長官の存分にやれ」と、それから彼に一任したという。

『孔子家語』「屈節篇」にある話。

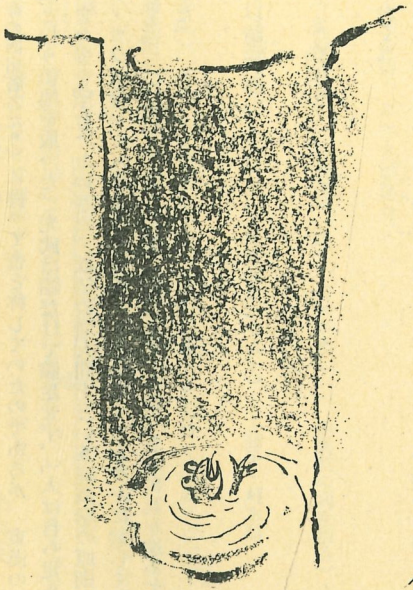
掣二其肘一、書不善則従而怒レ之。（その肘を掣し、書よからざれば、すなわち従って之を怒る）

井底之蛙（井底の蛙）

西漢（前漢）が亡んで東漢（後漢）が興るまでの乱世の人物が公孫述、たいした人物ではないが、彼に関する三つの話は名高い。

第一、「辺幅を修飾す」。第二、「井底之蛙」。第三、「隴を得て蜀を望む」。その三つである。

公孫述が帝と称していた。そこへ旧友の馬援（後に東漢の名将となった人物）が訪ねていった。手を握って懐しがるだろうと馬援は考えていたのであったが、公孫述は近衛兵を並べて大いばり。馬援は失望して家来に語った、「天下、雌雄未だ定まらないのに、礼を厚うして国士を迎えず、辺幅（区々たるスタイル）を修飾している、でくの坊だ」と。こうしたことは現代にも、よくあること



井底之蛙

だ。「彼は井底の蛙にすぎない」ともいった。「井の中の蛙、大海を知らず」というのは、日本製ではない。『荘子』には「井蛙」とある。

公孫述は蜀（今の四川省あたり）に拠って帝と称していたのであるが、東漢の光武皇帝が公孫述の軍を破って、隴という領地を取った。光武は隴だけで満足せず、「人は自ら足らざるに苦しむ、すでに隴を得て、また蜀を望む」といった。欲望の増大向上という経済学の原則に当てはまっている。白黒テレビ・カラーテレビ・ルームクーラー・自動車……と次々に欲しくなる、こうした場合に、「隴を得て蜀を望む」という。光武皇帝は隴を取った後、さらに兵を進めて公孫述を攻め殺し、蜀全体を平らげた。

井蛙不レ可三以語二於海一。（井蛙は以て海を語るべからず）——荘子・秋水篇

折角

「折角」（せっかく）。

「せっかく貸してやろうというのに、要らないという」ように、努力の効ない時に使う。古風のいい方では「せっかく、御身御大切に」などと手紙にかく、この場合は「充分に気を付けて、つとめて」という意味。古くは『保元物語』の中で為朝が、「折角の合戦、二十余箇度なり」といって、大いに骨折ったという意味に使っている。

「折角」というのは読んで字の如く「角を折る」であって、漢文では、高慢の鼻を折ることに使っている。

漢に五鹿という傲慢な学者がいた。朱雲という人が五鹿と易について議論して、さしもの五鹿を散々にやりこめた。五鹿を憎んでいた学者仲間は、それを痛快がって、「朱雲は、なんて力の強い男だろう、五鹿の角を折った」と洒落た。

五鹿嶽嶽、朱雲折二其角一（五鹿嶽嶽〔角立っていかめしい〕、朱雲其の角を折る）——漢書・朱雲伝

折檻

「折檻」（せっかん）。きびしく責め立てて、大いに叱っただけでは足らず、叩いたり、つねったりの体罰、芝居に出てくる継子いじめ——のように考えるのはまちがった使い方である。故事を知らないで、「折檻」という文字だけ見て、打ちのめす——ものと早合点したのが「折檻」を誤り用いた原因でもあろうか。「折檻」とは、「強く諫める」ことである。

前漢の成帝は張禹という男を信用して、それに政治を委せた。いろいろの意見書を奉る者があっても、皇帝は、それを張禹に見せて相談するから、なんにもならない。

朱雲という硬骨漢が皇帝に拝謁を求め「御物の斬馬剣を拝借して、佞臣ひとり(1)の首をはねて、そ

(1) 腹黒く、口先でうまくこびへつらう家臣。

の一党の見せしめにしようと存じます」といった。皇帝は尋ねた。

「佞臣ひとり、とは誰のことか」

「張禹でございます」

皇帝は大いに怒って「師と仰ぐ張禹を、朝廷で公然と侮辱するとは無礼至極、その罪は死んでも許さんぞ」と、どなった。家来が彼を御殿から引きおろそうとした。朱雲は御殿の欄檻をよじ登ろうとする、下から引っぱる。そこで、欄檻が折れた、これが「檻を折る」であり「折檻」のおこりである。朱雲は落とされて血を流しても頑張った。この頑張りに驚いて、皇帝は朱雲を許した。

家来が折れた欄檻を修繕しようとすると「新しい材料を使うな、もとのままの折れたのを集めて、ちょっと繕っておけ、それで直臣を表彰するから」と皇帝は、いった。

日本語の「せっかん」は「せがみ」の音便で「折檻」の故事を誤用す——大言海

御史将雲下、雲攀二殿檻一、檻折。（御史〔官吏の罪を糾弾する事をつかさどる官〕雲を将きて下す。雲、殿の檻に攀りて、檻折る）——漢書・朱雲伝

折衝（せっしょう）

『折衝』（せっしょう）。

「うまく折衝してきたまえ」などと、談判や売買の取引で、かけ引きすることに使う。

しかし、文字を見ると、「折」と「衝」（つく）で、敵の突いてくるのを挫く——という意味。武術では、相手の、突きをはねとばすことであり、戦争では、敵の攻撃を破ることである。なぜ「衝を折る」というのが、取引の、かけひきという意味に変わったかというと、それは「樽俎折衝」と続いているのを略して、ただ「折衝」と用いるからである。

「樽俎」は「樽（たる）と俎（まな板）」、共に宴会を開くための必要品、これが転じて平和の交際をいう、国際会議や外交談判を漢文口調で「樽俎折衝」である。

西洋でも「会議は踊る」（ドイツ語でコングレス・タンツト）などというが、中国では、国際会議は飲んだり食ったりすることでもあったようだ。我が国の料亭政治なども、その亜流か。

孔子が晏嬰を褒めていったという言葉から出ている。

「樽俎の間を出でずして、而して千里の外に折衝するとは、晏子のことをいうのである」と。

不レ出二樽俎之間一、而折二衝千里之外一、晏子之謂也。——晏子春秋

平和交渉、つまり宴会の席から出ないで、敵の攻撃を千里の外に追い退けるというのは、晏子のことだ、と孔子が褒めたのである。

晏嬰の字は平仲だから晏平仲ともいう。彼は戦国時代の斉の宰相、節倹力行でも名高い。「一狐裘三十年豚肩不レ掩レ豆（一こきゅう三十年、豚けん、とうを、おおわず）という言葉は倹約だという形

容に使われる。一枚の狐の毛皮を三十年も着た、また豚の肩の肉が器の中に拡がらないで、ちょこんとしていたということ。「豆」とは、台の付いた皿に蓋のある食器、これを「まめ」とするのは「とう」という発音を使った借字。

「晏子御」（あんし・の・ぎょ）ということがある、晏嬰の馬車の御者のこと。

この御者は大きな蓋のある馬車に乗り、駟馬といって、四頭立てを御して意気揚々と大得意で、そっくり返っているのを、その妻が門の中からのぞいて見ていた。彼が仕事をすませて帰宅すると、妻は夫婦別れを申出た。その理由にいわく、晏子は大国たる斉の宰相として列国にも名の現われた人である。それであるのに、腹ができてるから、何時もへりくだって居られる。身体こそは小さいが、立派な人だと感心している。ところで、あなたは、図体ばかり巨くて、召使われの御者ではないか、それでありながら満足しきって大いばりじゃありませんか、そんな人といっしょに居たくありません、という。

この御者は妻にそういわれてから、おとなしくなり、抑損、つまり何事もひかえ目にするようになった。

急に御者の様子が変わったので、晏嬰が不審がり、「どうした、日頃の元気はないじゃないか、いやにしょげてるではないか」と尋ねた。

御者は、実はしかじかと、妻に逃げられかけた話を白状した。この恐妻家の御者は上官に取立てられたという。

晏子爲二齊相一出、其御之妻、從二門間一而闚二其夫一、其夫意氣揚揚、甚自得也、既而歸、其妻求レ去、曰、晏子長不レ滿二六尺一、身相二齊國一、名顯二諸侯一、今者妾觀二其出一、意念深矣、常有二以自下者一、今子長八尺、乃爲二人僕御一、然子之意自以爲レ足、妾是以求去也、其後夫自抑損、晏子薦以爲二大夫一。（晏子斉の相と為りて出づ。其の御の妻、門間よりして其の夫を闚うに、其の夫意気揚揚として甚だ自ら得たり。既にして帰る。其の妻去らんことを求めて曰く、晏子は長さ六尺に満たざるに、身は斉国に相となり、名諸侯に顕はる。今妾〔私〕其の出づるを見るに、意に念ふこと深し、常に以て自ら下る者有り。今子〔あなた〕は長さ八尺、乃はち人の僕御為り、然れども子の意自ら以て足れりと為す。妾ここを以て去らんことを求むるなり、と。其の後夫自ら抑損し、晏子薦めて以て大夫と為す）――史記・管晏伝

糟糠之妻（糟糠の妻）

糟糠（そうこう）の妻。立志伝中の人物が彼の妻を新聞記者たちに紹介する時に「我が輩の糟糠の妻だよ」などと、よくいう。貧乏で十分に飯も食えず、糠を食ったということで、「ぬか味噌くさい」という意味ではない。

東漢の光武皇帝の家来に宋弘という男がいた。重厚正直で通っていた、しかも、なかなかの美男であったらしい。皇帝の姉の湖陽公主（公主というのは内親王のこと）という未亡人が、この宋弘を見染めた、そして弟に、なんとかしてくれと頼んだ。

宋弘が皇帝のところへやってきた、公主は屏風の陰にかくれてふたりの会話を聞いた。

皇帝「諺にいうではないか、富んでは交りを易え、貴くしては妻を易うと、これは人情だな」宋弘「貧賤の交わりは忘るべからず、糟糠の妻は堂より下さずですよ。（糟糠妻不レ下レ堂）」皇帝はふり返って屏風越しにいった、「これじゃ、駄目ですよ」と。――後漢書・宋弘伝

貧乏の時にもらった古女房を追い出して、貴い未亡人といっしょになる、つまりこれで、ところ天をやろうとする計画は重厚正直な宋弘にかかっては失敗であった。光武皇帝は、こうした頑固な男を好んだ。

注＝天明四年（一七八四）、筑前の志賀島の土の中から掘り出した「漢委奴国王」と書いた金印は国宝として名高いが、これはこの光武帝が、北九州の誰かに与えたものであるという。光武の「建武中元二年（西暦五七年）委奴国王、貢を奉じて朝賀す」というのが向こうの記録にある。

太公望

毎年、アユの解禁日になると、「アユの厄日」であるが、「ずらりと並んだ太公望」という写真が載せられる。

太公望というのは漁師のことではない、素人釣師のことである。

西紀前八世紀の大昔、殷という王朝の末、紂という乱暴な王が人民を苦しめたので人民は革命を望んだ。そのころ、西伯という諸侯が人格がすぐれた人であるという評判であった。呂尚という老人は年七十になったが、西伯に会いたいと東の方の国から釣をしながら川をさかのぼって西の方へ来て、渭水という川で釣をしていた。

そこへ西伯が狩りに出て呂尚を見かけ、話してみると、学問もある立派な人物、「私の父の太公が生きていた時、やがて、りっぱな人が、この国に来る。その人の力によって、我が国は栄えるであろうといっていた。あなたこそは、太公の望んでいた人に違いない」といって、いっしょに車に乗って城に帰り、呂尚を自分の先生とした。そして、太公が待ち望んでいた人であるというので「太公望」と呼んで尊敬した。

この西伯が周の文王であるが、その子の武王に至って、ついに殷を滅ぼして周の王朝を立て、文物さんぜんたる周の時代が始まった。

太公望が釣をしていたことから、今でも素人の魚つりを太公望という。孔子も「釣すれど網せず」と、やはりアマチュアである。

釣れますかなどと文王そばへ寄り

というのは名高い川柳である。

泰斗（たいと）

「泰斗」（たいと）。「世界における動物学の泰斗」「植物学界の泰斗」というのは古めかしいと、泰斗のかわりに「オーソリティー」「権威」「最高峰」あるいは、「第一人者」という。どれにしても同じことだが「泰斗」というと、いかにも老大家という感じがするらしい。「権威」という言葉は漢文にはなく、西洋語のオーソリティーの訳語の権力威信の二つをあわせたもの、明治漢語である。「泰斗」は泰山と北斗をあわせたもの。北斗は今でいう大熊星座、星座の中で最も目立って目標になる。泰山は山東省の山、それほどの山でもないが黄河下流の大平原にあっては高く目標になる。利根川下流、筑波山の大陸版の泰山の頂に「丈人峯」というのがある。丈人（杖とも書く）とは長老のこと、これから妻の父を指して岳父（嶽父）という言葉も出てくる。

漢文には「泰山」は、大きな山のたとえとして、しょっちゅう用いられる。泰山は太山とも書く。「泰山は土壌を譲らず（泰山不レ譲二土壌一）」「――泰山は小さな土くれでもいとわず捨てることをしない――」故によくその大を成す」というのは度量が広いこと、「河海細流を択ばず、故にその深きを成す」と対句になる。大政治家をもって自任する男が、もろもろの悪いことを平気でやってのけるとき自己弁護に悪用する。……出典は李斯（秦の宰相。始皇帝を助けて天下一統の功を立てた）「諫二逐客一上書（外国より客分として来り仕える臣を追い払う事を諫めた上書）」。「太山に登りて天下を小とす」（登二太山一而小二天下一）、観光登山の宣伝文……これは孔子が登山した話で、孟子の言葉。

「泰山、前に崩るとも色変ぜず」（泰山崩二於前一而色不レ変）……蘇老泉（蘇東坡の父）の文句。「泰山を挟んで北海（今の渤海）を超ゆ」（挟二泰山一超二北海一）、不可能なこと……孟子。「大山鳴動、鼠一匹」ラテン語の諺の飜訳。

英語では The mountain is in labour and bringing forth a mouse.

他山之石（他山の石）

「他山之石」（他山の石）。

「私のつまらぬ経験談も、皆様にとって他山の石となりますれば、幸甚と存じます」などと、古風な演説でいう。

他処の山から出る粗悪な石を用いて、我が玉を磨く。ダイアモンドを磨くには、ブラック・ダイアモンドを使うようなものである。不善の人も、善人の徳器を増す道具になるということ。「ひとのふり見て、我がふり直せ」である。

英語の「ダイヤがダイヤを切る」　It is diamond cut diamond.

は、悪智恵同士が、ちょうちょうはっしと火花を散らしての、欺し合いで、日本でいう、狐と狸の化かし合いのことである。

他山之石可二以攻一レ玉（他山の石、もって玉を攻むべし）――詩経・鶴鳴

蛇足

「それは蛇足だよ、やめたほうがいい」などと、むだなよけいなことを蛇足という。よけいというだけではなく、よけいなことをして、せっかくできあがったものにマイナスを付けるどころか、駄目にしてしまうのを蛇足という。

戦国時代の話、楚の国で、ある人が酒一杯を振る舞った。たった一杯である。皆が相談した、「たった一杯の酒を、我々数人で分けて飲むには足りない、ちょうどひとり分だ、地面に蛇の絵を描く競争をして、一番先に描いたものが飲むことにしよう」という話が決まり、皆が競争で絵を描き始めた。

ひとりの男は、蛇の絵を、まっさきに描きあげて、「一番だ、おれが飲むよ」と左手に杯を持ちながら「どうだ早いだろう、君たちが描けないうちに、おれは足まで描けるぞ」と、得意になって足を描きだした。すると、いまひとりの男が、蛇の絵を描き終えて、杯を横取りして、「蛇に足があるものか、足を付けたら蛇じゃないよ」と、いって、その酒を飲んでしまった。

先なる男は、せっかく早く描きあげたのに、余計な蛇足を付けたばかりに、飲めるはずの酒を取られてしまった。

これは楚の昭陽という将軍が魏の国を攻める命令を受けて、大成功。得意になり、もっと強いと

ころを見せようとして斉の国まで攻めようとした。斉に陳軫という賢い人がて、昭陽を説いた「魏を攻める命令を受けて魏を降参させた。命令にない斉を攻めるのは蛇足です」と、この話をした。斉を攻めて少しでも失敗したら、魏を攻めた手柄が蛇足になると昭陽はさとって、斉を攻めるのをやめた。

為二蛇足一者、終亡二其酒一。（蛇足を為りし者、終に其の酒を亡う）——戦国策・斉策

多多益辨（多々ますます弁ず）

「多多益弁」（たた・ますます・べんず）。多ければ、多いほど結構という時に、この、「たた・ますます」を使う。子供が父親に、ねだる時、女房が亭主にボーナスの分け前を要求する時、その他、役所や会社や学校などで予算のぶんどり合いをやる時、「いったい、いくら出しゃいいんだ」「多多ますます弁ずですよ」というわけである。初歩英文法で習うザ・モア・ザ・ベターに当たる。

この漢文「たた・えきべん」を使い始めたのは漢の将軍韓信である。

漢の高祖が韓信と雑談のおり、諸将の批評が出た、「だれそれは、どれほどの兵数を指揮できるか」という問題であった。皇帝が尋ねた「もし、自分が将軍だったとすれば指揮能力はどれほどであるか」、韓信は答えた「まあ、せいぜい十万人というところでしょうか」「では君は、どうか」「わたくしは多ければ多いほど好都合です」。『十八史略』には「多多益弁」となっているが、『史記』では「多多而益善耳」（多多にして、しこうして、ますます善きのみ）となっている。

韓信は話のあとで、「陛下は将に将たり」といって砂をかけている。

若い時に隠忍自重、与太者の股までくぐった韓信の言葉らしくもない。いわなくても、いや、いってはならない本音を吐いたもの。

「百万の衆をつらね、戦えば必ず勝ち、攻むれば必ず取るは、吾、韓信に如かず」と高祖は口で褒めたが、腹の中では恐れた。天下平定の後、韓信は殺された。

「狡兎死して走狗煮られ、飛鳥尽きて良弓蔵し、敵国破れて謀臣亡ぶ」と、韓信がさとったが遅かった。

他人鼾睡（他人の鼾睡）

「他人鼾睡」（他人の・かんすい）。

「鼾睡」は、いびき。うわばみ的いびきは、はた迷惑。ひどいのになると、旅館などで隣室を隔てて響いてきて安眠妨害というのもある。「豪傑鼾声如レ雷」と、雷みたいなのは困る。こうした豪傑は耳鼻科の先生に見てもらう必要がありはしないか。

それでも友達や家族の鼾声なら因果と諦めることもできるが、他人のは癪にさわる。

宋の太祖が、ほぼ天下を統一して皇帝となったが、揚子江の南の一帯たる江南地方には李煜というのが金陵（南京）を根拠地として独立していた。

太祖は流血の惨を好まず、手やわらかに宣撫しようとしたが、李は聞かない。李は徐鉉という者を使わして「江南には罪がない、何も悪いことをしないのに攻めないでほしい」と、いわせた。徐鉉という男は、しつこい性質で、「江南無罪」を、うるさく、幾度もわめいた。

温和な太祖も、とうとう怒って、剣の束に手をかけて、「江南無罪はもう判ってる。ただ天下は一家である。ベッドの側で他人のいびきは我慢できないのだ」と、いった。

徐鉉は、恐れ入って引きさがった。

金陵は、宋の大軍に兵糧攻めにされて、降参した。

但天下一家、臥榻之側、豈容二他人鼾睡一乎。（ただ、天下は一家、臥榻〔寝台〕のかたわら、あに他人の鼾睡を容れんや）——程史（宋・岳珂の著）

端倪

「端倪」（たんげい）。

「あの男は無軌道、ナンセンス、あれのすることは、端倪すべからずで、何をいいだすか、やりだすか……」。「端倪」は、推測することであるが、推測できないときに、「端倪すべからず」と、

（1）地方や占領地で、政府あるいは自国の意向を正しく宣伝して、人心を安定させること。

否定、打消に用いる。

「端」は山の頂、「倪」は水のはて。この二つを合わせて、始めと終わりのこと。「不レ可二端倪一」（端倪すべからず）は、始めも終わりも判らない、測り知れないということ。

唐の文豪、韓愈が、草書の大家張旭を評した言葉。

旭之書、變動猶下鬼神上不レ可二端倪一。（旭の書は、変動、なほ鬼神の端倪すべからざるがごとし）

『荘子』の「大宗師篇」に

反覆終始、不レ知二端倪一。（反覆終始、端倪を知らず）

男女同席

「男女七歳にして席を同じうせず」という言葉は、封建的の男女の習慣としてしょっちゅう引き合いに出された、また出されつつある。

『礼記』という二千何百年か昔の本に「七年男女不レ同レ席」とある。男女共学反対者はこの「男女七歳……」を、東洋古来の美風のバックとするし、男女共学賛成の側では、この「男女七歳……」を、頑固な古くさい思想のサンプルとして使う。

しかしながら、賛否両方とも、この言葉の意味を、はっきり知らないで使っている場合が多いようだ。「席」（せき）の意味を知らないで、これを「室」と混同し誤解している向きが少なくない。

「席」は「座席」という熟語があるように、一室のことではない。男女同席と男女同室とでは意味が違う。

「席」は「蓆」とも書き「むしろ」のことである。古代の建物には床がなく、土間に住んでいたので、そこに「席」、つまり「むしろ」を敷いて坐っていた、今の畳より少し大きく、普通、一枚の席に四人が坐り、お客は一枚にひとり、身分によっては牢名主みたいに何枚も席を重ねた。[1]

男女同席しない——というのは、男女が一枚の席に坐らないというのであって、一室のうちに男女がいっしょにいては、いけないというような頑固な話ではない。

「席」に枕を付けて「枕席」を同じうするのは夫婦生活を営むこと、臨時夫婦のこともありうる。

斷腸

去年今夜侍二清涼一　去年の今夜清涼に侍し
秋思詩篇獨斷腸　秋思の詩篇独り断腸

「断腸」（だんちょう）。悲しみが深くて、胸が張りさけそう、というのを漢文では「断腸」「断腸の思」という。

「断腸」というと、腸捻転か盲腸の手術みたいであるが、この言葉は古くから使われ、唐人の詩にはしばしば出てくる。我が国の菅原道真も、それを真似て太宰府の配所で詠んだのが「去年今夜侍清涼、秋思詩篇独断腸（去年の今夜、宮中の清涼殿の観菊の宴に天子のそばにはべり、その時詠んだ秋思という詩をたいへんおほめにあずかった、が、今はそれも悲しい思い出にすぎない、それを思うと腸もちぎれそうである）」云々という詩、といって道真が切腹したのではない。悲しい、というだけのこと、唐人の流行語を使うところが彼の学である。

（1）江戸時代、囚人の中から選ばれて、牢内の最大の権力をもって取締りをした囚人のかしら。

『捜神後記』という古い伝説集に、この「断腸」の由来がある。

「昔ある狩人が山の奥から猿の子を生捕りにして帰ってきた。そしてそれを庭の木に縛っておいた。すると猿の母親があとを追ってきて、手真似で子供を助けてくれとしきりに頼む。しかしその狩人は、たいへん残酷な男であったから、母猿の切なる願いをはねつけて猿の子を殺した。

母猿は悲しい声で鳴いていたが頭を地面にぶちつけて自殺してしまった。狩人が死んだ母猿を解剖してみると、腸がずたずたに断ち切れていた」——という。

昔は内臓器官が直接精神に関係あるように考えた。「破胆」、といって胆を破るとは驚くこと、日本語では「胆を潰す」という。

唐の杜牧の詩に「芳草復芳草、断腸復断腸（芳草また芳草、断腸また断腸）」という句がある。

「断腸花」とは秋海棠の異名、むかし女があった。愛人が待てど暮らせど来ない。涙が地に落ちて花が咲いた、色は美婦の如く、甚だ媚ぶ、断腸花と名づく——という伝説がある。

紫房絲女弄明璫、鸞歌鳳舞斷君腸。——鮑照之詩
念君客遊思斷腸。——魏文帝之詩

畜生

「畜生」「こんちくしょう」というのは「馬鹿」「ばかやろ」というのより、ひどいか、ひどくないか。昔、議会で、「馬鹿」といって問題になったが、「畜生」はまだ政治問題になっていない。「あれは畜生だ、畜生にも劣る」などと荘重に構える場合には「馬鹿」よりは、はるかに重大である。

「畜生」という言葉も軽く「ちきしょう」と言えば愛嬌があることにもなる、御同伴を見て羨ましがるときも「ちきしょう」である。美人を見て感嘆して「ちきしょう」といったり、いわないまでも、心の中でそう思う。

日本でも、かつて吉田首相が「馬鹿」といって議会が解散になったことがあるが、「畜生」と叫んで怒ったそもそもの初めは隋の文帝である。「畜生」と呼ばれた方はその太子、即位して煬帝となった男である。わが聖徳太子が小野妹子を遣隋使としたときの皇帝が煬帝である、大運河を作ったのでも名高い。文帝が病気にかかった。すると太子はしめたとばかり、父が死んだらどうするという計画をたてた。そのアンケートの書類がまちがって皇帝のところにも送られた。皇帝は憤慨した。そこへ皇帝の愛する陳夫人が泣きながら来た。訳を尋ねると、「出でて更衣す。太子にせまられ、これを拒んで免るるを得たり」という。そのときである、文帝は怒って、ベッドをたたいて「畜生」と叫び、「こんなやつを太子にするんではなかった」といって太子を取りかえようとした。

太子は先手を打って文帝を殺して即位した。「畜生」と呼ばれた人間の元祖は煬帝である。

帝恚抵レ牀曰、畜生何足レ付二大事一（帝恚りて牀を抵ちて曰く、畜生何ぞ大事を付するに足らんや、と）

——隋書・陳夫人伝

受二地獄畜生餓鬼之苦一（地獄畜生餓鬼の苦を受く）——法華経

民産絶則畜生少（民の産絶えなば、則ち畜生少からん）——韓非子・解老篇

朝三暮四

「朝三暮四」（ちょうさんぼし）とは詐術を用いて人を愚弄して、ごまかすこと。

減税するというから喜んではみたが源泉課税が少ないだけであとの総合課税が多くなり、取られる税金はもとのまま、少しも減税になっていないとか、増給するというから喜んではみたが、物価の釣り上げのため、少しも実質給与はあがっていないとかいうときに、くやしがって「なあんだ、朝三暮四じゃないか」という。

『荘子』の「斉物論篇」にある物語。宋に狙公という男があって多くの猿を飼っていた。狙公が猿どもにこういった、「おまえたちに木の実を朝に三つ、晩に四つずつ与えよう」と。すると、猿どもが怒って、そんな少ないのはいやだといって騒いだ。

そこで、狙公は急に言葉をかえて、「じゃ、朝四つ、晩三つずつにしよう」といったところ、エテ公どもは喜んで妥結、争議に及ばずしてすんだ。

「朝三暮四」に似た言葉が、いろいろある。「朝令暮改」、これは朝、命令を下し、夕方にそれを改める。法令が出ることが頻繁で当てにならないこと、昔だけの話ではない。

「張三李四」、平々凡々の、つまらない人間のこと、張家の三男、李家の四男という意味。張や李は、日本の鈴木、山田、渡辺、佐藤のたぐい。

「朝秦暮楚」、住所不定、諸方流浪すること。

「朝聞夕死」、『論語』の「里仁篇」にある文句。朝、道の教えを受ければ、その晩死んでもいい。

「朝薺暮塩」、朝は菜っ葉、夜は塩だけの素寒貧。

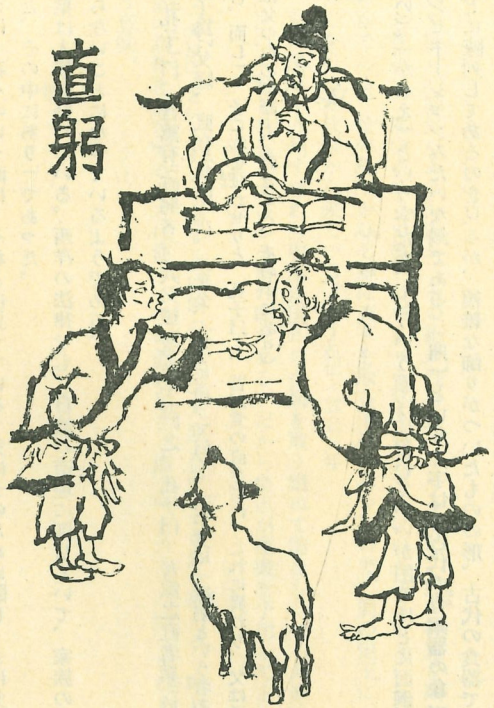
直躬

「直躬」（ちょくきゅう）。

昔、楚の国に躬という名前の男がいた。正直なので「直躬」、つまり「正直者のキュー」と呼ばれた。

ある時、彼の父が羊を盗んできた。すると彼は、それを役人に訴え、自らその証人になった。それほど彼は正直者であった。

葉公、これは「ヨーコー」ではない、「葉」は個有名詞の時は「しょう」と読むことになっている。「葉」は楚の都会。



葉公が孔子に「直躬」の話をして、その意見を求めた。『論語』の「子路篇」にある。

孔子の答えは「我々のいう直は、それとは異っている。父は子のために隠し、子は父のために隠す、直きこと、その中にあり」であった。

孔子の言葉は人情に合っている。西洋の法律でも、自然の道理に則していて、家族の者は、隠しても罪にならないことになっているようである。

葉公語二孔子一曰、吾黨有二直躬者一、其父攘レ羊而子證レ之、孔子曰、吾黨之直者異二於是一、父爲レ子隱、子爲レ父隱、直在二其中一矣。（葉公、孔子に語って曰く、吾が党に、直躬という者あり、その父、羊を攘む、而して、子これを証わせりと。孔子曰く、吾が党の直き者は、これに異れり。父は子のために隠し、子は父のために隠す、直きこと、その中にあり）

鼎立

「鼎」（てい）。「かなえ」という字だが、どういう順序に書いていいか困るほどに面倒くさい。壺と五徳のコンビネーションみたいな鍋である。「鼎」という文字は、古代の青銅器の象形。骨董屋の飾り窓などに陳列してあるのを見るが、複雑な飾りがついたものの形。古代の食器であるが、西洋のトロフィーと同じく、これに文字を彫りつけて、功勲を後世に伝えるための器でもある。また罪人を釜茹でにする道具でもあった。

両耳三足で、三人でやる座談会を「鼎談」という。「鼎立」も三つが並んで立つこと。「鼎沸」これは議論が沸騰すること、「鼎の沸く如し」などという。議論沸騰というのも鼎の中で湯がぐらぐら沸きたぎることにたとえたもの。

絶対的権威や絶対的価値のあるものが、その絶対性を失ってくる時に「鼎の軽重を問われる」という、「問二鼎之軽重一」、漢学のほうでは「けいじゅう」といわず「けいちょう」という。

鼎は周の神器である。楚の荘王がひそかに天下を取る下心があったので、周の定王に、その神器である鼎の目方を尋ねた故事から来ている。——左伝・宣公三年

この鼎は、夏の禹王が九州すなわち中国全国から金属を取り集めて鋳たもので「九鼎」といい夏殷周三代、伝世の宝器である、すこぶる重い鼎である。だから楚王が運搬を予想してトン数を尋ねたわけ。

「九鼎」は「大呂」という大きな鐘と共に周の神器、「九鼎大呂」と合わせ称える、略して「鼎呂」ともいう、重い品物を形容するときに使う。力の強い男を「鼎士」という、「鼎」をひとりで持ちあげるという意味。

桃源

「桃源」（とうげん）。

「桃源境」ともいうし、「武陵桃源」ともいう。世間をはなれた別世界。仙境・ユートピアのこと。

晋の陶淵明の『桃花源記』にもとずく。

湖南省の武陵という所の人が魚を捕えるのに夢中となり、知らず知らずのうちに遠く谷川を遡り、両岸に桃の花が咲いている珍しい光景、桃の林が、どこまで続いているのか探検しようと、どこまでも行くと、桃の林は水源で尽きて、山に行き当たった。山には小さな割れ目がある。そして、奥の方から光がさしているらしい。舟を捨てて、その割れ目からはいると、やっと人の通れるくらいのトンネル、それを数十歩行くと急に、からっと開けた別天地、立派な村と田畑があるし、鶏や犬の声が聞こえ、見るからに楽しそうな村がある。男女の服装は普通とは違っていて、まるで外国人のようだ。

秦の暴政を避けて、この絶境に来たまま、外との交通はないという。秦は、とうの昔に亡び、次の漢が起こり、今では魏を経て、晋の世であるというと、村の人々はびっくり。一軒ずつ御馳走になって数日とどまって立ち去った。元の所で舟を探し、ところどころに目印を付けて帰ってきた。この報告を聞いた知事が家来に尋ねさせたが、探し出すことができなかった。

これは、陶淵明の詩人的想像の産物であって、本当の話ではないようだ。

日本でも、よくある。いわゆる平家の落人部落の話に似ている。日本みたいな狭い島国では、それほど面白い絶境があるはずのものでもないが、広い中国のことであるから、陶淵明の時代には、それに似た土地はあったろうから、まったくの架空の話ではなかろう。

『桃花源記』の始めのところを原文で示すと……

晉太元中、武陵人捕レ魚緣レ溪（溪に緣りて）行、忘二路之遠近一。忽逢二桃花林一、夾レ岸數百步、中無二雜樹一。芳華鮮美、落英繽紛（英は、はな。繽紛は、ひらひらと舞うさま）、漁人甚異レ之、復前行欲レ窮二其林一、林盡二水源一、便得二一山一、山有二小口一、髣髴（ぼんやりと見えるさま）若レ有レ光、便捨レ船從レ口入、初極狹、纔（わずかに）通レ人、復行數十步、豁然開朗（かっぜんとしてかいろう、ぱっと目の前が開ける）、土地平曠、屋舍儼然、有二良田美地桑竹之屬一……

「桃源」に似た言葉に「桃園」というのがあるが、これは『三国志』で名高い舞台で、劉備、関羽、張飛の三人が義兄弟となったところ、「桃園に義を結ぶ」の場面である。

盜泉之水（盜泉の水）

「盜泉之水」（とうせん・のみず）。

「渇しても、盜泉の水を飲まず」とは、清廉潔白を誇る官吏、政治家の、よく使う言葉である。不正なことはしていないとか、汚職には関係ない、とかいえば、すみそうなものであるが、それだけでは力が足りない、言葉に迫力がないというのだろう。「渇しても盜泉の水を飲まずじゃ」という。

始めは、こういったのが、だんだん取調べていくと、怪しくなってくることが多いところを見るに、「渇しても……」というのは、見つかるまでの豪語に過ぎないようだ。

どんなに苦しい目にあっても、不正なことをしないというのが「渇不レ飲二盜泉之水一」である。「盜」という文字は、今の当用漢字では「盜」になっているが、本来は「汝」（よだれの古字）と「皿」の集まり、皿の御馳走を見て、涎を垂らす、それが「盜」の始まりだという説がある。「盜泉」というのは、泥棒の所有している泉ということではなく、単なる泉の名前である。山東省泗水県に今でもあるといわれている。「盜」という字を嫌って、その名の泉では飲まないという意味である。「盜」という言葉に対するノイローゼともいえよう。

伝説によると、「盜泉」で飲まなかったのは孔子であるという。

孔子過二於盜泉一、渇矣而不レ飲。（孔子盜泉を過ぐ、渇すれども飲まず）——尸子

晋の陸機の詩に

渇不レ飲盜泉之水　渇しても飲まず盜泉の水
熱不レ息悪木之蔭　熱してもいこわず悪木の蔭

桃李不言、下自成蹊（桃李いわざれど下おのずから蹊を成す）

「桃李不レ言、下自成レ蹊」（桃李・いわざれど・下おのずから蹊を成す）

桃や李は、なんにもいわないけれど、その下には自然と小さな道ができる。実が成るからである。

徳の高い人というものは、自己宣伝しないけれど、自然に皆が心服するという意味にたとえる。

『史記』の「李将軍伝」にある。

李将軍は、田舎者のような態度であり、いたって口下手であったが、死んだ日には、天下の、知ると知らざると、皆悲しんだ。「諺曰、桃李不レ言、下自成レ蹊」とは、李将軍のことであると司馬遷が褒めている。

東京に「成蹊学園」というのがあるが、「下自成レ蹊」から名付けたもの。

登龍門

「登龍門」（とうりゅうもん）。「龍」は普通リュウというが、漢学者はリョウと読む。だから漢文のほうでは「とうりょうもん」、しかし、現代の日本語では「とうりゅうもん」である。

かつては高等文官試験、つまり高文をパスすることでもあったし、陸海軍では陸軍大学・海軍大学がそれぞれの出世の門、登龍門といわれた。出世街道にさしかかる時の門、難関を突破するのを「登龍門」という、難関そのものは「龍門」である。「登龍の門」ではなく、「龍門に登る」である。

「龍門」というのは黄河の上流にある峡谷で、滝のように流れが急な所である。この物すごい急流を「鯉」が押し切って登ることができれば、化して龍となるという伝説があった、「鯉の滝登り」である。はいるに難しい狭き門、ここを首尾よく通りぬければ立身出世、栄達は約束される、これが「登龍門」。『後漢書』の「李膺伝」にこの話が出ている。李膺という名高い政治家がいた。この人に面会することができたら、しめたもの、もはや龍門を登ったようなものだといわれた。

その後、唐時代「進士」（高文）の試験に及第することを「登龍門」と呼んだ。「龍門」の下には、海や川から集まった自信ある大魚が何千となく集まって登ろうとするが、大多数は失敗、頭に打撲傷を受けてふらふらになって帰ってくる。で、「登龍門」の反対を「点額」という。「点二傷額一」、額を点傷するの略である。李白の「韓荊洲に与える書」に「一登二龍門一則声価十倍（ひとたび龍門に登れば声価〔名声〕十倍す）とある。

假虎威狐（虎の威をかる狐）

「仮二虎威一狐」（虎の威をかる狐）。弱いものが、強いものの威力をかさに着て、他人にいばりちらして嚇かすときに使う言葉。

強い親分の威光でいばりちらす三下奴。上役の権威をかさに着て同僚や下のほうに、にらみをきかせる男。

敗戦後、このほか、こうした狐が横行した。

虎が狐をつかまえた。そのとき、狐のいいけるは「虎さん、あなたは私を食べてはいけません。天の神様は私を、けだものの親分にした。だから、あなたが私を食べることは、天の神の命令に逆らうことになり、たいへんな罰が当たります。うそだと思うなら、私は虎さんの先を歩いていきますから、あなたは私の後ろから、ついてきて、よく見てごらんなさい。けだものたちは、きっと私の威光を恐れてみんな逃げてしまうでしょうよ」。虎は、これを信じていっしょに歩いてみると、

けだものたちは皆逃げ去った。

虎は、けだものたちは実は自分を恐れて逃げたとは、気がつかないで、皆が狐を恐れたものであると思った。

このたとえ話は、楚の王が、北方の国で楚の将軍を恐れているという評判を聞いて、それが実は楚の国力を恐れていることに気がつかなかった、という話を説明するために生まれた故事である。イソップ物語にも、これと同じ話がある。偶然の一致か、それとも東西とも同一起原であるか、それは、まだ研究されていない。とにかく、虎（西洋ではライオン）の威をかる狐は、古今東西、いつの世、どこの土地にも多いことは確かである。

『戦国策』という書物の中の「楚策」という篇に出ている、「狐仮二虎威一」（狐虎の威を仮る）という物語である。

虎之巻（虎の巻）

虎はアジア大陸の特産、島国の日本には動物園かサーカス以外にはいない。「虎の声問われて儒者困るなり」で、漢文には虎がしょっちゅう出てくる。

日本語の「とら」は古代朝鮮語の訛ったものであるという。「苛政は虎よりも猛なり」（苛政猛二於虎一）は『礼記』にある文句（四三頁参照）。

「虎の尾をふむ」というのは弁慶、安宅の関に出てくる文句であるが、これは大昔の中国の文献である『易経』にも『書経』にも出ていて、きわめて危険なことをする意味。

学生の参考書のうち、勉強せずとも、これさえ見れば早解りというものがあって、これを「虎の巻」という。「アンチョコ」、あるいは体良く「自習書」といっているあのたぐいである。これは太公望の著したという兵法書の『六韜』のうち一番重要な奥の手の書いてある「虎韜」から来ている。

「虎子」と書いて「とらのこ」と読めば極めて大切にしている品物であり、これを「おまる」と読めば便器である。漢朝の天子が玉で虎の子の形の便器を作り、行幸のおり、侍従に、それを持参させたという話から「虎子」を「おまる」と読むのである。

「虎穴に入らずんば虎子を得ず」、これは危険を冒さないと成功しない——という時に使う言葉である。

東漢の班超は西域の鄯善という国に派遣されたが、同時に匈奴という強い国の使節の一行が来たので、鄯善王は漢の使節を粗末にした。そこで、班超は「不レ入二虎穴一、不レ得二虎子一」といって、部下をひきいて匈奴の使節一行を襲って全部やっつけてしまった。鄯善王は驚いて漢の属国になった。——後漢書・班超伝　『漢書』の著者班固は班超の兄である。

南柯夢（南柯の夢）

「南柯夢」（なんか・の・ゆめ）。

「邯鄲夢」によく似た話が「南柯夢」である。

共に、儒学の官吏学であるのに反対した道教的な物語である。

「南柯夢」は『異聞集』（異聞録ともいう）にある話。

淳于棼という人は広陵という所に住んでいた。家の南に古い槐の木があった。ある日酔って、その木の根元に眠っていた。夢に、ふたりの使者が来て「槐安国王のお召しである」という。使者に従って穴の中にはいると、「大槐安国」という標柱がある。

国王の依頼によって、乱れていた「南柯郡」の長官となり、治めること二十年の後、送り帰されるところで夢が覚めた。

変わった夢もあるものだと、槐の下を探すと、大きな洞穴、ベッドを入れるほどの穴である、おびただしい蟻がいる。ひときわ大きい蟻は王様にちがいない、一つの国家社会をなしている。また別の穴が続いているが、それは南の柯（枝のこと）に上っている。それが夢に見た「南柯郡」であったようだ。

『南柯記』を読むと、蟻の社会の有様の描写は今の昆虫学に合っているという。

嚢中自有銭（嚢中おのずから銭あり）

「嚢中自有レ銭」（のうちゅう・おのずから・せんあり）。

「一杯やりに行こうか」

「行こう、だが、大丈夫かい」

「心配するな、嚢中おのずから銭ありだ」

この文句は『唐詩選』の「袁氏の別業に題す」という五言絶句から来ている。

題二袁氏別業一　　唐・賀知章

主人不二相識一　　主人あいしらず
偶坐爲二林泉一　　偶坐、林泉のためなり
莫二謾愁一沽レ酒　　謾に酒沽うを愁うるなかれ
嚢中自有レ銭　　嚢中おのずから銭あり

「別業」は別荘のこと。「謾」は、みだりに、とも読むが、「慢」と同じで、こっちを見下げて、ロハで御ちそうするといった意味。景色の好いところだと思って散歩しているうちに、知らず知らずに、誰かの別荘へはいりこんでしまった。

紹介もされない主人に、やあ、と話しかけるのも、林泉のためなりである。

酒を買って、おごってやろうなどとの心配は御無用。私の財布には銭があるから、欲しければ勝手に買って飲む——という、ただ、それだけの詩である。

江戸時代に出版された『唐詩選』のあるものには、この詩を取り除いたのがある。「銭」などといって、文句も下品であり、詩人らしい感覚もないというつもりだろう。

えらそうな文句ばかり並べるのが詩人でもなかろう。他人の庭へ、のこのことはいりこんで、腹の中を正直にいう天真爛漫なところが詩でもある。

「酒の御心配は要りません、マネーは持ってますよ」と、いわれてみると、なおさら御馳走したくなる人もある。御馳走催促の謀略とみても面白いではないか。

悲壮なところが唐詩の面かもしれないが、こうした漫画みたいなのも捨てたものではなかろう。

嚢中之錐（嚢中の錐）

「嚢中之錐」（のうちゅう・の・きり）。賢才、衆に擢んでて賢い人のこと。

袋の中に入れた錐は、先が出て直ぐ知れる。鋭鋒がすぐにあらわれる如く、賢者は衆人にまじっていても直ちに見出される――という場合に、この「嚢中之錐」が使われる。

本物の賢才、奇才も、これを見出す人がいないと困る、多勢の中では、どうしても、自己推薦や自己宣伝をしないと、認めてもらえないということも確かである。

戦国時代、趙の皇族で大臣をしていた平原君は門下生と称する食客数千人というのが自慢であった。秦という強国に都を攻められた。そこで、平原君はみずから使者となって南の楚の国に応援軍を頼みに行くことになった。門下生の中から文武兼備の者二十人を選んで連れていこうとした。十九名は決まったが、どうしても一名足りない。すると、毛遂という男が自己推薦して、自分を二十名の中に加えてほしいという。平原君はいった「役に立つ人物というものは錐が袋の中にあるようなもので、その先がすぐあらわれるものである。あなたは門下に三年もいるが何ら評判にもならない」と。

毛遂は「私を袋の中に入れてくれないからです。袋の中に入れさえすれば、先が出るどころか、全部つきぬけてとび出してしまうでしょう」といった。そこで毛遂はピンチ・ランナーとして一行に加わった。豪語したように毛遂は、楚へ行って、外交談判に大功を立てたので、平原君は毛遂を上客とした。

平原君曰、夫賢士之處レ世、譬若二錐之處一二嚢中一、其末立見。（平原君曰く、夫れ賢士の世に処るや、譬えば錐の嚢中に処るがごとし、其の末、立ちどころに見る）――史記・平原君伝

敗軍之將（敗軍の将）

「敗軍之将」（はいぐん・の・しょう）。

「敗軍の将は兵を語らずだ。感想なぞ聞いて欲しくない、ノー・コメントだよ」とは、負けたチームのキャプテンや、失敗した社長そのほか、「長」とつく人のいうところ。

「兵を語らず」と普通に使われているが、漢文では「不レ語レ勇」（勇を語らず）となっている。

これでみると、「兵を語って」、自分の失敗を打ち明けて、将来のために役立てようというのは、結構なことのようだ。さんざん、軍国思想を煽っておきながら、「あの時、我が輩は開戦反対だっ

た」などと、さも平和論者であったかの如く思わせようとする連中は、一種の「敗軍の将、勇を語る」ものである。

范蠡曰、臣聞、亡國之臣不レ敢語レ政、敗軍之將不レ敢語レ勇。（はんれいいわく、臣聞く、亡国の臣は、あえて政を語らず、敗軍の将は、あえて勇を語らず）——呉越春秋

「不敢語」（あえて語らず）とは、語るをあえてす、語るほどあつかましくないという意味。

廣武君辭謝曰、臣聞、敗軍之將、不レ可レ以言レ勇、亡國之大夫、不レ可レ以圖レ存、今臣敗亡之虜、何足レ以權二大事一乎。（広武君、辞謝して曰く、臣聞く、敗軍の将は、もって勇をいうべからず、亡国の大夫は、もって存を図るべからず、今、臣は敗亡の虜、何ぞ、もって大事を権るにたらんや）——史記・淮陰侯伝

漢の高祖の将軍韓信が趙の国を破った時、命令を発して、趙王の一族である広武君を殺すなといった。千金の懸賞で生捕りにした。というのは、広武君は名高い兵法家であったからだ。韓信は広武君を尊び先生扱いにして、今後の軍略を尋ねた。その時の返事である。「不レ可レ以言レ勇」（もって勇をいうべからず）とは、「勇をいってはいけない」というのではなく「言えない」という意味。捕虜のくせに兵を語るほど図々しくないということである。

背水之陣（背水の陣）

「今度こそは、いよいよ背水の陣だ」絶対に後ろに引かない決心で、成敗をかけ、いちか、ばちかの成敗をかけての一大覚悟で、なにかを始めることである。

兵法では、山を背にして、川を前にするのが定石である。敵が川を渡って攻めてくるのを、迎えうつのがもっとも勝ちやすい。

しかるに、この反対に、水を背にして陣をとれば敵は前にあって、水が後ろにある。退却しようとしても、水に溺れるから退却することができない。だから、それほど強くない兵隊でも、進んで戦い、決死の覚悟で敵を破ろうとする。

兵法を無視した逆手だが、時には成功することもある。ただし、全滅の公算も多いわけである。

漢の高祖の将軍韓信（若い頃郷里の無頼の少年の股をくぐる侮辱を忍んだ股くぐりの話で名高い）が、兵法の常識に反して背水の陣を構えて大勝利を博した。

漢よりずっと前の春秋時代に宋の襄公は楚と戦った時、敵が陣を布かぬうちに攻撃しようという意見を却けた「そんな卑怯なことはできない」と。そのうちに、敵が川を渡って攻めてきた。撃つのは今だという意見を却けて「そんな卑怯なことはできない。戦いというものは堂々と同一条件のもとに勝負を決すべきものだ。君子は人を阨に困めず」と、大きく構えているうちに、めちゃめちゃ

（1）困難に直面すること。

やに破られてしまったという。

これでは川を前に陣どっても意味がない。これを「宋襄之仁」（そうじょうのじん）という。『尉繚子』という書物にも次のようなことがある。「水を背にして陣するを絶地（絶体絶命の境地）となし、坂に向かって陣するを廃軍（敗軍）となす」。

盃中蛇影（盃中の蛇影）

「盃中蛇影」（はいちゅう・の・だえい）。

疑心暗鬼を生ず（六三頁参照）――というのに似ている。意味もないことで神経衰弱になり、その結果肉体的にも病気になることである。

晋の楽広という人は河南の長官だったが、客を招いて酒を飲んだ。その客は久しく見えないので、心配して訪れて見ると、客は病気であった。

ところで、その病気の原因が、おかしい。

彼が前に楽広の官舎で酒を飲もうとすると、盃の中に蛇の影が見える、どうも蛇は苦手である、いやなものが見えるが、せっかく招かれたのであるから我慢して無理に、その酒を飲んだ。が、どうも気持が悪い、それから家に帰って病気になったのだという。

変なこともあるものだと楽広は官舎へ帰って宴会の部屋を調査した。角でできた弓が壁に掛けてある。そして、その弓は漆で一見蛇のように見える作りであった。

そこで、楽広は、再び宴会を催し、客を前と同じ所に坐らせた。

「盃の中に、また蛇が見えますか」

「わあっ、見える、前の時と、そっくりです」

楽広が弓の影が映ってると話すと、なあんだ、というわけで、客の気も静まり、病気もけろっと癒った。

『晋書』「楽広伝」に出てくる話。略して「盃中蛇」ともいう。

量入爲出（入るを量って、出ずるをなす）

「量レ入為レ出」（入るを量って、出ずるを為す）。

「お前みたいな借金政策や月賦政策は困るなあ、金が入りもしないうちから使うほうのことばかり考えて」

収入を計算して、それから支出を考える。これは勤め人など個人の経済では当然のことである。『礼記』の「王制篇」には、個人経済ではなく、国家の歳計、すなわち財政の場合に、この考え方をしている。

以三三十年之通一、制二國用一、量レ入以爲レ出（三十年の通をもって、国用を制し、入るを量って以て出ずるをなす）

三十年の計画であり、個人的の倹約政策である。現代の財政では、その反対で、まず予算を決める、つまり使うことを考えて、それから要るだけを税金として国民に割当てる。

支出の金額を計算してから取り立てる道を作るという、現代の財政的考え方は、唐時代にもあった。徳宗皇帝の宰相、楊炎が財政困難を救うために行なった「両税法」というのが、それである。

先計二州縣每歲所レ應費用、及上供之數一、而賦二於人一、量レ出制レ入。（先ず州県の毎歳、応ずるところの費用、及び上供の数を計り、而して人に賦し、出ずるを量り入るを制す）——資治通鑑・唐徳宗紀

「上供」というのは、中央に納める金額。

近代の財政もさることながら、少しはサラリーマン式経済的にやっていただきたい。

予算があまったなどとむだ遣いをするような仕掛けは止めてほしい。血の出る思いの税金のことを「血税」というが、これは近頃の物を知らない新聞記者の書くこと。「血税」とは、金で納めないで、血で納めるという「兵役」のこと、すなわち、徴兵の義務を意味する明治言葉である。

馬鹿・逐鹿

かつて吉田茂首相の馬鹿野郎の放言から、とうとう国会解散となり、選挙の逐鹿戦が行なわれた

ことがある。馬鹿は坊さんの間に行なわれた隠語から起こって一般に通用、いや通用しすぎている言葉である。梵語(1)の「慕何」(痴)あるいは「摩訶羅」から起こったものだと言語学的に考証されている。

秦の宰相趙高の故事からできたとするのは俗説取るに足りない馬鹿な説である。漢文なら馬鹿はバロクであって、バカとは読まない、鹿を「カ」というのは「シカ」と同じく大和言葉だ。

ついでだから名高い故事である「鹿をさして馬となす」のほうも説明しておく。秦の宰相趙高は二世皇帝の暗愚なのをよいことにして権を専らにした。彼は廷臣を試そうと、皇帝の前で鹿を指して「馬です」といった。文武百官ことごとく「そのとおりです、それは馬でございまする」と声を揃えていったという。

馬鹿野郎の時には莫迦野郎と書くほうが全部漢音でよろしい。

「馬鹿者」というのは『大平記』のなかで武士のたんかにある。河内山宗俊(2)よりは、はるかに古い。

昔、東京の市電の運転手が兵隊に「馬鹿野郎」といって問題となった。それは軍部の横暴時代の、ちょいと前の話。

「逐鹿」は選挙のことだが、もとは中原(黄河流域地方)に鹿(帝位)を逐うという、天下を取るスポーツにたとえたもの、鹿(ろく)は天の祿で天子の位であると古典学者は説明している。

(1) サンスクリット語ともいう。古代インドの文語。(2) 江戸時代末期の僧で、恐喝や、だましを行なった悪者として芝居などによく登場する。

昔の中国の内乱は一種の総選挙であった。『唐詩選』にも収められている魏徴の有名な詩「述懐」は「中原還逐鹿」(中原また鹿を逐う)で始まる。『淮南子』という古い書物に「逐鹿者不レ顧レ兎」(鹿を逐う者は兎を顧みず)とある。選挙候補者が、少々の違反くらい平気だという意味かもしれない。

馬脚

「馬脚」(ばきゃく)。

「あいつ、始めは、おとなしそうにしていたが、とうとう馬脚をあらわして、不良の地金を見せてきた」。

「露二馬脚一」(馬脚を露す)。この時の「露」は「つゆ」ではなく、暴露(ばくろ)、露見(ろけん)の「ろ」である。

「馬脚」は芝居の「馬のあし」。西洋の舞台では本当の馬を使うが、中国や日本の舞台では、人間が中にはいっている馬である。

真相を露出すること、化の皮が剝がれて、中身の本体を現わすことを「露二馬脚一」というが、芝居で馬の役を相勤めていたのが、勤め切れずに人間の脚をあらわすこと。理屈からいうと人脚をあらわすというべきでもあろうか。

日本では狐や狸が「尻尾を出す」といい、西洋では「小羊の皮を着た狼が脚を見せる」という。

「馬脚」は元曲の「陳州糶米劇」にある「露二出馬脚一來」（馬脚を露出し来たる）から。

破鏡

「破鏡」（はきょう）。

夫婦別れ、離婚のこと。「破鏡の嘆き」という。

鏡といっても、ガラスのそれではなく、字の如く金偏の鏡であって、白銅か青銅の鏡。

『神異経』という本にある物語。

昔、夫婦が別れることになった。といっても離婚ではなく、戦乱か何かのつごうで、別居することになったのである。その時、鏡を二つに割り、記念のため、半分ずつをわけて持った。後に、妻のほうは夫を忘れ、愛人ができた。すると、彼女の持っていた半分の鏡は鵲となって飛んで夫の前にやってきたという。それで、後世、鏡の裏に鵲の画を描くようになったという話。

『神異経』の原文を示すと

昔有二夫婦一、相別、破レ鏡各執二其半一、後其妻與レ人通、鏡化レ鵲飛至二夫前一、後人錡レ鏡、背爲二鵲形一、自レ此始也。（昔夫婦あり、相別る。鏡を破り、各その半を執る。後に其の妻は人と通ず。鏡は鵲と化し飛んで夫の前に至る。後人、鏡を錡るに背に鵲の形を為すは、これより始まるなり）

もう一つの話は、六朝時代の物語。南朝の陳の最後の皇帝の妹は楽昌公主、それを陳の太子の家来の徐徳言が妻にしたが、なにしろ乱世のこととて、そんな金のかかる豪華な女房を養うことができなかった。

そこで彼は妻に語った。「あなたのような才智と容貌があれば、国が亡びても、誰かが面倒を見るでしょう」と相談ずくで離縁することになった。

喧嘩別れではないのだから未練は残る。また、どこかで会うこともあるだろうと、鏡を二つに割り、半分ずつ持ち、他日、正月の十五日に、都の市場に売りに出してみようといった。やがて、陳が亡んでしまった。斜陽族の楽昌公主は越公揚素の二号になった。徐徳言は正月十五日に都の市場へ出かけた。下男みたいな男が、半鏡を売っている。自分の半鏡を出して並べてみると、ぴたりと合う。そこで徐徳言は詩を作った。

鏡與レ人俱去　鏡は人と、ともに去り
鏡歸人不レ歸　鏡は帰れど、人は帰らず
無二復姮娥影一　また姮娥の影なく
空留明月耀　むなしく留む明月の耀き

「姮娥」、月の異名であるが、また月世界に住む美人の名。正月十五日は、勿論旧暦のことにて満月である。

彼の女は、この詩を見たが、泣いてばかりで、食物も喉へ通らない。主人の揚素が、この話を聞

き、徐徳言を召して、妻を返したという。これは『太平広記』にある物語。

白眼

「白眼」（はくがん）。「皆から白眼視されては居にくくなる」「世間を白眼視する」などという。「白眼」とは相手を軽蔑してにらみつけることである。

竹林の七賢(1)の第一人者たる阮籍は、人なみに喜怒の情を現わさなかった。ただ眼を青くしたり白くしたりして眼の色で感情を現わす男であった。青眼は気に入ったときに、白眼は気にいらないときにする目つきである。

世間なみの礼儀正しい人間に会うと、阮籍はいつでも白い目をむけた。「白眼」である。嵇喜という人が訪ねてきたが、阮籍は白い目をむけた。そこで、嵇喜は俗物扱いにされたと知って怒って帰った。嵇喜の弟の嵇康（これも竹林の七賢のうちに数えられる）がこの話を聞いて阮籍に会いに行った。酒をみやげに、そして琴を抱いていった。酒と琴は阮籍の好物、阮籍は大喜びで青眼を見せた。――晋書・阮籍伝

こうして相手次第で阮籍は目を青くしたり、あるいは白くしたりする。何もいわないで、じろっと白い目をむけられるのは気味が悪いので、白眼をむけられた常識的な人々は、ひどく阮籍をきらい、まるで仇のように思ったという。

「白眼」を字引風に説明すると「冷淡の情をもってにらむ目つき」とでもいおうか。ただ「にらむ」というのではない。

(1) 三世紀の魏・晋時代の七人の老荘思想家。彼らは竹林にこもって自由奔放な生活をおくり、形式的な道徳などをきらい、酒・音楽・議論を好んだ。阮籍・嵇康・山濤・向秀・劉伶・阮咸・王戎の七人である。

白波

「白波」（はくは）。

盗賊の異名。日本では「はくは」というよりも、和訳して「しらなみ」と用いる。

『古今集』に、山賊のことを詠んだ歌がある。

風吹けば沖津白波立田山夜にや君が独り越ゆらん

芝居で名高い日本駄右衛門を賊徒の張本として、弁天小僧そのほか三人、集まって「白浪五人男」というが、「白浪」ではなく、本来ならば「白波」と書くべきであろう。

後漢の霊帝の時代（西暦一八四年）、盗賊張角の残党が「白波谷」という谷間みたいな所に立てこもった。これを「白波賊」と呼んだことから、ただ「白波」で賊のことを意味するようになった。大陸の賊は軍隊組織で数十万人の大集団。島国のこそ泥、たった五人の顕微鏡的小ギャングに「白波」を冠せるのは、それこそ「おこがましい……」である。張角は妖術を使い、お符や水で病人の

治療もやった大泥棒、一党はユニフォームとして黄色い頭巾を冠ったので「黄巾賊」ともいう。後漢が衰えて三国になる発端が、この賊徒の動きである。

霊帝中平元年、張角反、皇甫嵩討レ之、角餘賊在二西河白波谷一、時俗號二白波賊一（霊帝の中平元年、張角反す、皇甫嵩これを討つ、角の余賊、西河の白波谷に在り、時俗、白波賊と号す）――後漢書・霊帝紀

「白波」より、ずっと前の時代、前漢の末に、王莽の政府に不平の連中が亡命して荊州の緑林に立てこもった。これを「緑林」といって、「白波緑林」と並べて呼ぶ。「緑林」はイギリスのシャウッドの森に亡命して緑のユニフォームを着たロビン・フッドの話に似ている。林と森、それに緑というところで連想される。

近代でも、満州の馬賊あがりの将軍張作霖、およびその一党の軍人を「緑林派」と呼んでいた。

白髪三千丈

「白髪三千丈」（はくはつ・さんぜんじょう）。

「どうもあいつは法螺吹きだよ、話がいつでも白髪三千丈式だからなあ」と、大げさな形容をするのにたとえる。

唐の李白の詩で名高い文句である。三千丈すなわち三万尺である。富士山の高さが一万二千三百六十五尺、その倍の白髪である。

秋浦歌

白髪三千丈　縁レ愁似箇長　白髪三千丈、愁いによって、かくのごとく長し、
不レ知明鏡裡　何處得二秋霜一　知らず、明鏡のうち、いずれの処よりか、秋霜を得たる

秋浦は安徽省にある地名、李白が流されていた。秋霜は、白髪にたとえている。

李白の詩には「三」あるいは「千」という数字を好んで使う。意味よりも、発音で、多いような感じを出しているものであろう。

廬山の瀑布を形容して「飛流直下三千尺」というし、淵の深いのを「桃花潭水深千尺」という。酒を飲んでも「千金散尽」「一飲三百杯」「斗酒十千」（すなわち万）「千金裘」（毛皮）という。

白眉

「白眉」（はくび）。

「あの仲間では、彼が白眉だ」と、グループの中で、一番秀でた者のことを、白眉という。群を抜いて、すぐれた者のことを白眉というが、もとは多くの兄弟のうちで最も優秀なもののことである。

「馬良白眉」といって、馬良という人のこと。馬良は蜀の劉備の部下で未開国の酋長どもをうまく手なずける手腕があった。

馬良の字は季常。兄弟五人、皆秀才の誉れがあったが、その中でも馬良が最優秀だった。彼の眉の中に白い毛があったというから、白眉といっても、眉の毛全体が真白だったのではないようだ。こうしたことが郷里では評判になって、諺までできた、「馬氏五常、白眉最良」と。兄弟五人とも「季常」のように、皆「常」というのがついたから「馬氏の五常」という。

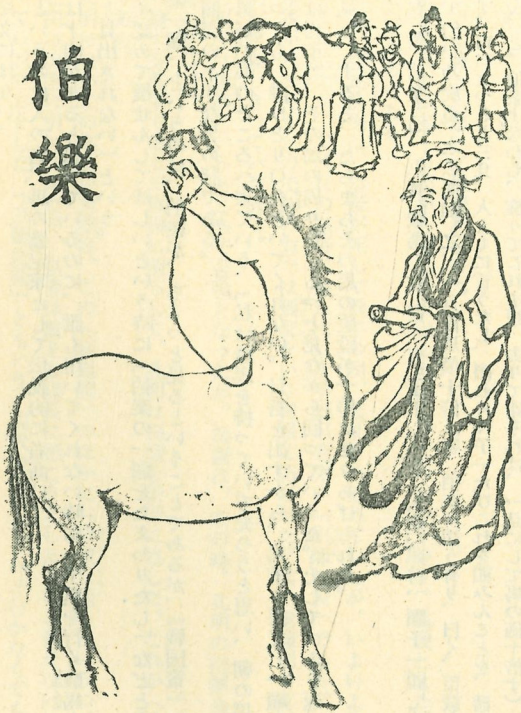
兄弟五人、竝有二才名一、郷里爲二之諺一曰、馬氏五常、白眉最良、良眉中有二白毛一、故以稱レ之。（兄弟五人、ならびに才名あり。郷里これが諺をなして曰く「馬氏の五常、白眉最も良し」と。良の眉中に白毛あり、故にもって之を称す）――三国志・蜀志・馬良伝

『蒙求』という、昔の児童の教科書みたいな本に、この話が採用されているので、「白眉」という言葉が、昔の人によく使われたのであって、たいして面白い話でもない。

伯　樂

「伯楽」（はくらく）。

「はくらく」とも「はくろう」とも読むし、また「博労」とも書く。



牛馬を売ったり買ったりする商人を「ばくろう」といい、「馬喰」と書くが、これは日本語でのこと、漢文にはない。

伯楽というのは人の名、馬の鑑定家として伝説的に名高い。

自分は才能があると思っているのに、誰も用いてくれない時に「千里を行く駿馬も、伯楽に出会わないと見出されない」という。

手腕を認めて推せんしてほしいという時に「伯楽の一顧をたまわりたし」などと書く。

「伯楽一顧」というのは、伯楽が、ちょっと見るということであるが、『戦国策』にある「伯楽一顧」は商売の上手な男の話である。

ある男が伯楽のところへ来ていう、「私は駿馬を持っていて売ろうと思い、朝の馬市へ行ったが三日たっても、誰ひとり口をきいてくれない。日当を出すから、馬市へ来て、一顧を願う」と。

伯楽は馬市で、その馬の周りをぐるっと見ながら回っていった。そして、ふり返ってもう一度その馬を見た。すると、たちまちその馬の値段が十倍にせりあげられた。

客有レ謂二伯楽一曰、臣有二駿馬一、欲レ賣、立二于市一三旦、人莫二與言一、願子一顧レ之、請献二一朝之費一、伯楽乃旋視レ之去而顧レ之、一旦而馬價十倍（客、伯楽に謂う有り、曰く、臣駿馬を有し売らんと欲す。市に立つこと三旦、人ともに言うなし、願わくは子一たびこれを顧みんことを、請う、一朝の費を献ぜん、と。伯楽すなわち、旋りてこれを視、去りて顧みれば、一旦にして馬の価十倍す）

馬謖（ばしょく）

「泣而斬二馬謖一」（泣いて馬謖を斬る）。

綱紀粛正のために部下の間から犠牲者を出した時に、この文句を使う。馬謖とは三国時代の蜀（漢）の将軍の名である。

漢の首相、諸葛孔明（しょかつこうめい）は、皇帝が死んで数年の間、鳴りをひそめていたが、いよいよ北の魏（ぎ）を攻めようとするに当たり、二代目の皇帝に差し出した手紙が名高い「出師（すいし）の表」である。

漢の軍隊が攻めてきたので魏の方では張部（ちょうこう）という将軍に防がせた。漢の前線司令官が馬謖である。孔明が信頼しきっていた部下。

馬謖と張部は街亭（がいてい）というところで合戦となったが、馬謖は、この時、孔明の指揮命令を守らず、敗戦に及んだ。

自分の愛する部下であるが軍律に照らして、孔明は馬謖を斬罪に処した。これが「泣いて馬謖を斬る」である。

諸葛孔明についての名高い言葉は、この「斬馬謖」のほかに「草廬（そうろ）三顧（さんこ）」というのがある。

初め孔明は田舎（いなか）に引っこんだが、皇帝は彼を参謀長に招こうとした。呼び寄せないで、三度も訪ねていって口説きおとした。「三顧之礼」ともいう。現代では、わざわざ行かなくても、電話で間に合わせる、そのくせ「三顧之礼をつくされたので就任を承諾しました」などという。「三顧」で

はなくて「三呼」のまちがいではないか。

皇帝が三顧の礼で孔明を招いて「情好、日に密なり」なので、関羽と張飛の両将軍はうれしくない、両人は皇帝と義兄弟の間柄。皇帝は弁解して「自分に取って孔明は、魚の水あるごとしだ、我慢してくれ」と。「水魚之交」が、これである。

跋扈

「跋扈」（ばっこ）。

わがままに振る舞い、はびこること。

「暴力団の跋扈には警察も手を焼いている」

「こう雑草を跋扈させては芝生も台なしだ」

「跋扈」とは、上を犯し、法律も禁令も無視して、勝手気ままなことをするという意味である。

「扈」（こ）というのは竹の垣で、「すだて」のことである。水が退いた時に竹垣を作っておく、潮が差してくると魚が、その中にはいる。再び潮が退いても、魚だけは、竹垣の中に残る仕掛である。ところで、小魚なら、「扈」の中に止まっているが、大きな魚になると、「扈」は、跳ねこえる、これが「跋」（ばつ）。「跋扈」は「すだて」を跳ね越えることである。

「跋扈」だけでは、そんなに悪い意味はない。常識で律せられない大物ということにもなるが、この言葉の歴史が悪い。

後漢の梁冀は大将軍となりワンマン的の横暴を極めた。質帝は、八歳で即位したが、梁冀のことを「跋扈将軍」と綽名をつけた。暴れ者将軍という意味である。

これを聞いた梁冀は怒って、毒饅頭で少年皇帝を毒殺した。

冀立二質帝一、少聰慧、知二冀驕横一、嘗朝二群臣一、目レ冀曰、此跋扈将軍也、冀聞深惡レ之、遂鴆殺。（冀、質帝を立つ、少くして聡慧、冀の驕横を知り、かつて群臣を朝し、冀を目して曰く、これ跋扈将軍なりと、冀聞いて深くこれを悪み、ついに鴆殺す――鴆という鳥の羽には猛毒があり、その羽をひたした酒を飲ませて毒殺することを鴆殺という――）――後漢書・梁冀伝

また隋の煬帝が舟に乗っていた時、大風に会って困り、「此風可レ謂二跋扈将軍一」（この風は跋扈将軍というべし）といった。それで、暴風のことを「跋扈将軍」ともいう。

「跋扈」とは横暴で、皇帝を困らせるという意味に使われている。

破天荒

「破天荒」（はてんこう）。

「何か、破天荒な仕事をして、皆を、あっといわせたい」

前人のまだ行なわなかったことを率先して行なうこと。レコード破り。

「天荒」というのは、天地が開けたばかりで、植物が生えてないこと。唐時代の荊州という土地は開けないところで、ろくな人物が出たことがない。土地の予備試験を通って、さらに高文試験を受けるが、及第するものがない。それで世間では荊州のことを「天荒」と呼んだ。

ところで、ある年、劉蛻という男が荊州の予備試験を通り、中央の試験に及第したので、世間はびっくり、「天荒」の名もついに破れてしまったといった。彼は「天荒」を破ったのである。これが「破天荒」の由来である。

唐荊州、毎解挙人、多不レ成レ名、號曰二天荒一、至二劉蛻舎人一以二荊州解一及第、爲二破天荒一（唐の荊州、毎解の挙人、多く名を成さず、号して天荒と曰う、劉蛻舎人に至り、荊州の解を以て及第す、破天荒と為す）――事類全書

「解」というのは各地方で行なわれる予備試験。

伴食宰相

伴食宰相（ばんしょく・さいしょう）。これという専門的の知識もなく、たいした働きもないのを何かのつごうで大臣にしてやらなければならないときに、あまり重要でない省の大臣にする。「なァに伴食大臣ですよ」と自分で謙遜したり「ありゃあ伴食大臣じゃないか」と軽んじられたりする。

唐の玄宗皇帝の時代、まだ楊貴妃などというのが現われる前のこととて、開元の治といわれたころの話。盧懐慎という世にも稀な人格者が大臣になった。「清謹倹素、妻子饑寒を免れず、居るところ風雨を蔽わず」という立派な人物。この人が宰相となったとき同役の宰相が名高い政治家の姚崇であった。

あるとき姚崇が十日ほど休暇をとった。すると政府の未決裁箱には書類が山のようにつもった。盧懐慎では決裁できないのである。人格と手腕は別物。

姚崇が休暇を終わって帰ってくると、みるみるうちに書類を決裁して、既決箱に移してしまった。

姚崇はその後任者宗憬と合わせ称せられる唐の賢相。このふたりが登庁するときは、皇帝は立って迎え、退庁のときは戸口まで出て見送ったという。これに比べると、盧懐慎大臣は個人としては立派であっても、大臣としては立派とはいえない。自分でも才の及ばないことを知って、ことごとに姚崇を推した。これは感心である。二流、三流の人物は自らを二流、三流と知ることができれば結構である。彼は「弁当を相伴する大臣」といわれた。原文では、「伴食宰相」。千二百何十年前の話、現代の話ではない。

半面識

「半面識」（はんめんしき）。

「半面の識（しき）」ともいう。

ちょっとした知り合いのことを「一面識」という。

「一面識はあるがね……」と肯定的にも、「一面識もない」と否定的にも使う。半面は一面の二分の一であるから、ちらっと顔を見たことがある程度の知り合いである。

人によって、顔をよく覚えてるのと、また、そうでないのとがある。「半面識」というのは、誰かの顔をよく覚えるという、人相による記憶力の強いことを意味する場合もある。

後漢應奉嘗詣二袁賀一、賀時出閉レ門、造車匠、於レ内開二扉戸一、出二半面一視レ奉、奉即去、後數年路見二車匠一、識而呼レ之（後漢の応奉、かつて袁賀を詣〔たづ〕ぬ。賀、時に出でて門を閉ず、造車匠、内に於て扉戸を開き、半面を出して奉を視る。奉すなわち去る。後、数年にして、路に車匠を見る、識りてこれを呼ぶ）——書言故事

尾生之信（尾生（びせい）の信）

「尾生之信」（びせい・の・信）。

昔、尾生という男があった。女と橋の下で会う約束をした。中国の昔にもデートというものがあった証拠である。

『詩経』には「桑中之喜」（そうちゅう・の喜び）といって、桑畑で会うなら、待ちぼうけでも危

なくないが、尾生は、この場合、橋の下であった。いくら待っても女は来ない。女にすっぽかされたのであるが、馬鹿正直な尾生は、いつまでも待った。

なにしろ、橋の下である、そこは河原であったわけ。とうとう女は、やってこなかったが、その代りにやってきたものがある。

たんぼのはずれなら、おばこ来もせで、用もない煙草売りが来るのであるが、尾生のデートは場所が悪かった。河原だから、そのうちに水がやってきたのであった。彼はそれでも待った。水かさが次第に増してくる、尾生は待つことをやめない、橋の柱を抱いて待った。それでも女は来ない。水は増す、尾生は柱を抱いたまま溺れ死んでしまった。

東洋では笑い話であるが、西洋なら純情な尾生は褒め者であろう。ギリシア神話の中に尾生みたいなのがいたら、ヴィーナスが憐れんでくれたろう。

『荘子』の「盗跖」篇には、「尾生の溺死せしは信の患なり」と、あっさり片づけている。この「尾生之信」は『史記』の「蘇秦伝」にも出てくる。雄弁家の蘇秦が、馬鹿正直な者は損をする——ことに、たとえている。

尾生、與二女子一期二於梁下一、女子不レ來、水至不レ去、抱レ柱而死。（尾生、女子と梁下に期す、女子来らず、水至れども去らず、柱を抱いて而して死す。）

效顰（顰にならう）

「ひそみにならう」と読む。顰は、顔をひそめる。つまり、眉に皺を寄せて、顔をしかめることである。嚬とも書く。善悪を考えることなく、むやみに他を真似ることを「ひそみにならう」という。また、よい事の真似であっても、謙遜して「……の、ひそみにならいまして……」などという。

ことの起こりは、絶世の美人、西施である。「傾国の美人」というのも西施から始まった言葉である。

西施は戦国時代の美人、後年の唐の楊貴妃と並んで中国史上の二大美人、西洋史のクレオパトラといったところ。越王の勾践が呉王の夫差に献じた美人が、この西施、そのため呉王は、すっかり骨抜きになって、ついに国を傾けるに至った。「傾国の美人」というのはそれである。呉王は、ついに勾践に亡ぼされてしまった。

さて、この西施が、ある時「病心」といって一説では「胸の病」で、他の説では「心配ごと」で、郷里に帰って静養していた。病気だか心配だか、あるいはその両方だったか知らないが、とにかく胸を抱いて（西施捧心という）顔をしかめた。なんしろ絶世の美人のこと、それがいっそう、なんともいえず美しく見えた。田舎の醜い女どもは、それを見て、顔をしかめるのが美容法だと考えて、人三化七（1）みたいな連中が、どれも、これも、胸に両手を当てて、ため息をつき、眉根に皺を

（1）人間とは思えないほど、ひどく醜い女性。

寄せた——という（——荘子・天運篇）。気の毒ではあるが、滑稽千万な漫画的光景を演出した。

髀肉之嘆（髀肉の嘆）

常時身不レ離レ鞍　髀肉皆消

——三国志・蜀志・先主伝

「髀肉之嘆」（ひにく・の・たん）。スポーツマンなどがレース（あるいはマッチ）に出るチャンスがなく——などと横文字を片仮名になおしていうくせに、そのあとに「髀肉の嘆」にたえないという。

漢字制限で「ひ肉」と書いて「皮肉」と取りちがえることがある。

「髀」とは腿の内側、内股のことである。軍人が長いこと戦争に行かないで、むだに月日をすごして功名を立てる機会がないのを残念がることである。

三国時代の劉備が諸葛孔明を参謀長に招いて大いに戦う以前の話である。大望を抱いていたが、思うようにゆかず、なすこともなく、ぶらぶらと日を送っていたころのこと。

劉備が便所から出てきた。彼は涙を流して泣いている。いったいどうしたのだ、トイレットで尻を蜂にでも刺されたのかと、その泣いている訳を尋ねた。そのときの劉備が「髀肉の嘆」である。「戦争で忙しかったときは、いつでも馬に乗っているので、股が鞍にぴったりひっついていてその形になり、股の肉がなくなっていた。ところで、近頃は馬に乗らないものだから、内股に肉ができてしまった。老は、まさに至らんとして、功業建たず、それが悲しいのだ」といった。

なにも便所に行かなくても、股の肉があるかないかは判りそうなものである、とは洋服のズボンをはいてるわれわれのこと。

昔の中国の男の服装は、ロングスカートを何枚も何枚も重ねてはいているようなもの。トイレットへでも行かなければ、内股を手でさわることはないだろう。

劉備曰、常時身不レ離レ鞍。髀肉皆消、今不二復騎一、髀裏肉レ生、日月如レ流、老将レ至功業不レ建、是以悲耳。（劉備曰く、常時身鞍を離れず、髀肉皆消ゆ。今また騎せず、髀裏肉を生ぜり。日月流るるが如し、老まさに至らんとして功業建たず、ここを以て悲しむのみ、と）

百聞不如一見（百聞は一見にしかず）

「百聞は一見にしかず」。

多くの人の言葉を聞くよりも、自分が一見するほうが確実であるという場合に、この「百聞一見」を使う。自分が一見しているのを誇って、皆の意見をはねつける時にも、この「百聞一見」を使う。

「百聞は一見にしかず」というのを、経験派の人が読書派の人を抑えるために使うのは元の意味と違っている。

出典は『漢書』の「趙充国伝」である。参謀長の趙充国が作戦計画をたてるに当たっての話。前戦から櫛の歯を引くように報告が来る。正確な地図がない昔のことであるから、ずっと後方の大本営にあっては、はっきりした様子が判らない。

その時に、趙充国が皇帝にいった「百聞は一見にしかず、――です、いくさのことは、後方にひっこんでいては判断に困ります。わたくしは、これから金城まで馬を走らせて、前戦の模様をスケッチして、方略をたてまつろうと存じますが」といった。

だから、「百聞一見にしかず」は、論より証拠の意味に使ってるが、元はといえば、参謀将校の現地踏査、参謀偵察のことである。

百聞不レ如二一見一、兵難二險度一、臣願馳至二金城一、圖上二方略一、（百聞は一見にしかず、兵は險かに度ること難し、臣願はくは馳りて金城に至り、図して方略を上らん）――漢書・趙充国伝

豹變

「豹変」というのは『易経』にある文句。「君子豹変」とある。これは豹のまだらの模様の明らかに人に見えるように、善に立ち返って、旧悪を改め去ることの著しい時に、いうのである。

今では、政治家などの場合に「豹変」といえば、悪い意味に使われているようだ。今まで、行なったこと、言ったことを忘れたかの如く、けろりとして変節する、その図々しさに呆れて「豹変」

という。しかし、それは本当の使い方ではない。

豹も捕われたり、毛皮になったりした時には毛並みは美しく目立つが、ジャングルの中では、それがカムフラージュである。

「一斑の美、もって全豹を察すべし」（一斑之美可三以察二全豹一）というが、自動車の氾濫を見て、日本全体の豊かさをいうのはまちがいである。

「管中窺豹」これを略して「管窺」という。管の穴から豹を見ると、ただその皮の一つの斑が見えるだけである。見識の狭い意味に用いる。「管見」ともいう。「察全豹」の反対である。（管中窺レ豹、時見二一斑一――管中に豹を窺へば、時に一斑を見るのみ――）

「虎は死んでも皮残す、人は死んでも名を残す」は、あれは浪花節の文句。漢文では、「豹死留レ皮」（豹は死して、皮を留む）である。これは梁の王彦章という将軍のいった言葉である。唐が亡んで宋が興るまでの間を「五代」といって、五十年の間に十二国が朝興暮倒、道義が地に堕ちた時代である。王彦章は、その時に当たって例外的の忠節の士である。彼が戦死する前にいったのが、「豹死留レ皮、人死留レ名」である。

宋の欧陽修は、その『五代史』の中で、王彦章の伝記を詳しく書いている。

彼は、はだしで棘の上を百歩も歩き、鉄槍を持って馬を走らせるのが飛ぶようであった。中国の加藤清正であろう。

風聲鶴唳

「風声鶴唳」（ふうせい・かくれい）。風の音と鶴の鳴声のこと。「風声鶴唳に驚く」（驚二風声鶴唳一）といって、びくびくして、おじ気づいていると、ちょっとした、なんでもない物音にも驚く心理をいったもの。悪いことをして、ひっぱられそうな人間が「ケンジさんですよ」とか「ケイジさんが来ました」と、いわれて「ケンジ」「ケイジ」という人の名前を「検事」「刑事」と聞いてびっくりするのを「風声鶴唳」という。

紀元三八三年、淝水の戦というのがある。前秦（といっても、始皇帝で名高い秦よりも六百年も後のこと）という北方民族の大軍が南の晋を攻めてきた。晋の宰相謝安は兄の子の謝玄を大将にして守らせた。謝玄は最良の防禦策として攻撃を始め、淝水という川を挟んで敵の大軍に対した。謝玄は敵王符堅に申込んだ、川を渡って勝負を決しようと。符堅は、晋軍をこっちの岸に渡らせるため、自分の兵を少し引下げようとした。少し下げようとしたが、これが全軍に波及、謝玄の第五列[1]が敵陣のうしろで「戦争は負けだ」と叫んだ、北軍ことごとく統制を失ってしまった。そこへ本物の謝玄の軍が襲撃してきた。さしもの大軍も、めちゃめちゃになり、我がちに逃げた。「走るもの、風声鶴唳を聞いて、皆、晋兵至るとなす」（走者聞二風声鶴唳一、皆以為二晉兵至一）。富士川の合戦で平家の大軍が水鳥の羽音を聞き、源氏の襲来と思って逃げたのより、ざっと八百年前のこと。

（1）敵中にあって味方を有利に導く者、あるいは組織。

覆水不返盆（覆水、盆に返らず）

朔の謝玄を将軍に任命させた宰相謝安であるが、その時、評判が良くなかった。国家存亡の際に、自分の親類を引立てるというのは、どうかしていると。前秦の大軍が押寄せて、「朝野震動」という大変な心配、謝安だけは平気で、別荘を賭けて、碁を囲んでいた、その最中大勝利を報せる手紙が来た。読んで側に置いたまま知らん顔。客が心配して問うと「坊やがとうとう敵を破ったよ」（小児輩遂破レ賊）と、けろりとしていた。客が帰ってから下駄の歯が折れるほど飛びあがって喜んだ。——晋書・謝玄伝

「覆水不レ返レ盆」（覆水、盆に返らず）というのは、夫婦別れの結果、結婚を完全に解消してしまって、もう元のさやに納めることのできないことである。また、時機のふたたび得がたいことにもたとえられる。

太公望呂尚のことは、前の「太公望」のところ（一五四頁参照）で述べたが、彼は釣れもしないのに糸を垂れて怠けていた、その結果は家計不如意、女房に真珠のネックレスも、ハイヒールもストッキングも買ってやらない。女房の物欲を満足させられない貧乏なくせに偉そうな顔をしてインテリぶるものだから、先の見込みはないと、女房のほうから三くだり半を突き付けて離縁してしまった。

太公望はそれから文王の先生兼参謀と出世した。すると別れた女房が押しかけてきて元のさやに納めてくれと哀訴嘆願に及んだ。太公望は若くて美しい女房をたくさん持っているであろうから

（これは記録にはないこと）、意地悪の古女房との再縁はまっぴら。

太公望は古女房に盆に水を入れたのをこぼさせた。そして「こぼれた水が盆に返せたら復帰させてやる」といった。もち論、これは不可能なこと、覆水は盆に返らずであった。

「盆」というのはいわゆる「お盆」ではなく水鉢のこと、盆をくつがえす雨（盆雨）という時の盆も、水鉢のこと。

太公取二水一盆一、傾二于地一、令二婦收一レ水、惟得二其泥一。（太公水一盆を取りて地に傾け、婦をして水を収めしめしに、ただ其の泥を得るのみ）——拾遺記

不肖

「不肖」（ふしょう）。

「不肖、私が会長に就任致しまして」とか、「あの人は偉かったが、その子は不肖で……」とかいう。この二つの例を見るに、第一は、「ふつつかで、賢明でもない私が……」という意味であり、第二は「親に似ぬ子」という意味。二つの使い方があるわけ。

「肖」は似る意味で、不肖とは本来は、天地の神様が作ったものらしくない、また聖賢に似ない、と「賢」の反対「愚」の意味に使われる。

『中庸』に、「賢者過レ之、不肖者不レ及也」（賢者は之に過ぎ、不肖者は及ばず）と、この時の「不肖」は「賢」の反対である。

『史記』の「五帝紀」には、「堯子丹朱不肖」（堯の子、丹朱不肖）とあって、賢人の堯の子でありながら、丹朱は馬鹿者であるというふうに使っている。さらに転じて、子が親に対して自分を卑下していう時に使われる、「愚児」というのと同じ。

釜中魚（釜中の魚）

「釜中魚」（ふちゅう・の・魚）。

読んで字の如く、釜の中の魚である。この場合の魚は、死んで煮られるというのではない。釜の中の水が、まだ熱くならないので、その中で、何も知らずに泳いでいる魚という意味である。

フランス料理に、トルイト・アン・ブルーといって、生きたままを鍋にいれて煮ると、トルイト（鱒の類）の味がよい。その料理法によると、魚の皮の色が青いので「青色の鱒」（トルイト・アン・ブルー）というが、これが漢文の「釜中魚」でもあろうか。

この言葉は張翼という賊徒の親分のいったこと。

賊といっても、我が国で釜で煮られた石川五右衛門のような小さな泥棒ではない。

後漢の順帝の頃の賊で手下が一万人以上もあったという。広陵という所を本拠として揚州、徐州あたりを乱してまわることが十余年というから大名格の賊。

その広陵へ、張綱という硬骨のために、中央政府でけむたがられた偉人が、太守となってやってきた。

張綱は家来も連れず、車を山塞に乗りつけ、物の道理を説いて張嬰を感激させ、一万余人の賊徒を降参せしめた。太守は山塞の中で賊たちと宴会を開き、ギャングを解放して自由に去らせた。

その時に、賊徒の張本たる張嬰のいった言葉が「釜中魚」である。「おれたちは、こうしてギャングをつくって、いのちを永らえていても、それは、まるで魚が釜の中で遊んでるようなものだ、永く続くもんじゃないよ」と。

廣陵賊張嬰曰、相聚偸レ生、若三魚遊二釜中一、知二其不一レ可レ久。（広陵の賊張嬰曰く、相聚りて生を偸む、魚の釜中に遊ぶがごとし、其の久しかるべからざるを知る、と）——資治通鑑・順帝紀

物色

「物色」（ぶっしょく）。

「どうだ、もう意中の人は、きまったか」

「いや、まだだ、目下物色中というところだ」

この会話で、「物色」というのは「探している」ということだが、「物色」は、ただ探すのではない。自分で気に入った人物を描いて、それに合ったのを探すことである。

「物色」とは、人相書を出して人を探し求めることである。犯人に似たモンタージュ写真を発表するのも一種の「物色」である。

劉秀が内乱を静めて、漢室を復興した、これが東漢（後漢）の光武皇帝である。

皇帝の位についてから、ふと思い出したのが、学生時代の親友、厳光という男であった。召し出して重く用いようと、「物色」した、すなわち人相書を全国に回して探した。

有名になると、急に旧友が集まってくるのは人情の常だが、そんな場合、かえって顔を出さないというのも一種の人情である。厳光も、その一種であった。

「物色」の結果、とうとう斉（山東省）の片田舎にいることが判った。羊の毛皮（これは毛皮の衣としては一番安物、肉を食った残りみたいな毛皮）を、すっぽりかぶって沼の中で魚を釣っていた。

朝になって、目付役が奏上した、「客星が御座を犯すこと、甚だ急なり」と。

皇帝、「大げさに気色ばむなよ。旧友の厳子陵（光の通称が子陵、つまり、厳ちゃん——という意味）といっしょに寝ただけだよ」

皇帝は厳光を「諫議大夫」という最高顧問官に任命したが、御免こうむって、帰ってしまった。

そして、耕したり釣ったりして、富春山中にひっこんで、世を終わったという。

同じ「独釣」でも「寒江」のそれとは大違い（五一頁参照）。こっちは、いたってのんきな世捨人、名利なぞ問題にしない仙人的の釣りである。「寒江」のほうは、左遷官吏の不平の腹癒せである。（唐の柳宗元の「江雪」という詩に「孤舟蓑笠の翁、独り釣る寒江の雪」とある）

また太公望の「独釣」は、野心満々大いになすところあらんと待機中のそれである。（一五四頁参照）

帝令下以二物色一訪レ之。（帝、物色を以て之を訪わしむ）――後漢書・厳光伝

刎頸之交（刎頸の交わり）

「刎頸之交」（ふんけい・の・交わり）。

首を切られても心を変えないほどの親しい交わり、生死を共にするほどの親友。「彼は僕にとって、刎頸の友だ」などという。

戦国時代の廉頗、藺相如の話から出た言葉。

文官と武官、また同じ武官のうちでも、参謀や主計と攻城野戦組とは、とかく仲の悪いものである。日本の歴史で例えれば、織田信長の家来でも、柴田勝家と羽柴秀吉は仲が悪いし、また秀吉の家来でも、加藤清正、福島正則は、小西行長、石田三成と仲が悪い。

趙の恵文王は立派な宝玉を持っていた。秦の昭王が、それを欲しがって十五城と交換を申し出

た。いわゆる「連城璧」（れん城の璧）といって十五の城を連ねる値打ちのある宝玉。その外交談判を買って出たのが藺相如、無事に璧を完うして帰ったことは、「完璧」（五七頁参照）の項で説明した。

この功労によって、藺相如の位は、野戦組の将軍、廉頗よりも上になった。

不平なのは廉将軍、「攻城野戦の功のある自分が町人上がりの口舌だけの男の下に居るとは残念だ。藺相如に会ったら辱しめてやろう」といった。

それを聞いた藺相如は、廉将軍と列席する必要のある時は、仮病で欠席した、また途中で会うと車の方向を変えてかくれた。

藺相如の家来たちは口惜しがって恥じたので彼はいった、「強国の秦をも恐れないで国威を輝かした自分が、なんで廉将軍だけを恐れるものか。秦が強大な兵力を持っていながら、趙に手出ししないのは、この国に我々両人があるからではないか。今、両虎共に闘えば、その勢は、ともに生きない。だから国家の急を大切だと思うから個人的の怨みなぞは後回しにしているんだ」と。

これを聞いた廉頗は、はだ脱ぎになり、いばらの鞭を背負って、藺相如の邸に行き、これで打ってくれと謝罪して、「刎頸之交」をなした。

今兩虎共鬪、其勢不二俱生一。吾所二以爲一レ此者、先二國家之急一、而後二私讎一也。頗聞レ之、肉袒負レ荊、詣レ門謝レ罪、遂爲二刎頸之交一。（今、両虎共に闘えば、その勢、ともに生きず、吾の、これを為すゆえんのものは、国家の急を先にして、而して、私讎を後にすればなりと。頗これを聞き、肉袒して、荊を負い、門にいたって罪を謝し、ついに刎頸の交を為せり）――史記・廉頗藺相如伝

汨羅之鬼（汨羅の鬼）

「汨羅之鬼」（べきら・の・鬼）。

周末戦国の時代、屈原という清廉潔白な学者が楚の懐王に大夫として重く用いられたが、讒言に会って、うとんぜられた。頃襄王の時に、さらに江南に左遷された。彼の詩を集めたものを『楚辞』という。『楚辞』の中の「漁父」の篇に、彼と漁師との会話がある。屈原が、「顔色憔悴、形容枯槁」（やつれきった顔色と枯木のようにやせほそった体）して、くよくよしていると、漁師が櫂で舟ばたを叩いて拍子をとりながら歌った。これを「滄浪」の歌という。

滄浪之水清兮　　滄浪の水、清ければ
可二以濯一吾纓一　　もって吾が纓（冠の紐）を洗うべし
滄浪之水濁兮　　滄浪の水濁れば
可二以濯一吾足一　　もって吾が足を洗うべし

「滄浪」は川の名、漢水のこと。

何事も成行きに任せよという意味である。しかし屈原は憤慨と煩悶のあげく、汨羅（べきら）といって、汨水と羅水の合流する淵に石を抱き、身を投げて死んだ。これが五月（午の月に当たるという）

五日で、「端午」とも「端五」ともいう。この「汨羅之鬼」たる屈原を弔うのが「端午」の節句の遠い起原であるといわれている。

蜀山人の狂歌に

死なずとも、よかるべきらに身を投げて　偏屈原と人はいうなり

暴虎馮河

「暴虎馮河」（ぼうこ・ひょうが）。

「彼は勇気があるらしいが、暴虎馮河の勇にすぎない、本当の勇気というものは、あんな暴力団的のものではなく、もっと落ちついた、沈勇でなくてはならない」などという。

「暴虎」といっても「乱暴な虎」の意味ではない。武器なしに、素手で虎に打ちかかること。「馮河」は、黄河を歩いて渡ろうとすること。この二つを合わせて「暴虎馮河」といい、無鉄砲のたとえである。

『論語』に出てくる孔子の言葉である。

孔子には顔淵という学徳のすぐれた、しかし身体の弱い級長型の弟子があった。孔子が、この優等生に、「我々の政治的主張が用いられるならそれを行ない、用いられなかったら、一時自己の主張を、しまいこんでおこう。こういうことをいっしょにできるのは、お前とだけであろうなあ」と語った。

その話を横で聞いていたのが、子路という生徒、これは直情径行形の学問よりもスポーツマン的純情な生徒であった。先生が顔級長に「お前とだけいっしょだ」といったものだから、このスポーツマンは不平であった。

それで「では、先生が大軍を指揮する場合は、誰といっしょになさるんですか」と、いった。もちろん「子路よ、その時こそは、お前といっしょだ」と先生がいうだろうと期待しての問いであった。

孔子は、血気の勇にはやる子路の癖を直そうとして、こういった。

「暴虎馮河みたいな、ええい面倒くさい、やってしまえ的の無茶苦茶なことをして、死んでも後悔しないような者といっしょに大軍を指揮するのはご免だ。仕事に当たって、慎重で油断しないといった者といっしょにやりたいね」

子謂二顔淵一曰、用レ之則行、舎レ之則藏。惟我與レ爾有レ是夫。子路曰、子行二三軍一則誰與。子曰、暴虎馮河、死而無レ悔者、吾不レ與也。必也臨レ事而懼、好レ謀而成者也。（子、顔淵にいって曰く、之を用うれば則ち行い、之を舎つれば則ちかくるは、ただ我、なんじとこれあるかなと。子路曰く、子、三軍をやらば則ち誰とともにせんと。子曰く、暴虎憑河、死して悔ゆるなき者には、吾くみせざるなり。必ずや、事に臨んでおそれ、謀を好んで成さん者なりと）——論語・述而篇

旁若無人

捫レ虱而言　旁若レ無レ人　（虱を捫っていふ、旁に人無きがごとし）——晋書・王猛伝

「傍若無人」（ぼうじゃくぶじん）。

「ぼうじゃくぶじんな男だ」「ぼうじゃくぶじんな態度には驚いた」と、お経のように使っている。いわゆる漢文式に「かたわら、人なきがごとし」と読んでは感じがでない。「ぼうじゃくむにん」とお寺読みにする人もある。「旁」は「傍」とにんべんをつけているが、古い書物には「旁」としてある。

「旁若無人」とは、人を人とも思わず、恥ずかしがることなく、なんでも平気でやってのける、あきれた心臓の持主を形容する言葉となっているが、漢文ではそうした悪い言葉ばかりではなく、むしろ良い意味に、他人に遠慮しないで感情を表わす、といったくらいの使い方である。

『史記』の「刺客伝」にある荊軻——秦の始皇を暗殺しそこなった豪傑——が「旁若無人」の第一番目である。感情の激しい男だけに、往来で悲憤慷慨して歌ったり泣いたり「旁若無人」であったという。

その次に名高い「旁若無人」は、晋の王猛である。王猛は華山というところに隠居していた。といっても世を捨てたわけではなく、「佐世」（世をたすくる）の念を抱いていた。象牙の塔にこもった政治経済学者というわけ。

そこへ桓温という大臣が回ってきた。王猛はぼろぼろの着物のまま桓温に面会、「当世の事」を談じた。半乞食のような汚い王猛は「虱を捫って」しゃべりまくったのは「旁若無人」であったとある。

高漸離（人名）撃レ筑、荊軻和而歌ニ於市中一相楽也、已而相泣、旁若レ無レ人。（高漸離筑〔琴に似た楽器〕を撃ち、荊軻和して市中に歌ひて相楽しむ。已にして相泣き、旁に人無きがごとし）

——史記・刺客伝

庖丁

「庖丁」（ほうちょう）。

刺身庖丁、菜切庖丁、出刃庖丁というが、もとは「庖丁」というのは、料理人のこと。この料理人が使う刃物が、庖丁刀（ほうちょう・がたな）であり、それを略して、「庖丁」といえば、切れ物を意味するようになった。

漢文では、これを「ほうてい」といって、昔の料理の名人、「庖」は料理人ということ、「丁」は名前。料理人の丁さんというのが「庖丁」である。

『荘子』の「養生主篇」にある話。

庖丁が梁の恵王に頼まれて丸牛を料理して見せた。

彼の手の動かし方、肩に力を入れたり、足をふんばったりする有様はみごとであった。牛刀が進むにつれ、肉と骨が、さくりさくりと離れ、肉がばさりと落ち、さらに牛刀を進めていくと、肉がざくりざくりと裂けていくのが、ことごとくリズムに乗っている。

その身ぶりは、「桑林の舞」といって、殷の湯王が雨乞いをした時の舞楽のようであり、その手ぶりは、「経首の会」といって堯の時代の音楽である「咸池」の曲の一楽章のようであった。

恵王は、すっかり驚き喜んで「技（わざ）も、ここまで来ると大したものだ」といった。

すると、庖丁は牛刀を置いて

「これは技ではありません。それより進んだ道（みち）でございます。私が始めて牛を料理した時には、目にうつるのは牛そのもので、どこから手を付けていいか見当がつきませんでした。それが三年目には、牛の体の各部分が見えるようになりました。今では、目を使わない音無しの構えで、精神力によって、骨と肉の隙間に刃を入れていき、決して骨や「肯綮」――骨と肉の入れくんだところに刃が当るようなことはありません。一級の料理人は毎年牛刀を更えるし、普通の料理人は毎月更えます、それは折れるからです。私の牛刀は十九年使っていて、料理した牛は数千匹、しかも刃は新品同様です」

この話を聞いた恵王はいった

善哉、吾聞二庖丁之言一、得レ養レ生焉（よいかな、われ庖丁の言を聞いて、生を養うを得たり）つまり、無理をしないのが人生をまっとうする方法であることを悟ったというのである。

この話を「庖丁解牛」という

庖丁爲二文恵君一解牛、手之所レ觸、肩之所レ倚、足之所レ履、膝之所レ踦、砉然嚮然、奏レ刀騞然、莫レ不レ中レ音、合二於桑林之舞一、乃中二經首之會一。（庖丁、文恵君のために、解牛す、手の触れるところ、肩の倚るところ、足の履むところ、膝の踦まるところ、砉然、嚮然、刀を奏めること騞然として音に中らざるなく、桑林の舞に合い、乃ち経首の会に中る）

「砉然」さくりさくり。「嚮然」ばさり。「騞然」ざくりざくり。

「中二肯綮一」（こうけい・に中る）は物事の急所に当ること。

亡羊之歎（亡羊の歎）

「望羊」と書くのと「亡羊」と書くのとがある。共に発音は「ぼうよう」であるが、「望洋」と書くのが本当。遠く見るさま、また当てのない、とりとめのない意味にも使われる。年老いた漁夫が海を眺めてぼんやりしていることは、「望洋之歎」である。しかし、これは「亡羊之歎」の洒落である。

「亡羊之歎」とは、逃げた羊を追うのに枝道が多くて、とうとう見失って歎いたという意味である。英語で亡羊はストレイ・シープ、聖書にもあって、中国も西洋も羊を飼うから、共に羊のたとえ話が多い。

「亡羊之歎」とは学問の道が多方面で、これを得ることの難しいことにたとえる。

「多岐亡羊」ともいうし、濫読して得るところの少ないのを「読書亡羊」という。

『列子』という書物に出てくる物語。――楊子という人の隣りの人の羊が逃げた。その羊を探すのに多勢をかり集めたがそれでも手が足りないので、楊子のところのボーイまで借りての大騒ぎ。楊子はいった。「なんだ、たった一匹の羊を探すのに大勢して」と。隣りの人はいう「岐路多き故なり」と。多勢で手分けして探したが羊は見つからないと引きあげてきた。楊子その故を問う。隣人のいわく「岐路の中また岐路あり、どうして探していいのかわからない、それで羊を失くしたのです」と。

そこで楊先生が、次のようにいって歎いた。「大道は多岐なるが故に羊を失い、学者は多方なるが故に生を喪う」。これが「亡羊之歎」である。

『荘子』に出てくる「亡羊」は別の話である。AとBがふたりとも羊を番していたが、逃がしてしまった。逃がした理由は、Aは本を読んで勉強していたからだという、Bはバクチをやって遊んでいたからだという。ABのやったことはまったく別だが、羊を逃がしたことは同じだ。

木鐸

「木鐸」（ぼくたく）。もくたく――と読むと漢学の先生に叱られる。「新聞は社会の木鐸である」と、新聞記者がいばったり、または新聞記者を煽てたりするときにいう。

世を導き、教えを垂れる者を「木鐸」という。良い新聞が報道、指導の役目をつとめるときは「木鐸」といえるが、あやしげな新聞のたぐいは「木鐸」とは呼びかねる。

「木鐸」とは「金口木舌」といって、鈴の舌、つまり中に、ぶらさがった物が木でできている鈴であり、鈴そのものは金属である。

周時代において、官吏が人民を集めて政令を布告する場合に、鳴らした鈴である。『礼記』「明堂位篇」に「振二木鐸於朝一、天子之政也（木鐸を朝に振うは天子の政なり）」とあるのがそれ。『論語』に次のような話が出ている。孔子が各国を放浪し、衛という国で政治を執って理想を実現しようとしたが失敗、その国を出ようとして、儀という国境の村にさしかかった。

そこの国境役人が、先生にお目にかかりたいと頼んで会った。その役人は、会った後に、孔子の弟子たちに次のようにいった。「お弟子さんたちよ。孔子様が位を失ったくらいのことはなんでもないことです。天下の道なきや久し、天まさに夫子（先生）をもって木鐸となさんとす」と。任官しないで、政教の指導者となるという意味である。

明治初期の新聞記者が社会の木鐸をもってみずから任じ、時の官僚に対抗、また反抗した時代に、新聞及び新聞記者をみずから呼び始めたもの、これは『論語』から採った言葉である。

鈴を鳴らして、いかがわしい新聞を売っている。なるほど、その鈴は全金属の鈴であって、決して金口木舌の「木鐸」ではないのである。

天下之無レ道也久矣、天将下以二夫子一爲中木鐸上（天下の道無きや久し、天まさに夫子を以て木鐸と為さんとす）――論語・八佾篇

高枕而臥（枕を高うして臥す）

「高レ枕而臥」（枕を高うして臥す）。

「せっかく儲けても、税務署に睨まれては、枕を高くして寝られないだろう」

安眠することである。略して「高枕」。

アメリカ側に付くのに限る、アメリカが睨みをきかしてるから、ソ連も中国も、手を出してこない。共産側から攻められる心配がなければ、我々は枕を高くして眠ることができる――なぞといえば、「高枕」の説明に、わざわざ余計な国際政治問題を持ってきたと思われるかも知れないが、この「高枕而臥」という言葉こそ、そうした国際政局を論ずるために使われたのである。

戦国時代というから二千何百年も前のことである。雄弁家として名高い蘇秦と並び称せられる張儀が魏の国王にいった言葉である。

魏の国は、四方から強敵に囲まれていた。その中でも韓と楚の両国が、しばしば国境を犯すので、魏の国王は、びくびくして安らかに眠ることもできなかった。

そこへ、張儀がやってきて、秦と共同防衛条約を作れとすすめた。共同防衛といえば、聞こえが良いが、その実は、秦の属国となるのである。が、やむを得ない。秦は楚韓両国の背後にある強国で、楚韓の苦手である。

こうした国際情勢において、魏が秦の属国という形になれば、楚韓は手を出さないことは明らかである。楚韓の心配がなければ枕を高うして眠る、つまり安眠でき、国防の心配はなくなる、というのが張儀の弁論の大要である。

国の名前を変えさえすれば、今も通用する議論である。型通りの三段論法で推していくのが張儀のやり方である。

張儀説二魏王一曰、爲二大王一計、莫レ如レ事レ秦、事レ秦則楚韓必不二敢動一、無二楚韓之患一、則大王高レ枕而臥、國必無レ憂。（張儀　魏王に説いて曰く、大王の為に計るに、秦に事うるにしくはなし、秦に事うれば則ち楚韓必ずあえて動かず、楚韓の患なければ則ち大王は枕を高うして臥し、国必ず憂なからん、と）

——史記・張儀列伝

先從隗始（先ず隗より始めよ）

「先ず隗より始めよ」とは、誰かが人を求めている時に、自己推せんするのによく使われる。

戦国時代の話。燕は国政乱れ、斉に攻められ、国王は戦死、弱小国になってしまった。太子が即位して昭王という。

昭王は、なんとかして自国の燕を富強にして、父の仇を報じようとしたが、いい知恵が出てこない、立派な政治家を探してそれに頼んで国政を大いに改革しようと思った。

そこで昭王は、このことを、先生の郭隗（くわく・くわい、この発音が難しければ、かっかい、でよろしい）に相談して、誰か適当な人を知らないかと尋ねた。

その時に、かっかい先生がいった言葉が、「先ず隗より始めよ」である。

これは、かっかいが試みた昔話の一部分である。「昔あるところに殿様がいて、千金をもって、家来に千里の馬(1)を求めさしたが、三年たっても得ることができなかった。ところで、ある家来が行って三月で帰ってきた。千里の馬は、もう死んでいましたから、その骨を半値の五百金で買ってきました。殿様は、もちろん怒った。その時、家来すこしも騒がず。——死んだ馬さえ五百金で買った、生きてる馬ならきっと買ってくれるに違いないと、誰しも考えるでしょう。千里の馬は、きっと向こうから売りに来ますよ——と涼しい顔をしていった。一年もたたないうちに、千里の馬が三頭も手にはいった」。

隗先生こう語ってから付け加えた「王よ、士を得んと欲せば、先ず隗より始めよ」と。

ここにおいて、遠くから政治家が争って燕におもむいた、そのなかのひとりが楽毅である。昭王は楽毅を首相として富国強兵となり斉を破った。老人が就職希望の時も「死馬の骨を買って頂きたい」などという。

王必欲レ致レ士、先從レ隗始、況賢二於隗一者、豈遠二千里一哉（王必ず士を致さんと欲せば、先ず隗より始めよ。況んや隗より賢なる者をや、あに千里を遠しとせんや。）——戦国策・燕策

（1）一日に千里を行くことのできる名馬。

煮豆燃萁（豆を煮るに、豆がらを燃やす）

「煮レ豆燃レ萁」（豆を煮るに、豆がらを燃やす）。離合集散のくり返しである政党争いにおいて、元の仲間同志が分裂、敵味方に分れての喧嘩、もとからの政敵よりも、もっと激しく醜い争いを続ける。こうした時に、政治家はしばしば、この「豆を煮るに……」の文句を引用して、なげいたり、または元のことを考えて、なんとかならないものかなあと気を揉んでいるようだ。

「萁」というのは、豆の実を取り去ったあとの茎と枝のこと、「豆がら」といっている。「萁」だけでもまめがらであるし、「豆萁」としても「まめがら」で意味は同じ。

この文句は政治家の専売ではなく、要するに兄弟喧嘩の例えである。

『三国志』の憎まれ役は曹操、その子の曹丕が皇帝となって魏の文帝、帝の弟の曹植を東阿王という。この兄弟は仲が悪かった。

文帝は弟を、やっつけたことだけで後世に名を残している。曹植のほうは源義経のような軍人ではなく詩人として名高かった。文帝が弟を捕えて、いよいよ処刑しようとしたがそれだけでは面白くないとあって、七歩だけ歩く間に詩を作ったら、ゆるしてやろうといった。そこで曹植が作ったのを「七歩詩」といい、彼を「七歩才」という。

煮レ豆燃二豆萁一　豆在二釜中一泣　本是同根生　相煮何太急（豆を煮るに豆萁を燃やす、豆釜中に在りて泣く、本はこれ同根よりして生ずるに、相煮ること何ぞはなはだ急なると）――世説新語・文学

水清無大魚（水清ければ大魚なし）

「水清ければ大魚なし」、神経質に潔癖であっては大きな仕事はできない、という時に、この文句が使われる。選挙違反や収賄や公金横領などの、もろもろの良からぬことをする時に弁解、弁護するのに、しばしば「水清ければ大魚なしじゃよ、わっはっはっは」と豪傑笑いで、ごまかす。名高い歴史的文句の悪用である。

東漢の班氏は一族みな文学の誉れが高い。その一人の班超は文学青年であったが「筆を投じて、万里の外に封侯たるの志」があった、つまりアドヴェンチュアラーである。「虎穴に入らずんば虎子を得ず」と冒険に冒険を重ねて、西域（すなわち中央アジア）諸国を征服して総督となり定遠侯に封ぜられた。西域にあること三十年「願わくは生きて玉門関（本国への入口）に入らん」と辞職、帰国するに当たって後任の任尚が教えを請うた。班超いわく「君は性、厳急である、水清ければ大魚なし、何事も大目に見て、うるさいことはいわないことだね」と。大冒険を決行するには、自分と生死を共にする子分がなくてはできないからである。そうした子分は不良上がりの乱暴者の集まりである。

任尚は、ひそかに人にいった「班君ともあろうものだから、何か変わった方法、奇策があるだろうと思ってわざわざ教えを請うたのであるが、水清ければ大魚なし――とは、平々凡々たることじゃないか」と。

任尚は、その後、総督として失敗、西域の平和を失った。班超のいったとおり、任尚の厳急な性質は、外地向きでなかった。

任尚代爲二都護一、請レ教、超曰、君性嚴急、水清無二大魚一、宜二蕩佚簡易一。（任尚代りて都護となり教を請ふ。超曰く、君性厳急なり。水清ければ大魚無し、宜しく蕩佚簡易〔ゴテゴテ言わず寛大にする〕なるべし）

――後漢書・班超伝

注『文選』や『孔子家語』といった古代の書物には「水至清則無レ魚」（水いたって清ければ、すなわち魚なし）とある。

未亡人

「未亡人」、みぼうじん――と発音されているが、漢学の先生は「びぼうじん」と読む、これを「美貌人」と聞きまちがって喜んだという話がある。

「みぼうじん」というのは他人の「やもめ」の敬称ということになっているが、いやな言葉だという声が近頃盛んになってきた。未亡人という漢文を和訳すると「未だ亡びざる人」である。

いまどき、はやらなくなったが、墓石に死んだ夫の戒名と並べて、「何々信女」と彫って赤い色をつけてある、いわゆる「赤い信女」と「未亡人」とは一脈相通ずるものがあって気持よくない。

未だ亡びざる人とは、要するに、死に損い、という意味である。これが、敬称であるはずがない。西洋では、夫が死んでも、夫人は、そのまま夫人、英語で Mrs. と書いてミシズと呼ぶのに変わりはない。マダム、フラウも同様である。

「愚妻・豚児」と我が妻、我が子を謙遜していう場合に似ていて、「未亡人」は自称である。夫と共に、自分も死ぬべきところを、死におくれて、おめおめ生きている人間であると、夫を失った妻がみずからを称する言葉であるから、他人に向かって「未亡人」というのは失礼千万。

「未亡人」という言葉は『左伝』という書物に出ている、二千年以上も昔のもの。二度も三度も「未亡人」という言葉が出てくるが、どの場合も自称であって、決して、他称ではない。

まちがって使われても、それが習慣になれば正しい——かも知れないが、使いたくない言葉のようだ。

婦人既寡、自称二未亡人一。『左伝』の註には「婦人既に寡にして、自ら未亡人と称す」とある。

矛盾

「矛盾」（むじゅん）という言葉は古い言葉だが、今でも盛んに使われている。若い人達も盛んに使いたがるようだが、この言葉の意味を、はっきり知らないので、使いまちがいが多いようだ。英語でインコンシステンシー INCONSISTENCY という。インは「不」コンは「共」システンシーは「在」だから不共在である、一つの言葉の中に二つの反対したものがあること。ビスマルクがベルリン会議で「ドイツは正直なブローカーだ」といったが、ブローカーというものは不正直なものだから、正直なブローカーということは意味がなり立たないといわれた。太った細君、細根大根などというのもインコンシステンシーで、「むじゅん」である。

「むじゅん」は漢字で矛盾、「ほこ」と「たて」である。いうことが前後くい違ってつじつまが合わないのを「むじゅん」という。

『韓非子』という書物にある物語から出た故事。二千年も前の話だ。楚の国に、盾と矛とを売る者があった。まず盾を見せて、「さあさあ、お立ちあい。この盾は、世界一の堅い盾だよ、どんな鋭い矛で突いても穴はあかない」その次に矛を取り出し「これは世界一の鋭い矛だよ、これで突いたら、どんな堅い盾でも突き通す」と宣伝これつとめた。見物のひとりが尋ねた「お前の矛で、お前の盾を突いたら、いったい、どんなことになるのか」と。

これには返答に困った。

明鏡止水

鑑明則塵垢不レ止、止則不明也。
人莫レ鑑二於流水一、而鑑二於止水一。

「明鏡止水」（めいきょう・しすい）。

政治家が汚職などに関連してその筋の取調べを受ける、そして新聞記者に心境を語る。必ず、こ

の「明鏡止水」というのが出てくる。なんのことか、意味が明らかでない。どうせ、はっきりしたことは語れるものではない。それで「明鏡止水じゃよ、わっはっは」というように決まったらしい。

これを政治的に流行させたのは鳩山一郎ということになっている。昭和の初めの話。

明らかな鏡と、流れない静かな水とである。心の本体というものは虚明である。明らかな鏡や静かな水のようなものである——といったようなこと。なんのことか、訳が解らない、無理して解る必要もなかろう。そうしたところが、政治家に愛用される理由でもあろうか。

これは『荘子』という本に出てくる。「明鏡止水」と四字まとまってはいない。方々から寄せ集めて作った文句である。

『荘子』という本は、あまりわかりのいい本ではない。『荘子』「徳充府篇」に、「鑑明らかなれば塵垢止まらず、止まれば明らかならず」（鑑明則塵垢不レ止、止則不レ明也）とあるが論理的に変テコな文句だ。

それから同じ本の同じ篇に、仲尼すなわち孔子の言葉として引用してあるのが「人は流水に鑑みるなく、止水に鑑みる（人は流水に姿をうつしてみる者はいない、姿をうつそうとすれば、流れない止まった水にうつすものである）」（人莫レ鑑二於流水一、而鑑二於止水一）。この方は極めて常識的である。それから同書の「応帝王篇」に「至人の心を用うるは鏡のごとし」（至人之用レ心若レ鏡）とある。寄せ集めてモンタージュされたのが、「明鏡止水」——らしい。

政治家が「明鏡止水」をいうようになったら、明鏡止水でなくなった証拠のようである。

孟母

「孟母」（もうぼ）とは孟子の母ということである。孟子の母親は「慈母」と「賢母」との使いわけがされて、昔から修身の話に用いられた。

「孟母三遷」は「慈母三遷」ともいうし、「孟母断機」のほうは、「賢母断機之戒」ともいう。

孟子の母親についての話は、すべて伝説であって、確かな、拠りどころある話ではない。孟子の生いたちについて、孔子の孫の子思の門人に教えを受けたということのほか確かな筋の話はない。

孟子の父親というのが一つも、話に出てこない。PTAの会長にでもなりそうなおふくろのことだから、御亭主は月給袋を、そのまま持って帰るだけという世間並みの男だったろう。

孟子の母は「賢母」と銘は打ってあるが、「良妻」のレッテルは欠けている。

キャバレーやモーテルに近くて子供の教育に悪いという時に「孟母三遷」の言葉が出る。墓地の近くに住んでたら孟子が葬式の真似をした（葬儀屋にすればいい）、次に市場の近くに移ったら孟子が商人ごっこをした（結構ではないか、実業家になれるものを惜しいことだ）、そこで三度目には学校の前に転宅した。そしたら孟子は門前の小僧で教育者になったという。

孟子が少し大きくなってから勉強に倦きて、学校の寄宿舎から抜けて帰ってきた。ちょうど、そのおり、はた織りをしていた孟母は、織りかけの糸をずたずたに切ってしまって、「お前が学を廃するのは、これ、この通りだよっ」と。このヒステリー気味の賢母の剣幕に恐れをなして、孟子は

学校へ逃げ帰った。そして、後には大教育家になったという。」

これが「孟母断機のいましめ」である。（――列女伝）

沐猴而冠（沐猴にして冠す）

「沐猴而冠」（もくこうにして冠す）。「沐猴」とは猿である。言葉の意味は「猿が冠をかぶっている」ということ。粗暴な野人がガラにもなく礼服を着るといった場合に、この「沐猴……」を使う。詳しくは「楚人、沐猴而冠」という。

楚人冠というのは新聞記者の先輩杉村広太郎さんの雅号であるが、シルクハットを入れる帽子函の銘にもとづいているそうである。

秦を滅した楚の項羽、虞美人で名高い項羽から「沐猴而冠」の言葉は始まっている。楚は今の湖南省あたり。二千年も昔は揚子江の南は文化果つるところと思われていた。

項羽が秦の都、咸陽に攻め入って、秦を滅し、宮殿を焼き、宝貨婦女を収めて東の方へ向かった。この、あとは野となれ山となれ式の項羽のやり方に民衆はがっかりした。

韓生という人が項羽に説いた、「この関中は守り易く、産物も多い。ここに都して天下に号令すべきである」と。しかし項羽は韓生のいうことを用いなかった。秦の都の焼野原となったところだけを見て、つまらないところだと考えた。そして分捕物を多く持って景気よくなったつもりで、「富貴にして故郷に帰らないのは、錦を着て暗い夜道を行くようなものである」と。

韓生はいった、「楚人は沐猴にして冠すと、世間ではいっているが、なるほどそうだ」と。

項羽はこの悪口を聞いて大いに怒り、韓生を釜で煮殺してしまった（――史記・項羽紀）。項羽は木曾義仲の先輩である。

薬籠中物（薬籠中の物）

「自家薬籠中の物」――などといって、丸めこみ、手なずけて自分の味方としておく人物のことをいう。いわゆるヒモつきになっている人物のことを、そのヒモの端を握ってる側からいう場合に「彼は、もはや薬籠中の物だよ」という。薬籠とは、薬箱のこと。

もとの意味はそんな悪い事ではなく、もっと良い意味である。それを転用、悪用して「ヒモつかれ」の意味となった。

もともとは、忠告して過ちを改めさせること、ちょうど苦い薬が病気をなおすようなものだということである。または、常備薬のように、必要な人物のことでもある。

唐の女帝として名高い則天武后時代に、大岡裁判の古代版ともいうべき名裁判物語の主人公、狄仁傑という人があった。

名判官狄仁傑には立派な弟子がいた。シャーロック・ホームズにおけるワトスンのようなもの、その名を元行沖という。

この弟子が先生の狄仁傑に語った、「苦い薬は病気にきくものです。私を先生の薬物のはしくれ

に備えて頂きとうございます」と。

狄仁傑は笑いながら「君は、もはや、我が薬籠中の物だよ、なんぞ、一日として欠くことができようか」と、いった。——唐書・元行沖伝

こういう立派な話が、いつの間にか、ふざけて悪い意味に用いられ、ついには、悪い意味だけに用いられるようになった。

元行沖諫二狄仁傑一曰、凡爲レ家必有二儲蓄一、脯醢以適レ口、參苓以攻レ疾、行沖請レ備二藥物之末一、仁傑笑曰、吾藥籠中物、何可二一日無一也。（元行沖、狄仁傑を諫めて曰く、凡そ家を為むるには必ず儲蓄有り、脯醢〔ほし肉としおから〕以て口に適はしめ、參苓〔薬用の人参やきのこの類〕以て疾を攻む。行沖は薬物の末に備はらんことを請ふと。仁傑笑ひて曰く、吾が薬籠中の物、何ぞ一日も無かるべけんや、と。）

病入膏肓（病、膏肓に入る）

大病にかかってもう助かりそうもないという場合、よく「病、こうもうに入る」という。これから転じて物ごとに耽り溺れてなかなか改められないということにたとえる。「あいつの道楽は病こうもうにはいってる」などという。

膏肓をコウモウと読むのはまちがい、肓はコウであるから、膏肓はコウコウというのが正しい。

肓（めくら）ではない、亡の下は目ではなく月である。

晋の景公が病気になった。秦の名医緩を招いて診察させた。医者がまだ来ないうちに景公が夢を見た。それによると、病魔がふたりの子供（豎子）となって話をしている、「緩というやつは名医だからあれに会っては、やっつけられるに違いない、はやくどっかへ隠れなくちゃいけない、どこにしようか」「肓（横膈膜の上部）の上、膏（胸の下部）の下は医術のとどかない所だ、そこにいて薬や針の難を免れよう」と。夢がさめてから医者の緩先生がやってきて診察して「この病気は膏肓にはいっているから、ちょっと手のつけようがないわい」といった。

夢にみたこと、先生のいったところはまったく同じだったので、景公はすっかり感心、さすがは名医であると思った。病膏肓にはいっても、名医にまかせて、治療させたので景公は全快、厚くお礼をして先生を秦に帰した。

昔風の名文を見ると、「病気になる」ということを気取って「不幸、二豎の冒すところとなり」などとあるが、これも膏肓にはいったふたりの子供の姿をした景公の夢の物語から来ている。

晉侯疾病、求二醫于秦一、秦伯使二醫緩爲レ之、未レ至、侯夢、疾爲二二豎子一、曰彼良醫也、惧傷レ我、焉逃レ之、其一曰、居二肓之上一、膏之下一、若我何、醫至曰、疾不レ可レ爲也、在二肓之上膏之下一、攻レ之不可、達レ之不レ及、藥不レ至焉、不レ可レ爲也、侯曰、良醫也、厚爲二之禮一而歸レ之。（晋侯疾病なり。医を秦に求む。秦伯医緩をしてこれを為めしむ。未だ至らず。侯夢む。疾二豎子と為り、曰く、彼は良医なり。惧らくは我を傷つけん、いづくにかこれを逃れんと。其の一曰く、肓の上膏の下に居らば我

をいかんせんと。医至る。曰く、疾為むべからざるなり。肓の上膏の下に在り、これを攻むるは不可なり。これに達せんとするも及ばず、薬も至らず、為むべからざるなりと。侯曰、良医なりと、厚くこれが礼を為してこれを帰す）――左伝・成公十年

油断

油断とは注意を怠ることだ。いろはガルタでは「ゆだん大敵」という画を見ると、火がぼうぼう燃えてるところが描いてある、それで子供などは「ゆだん大敵、火がぼうぼう」などという。油が断えれば、かえって火事の心配がなくなるはずだが。なぜ、うっかりすることを「ゆだん」といい「油断」と書くか。ものの本を見ると『涅槃経』に出てくる話が引いてある。むかし、インドに乱暴な王様がいて、家来に油のなみなみとはいった鉢を持たせ、油を一滴でも、こぼしたら生命を断つぞと、そのうしろに刀を抜いた兵隊を立たせた――という。

この物語の中から「油」と「断」の二字を取って「油断」としたという。

とかく、ものの本などというものは、まことしやかに俗説を採用するものである。

国語学者にいわせると、「油断」の涅槃経説は取るにも足らない俗説だという。古代日本語の「ユタ」に助辞の「ン」が付いたもの。ユタは「ゆたか」とか「ゆったり」とかの語根。万葉の巻十二に「かくばかり恋いむものぞと知らませば、その夜は由多爾（ゆたに）あらましものを」、とある。「ゆたに」は「ゆったり、ゆっくり」の意味、居続けをするんだったということ。今でも土

佐では、「御ゆだんなさりませ」という。「油断しろ」というのではなく東京でいう「御ゆっくりなさいませ」と、帰ろうとする客を引き止める言葉だ。

羊頭狗肉

立派そうに見せかけて卑劣なことをするのを「羊頭狗肉」という。羊の頭を看板に出して、犬の肉を売ること。煙草といって、イタドリ(1)を売ること。羊頭を懸げて狗肉を売る——

日本では、羊などは、あまり食わないが、中国でも、アラビアでも、西洋でも上等のものとされている。英語のマットンは羊の肉だが、ビーフやポークより珍味とされている。

狗肉は肉のうちで最下等とされてるらしい。中国では昔から犬の肉を食べているらしく、『史記』の「刺客伝」に「狗屠」という賤しい職業が出てくる。犬殺しだが、ただ殺すのではなく、肉を食べるために殺すもの。

清朝の大臣李鴻章がヨーロッパに旅した時、ある国の外相が犬を贈った。「こないだの犬は、お気に入りましたか」「とても気に入りました。見かけも立派ですが、食べたときの味は、それに劣りませんでした」これは西洋の作り話であるが、中国では犬を食うことを知り、犬の肉は下等なものとされているのを知らないわけ。

漢の韓信の言葉として、名高いのに「狡兎死して走狗煮らる」というのがある。兎がいなくなると今まで狩に用いた犬も煮殺される。敵が亡びると、その功のあった大将も殺される、という意味で、やはり、犬を食べた証拠である。

「犬」は大きな犬、「狗」は小犬だという説もあるが、食べるときは「狗」という字を使ってる。若い犬は肉が柔らかで食べいいからでもあろうか。

「羊頭狗肉」の出典は『無門関』という書物であるが、原典には、「懸羊頭、売馬肉、(羊頭を懸げて、馬肉を売る)」とある。馬肉がいつのまにか犬の肉に化けたわけ。

(1) タデ科の多年草の植物。若い葉は煙草の代用にしたり、煙草に混入したりする。

餘桃

「余桃」

惚れて見ると、「痘痕も、えくぼ」ということがあるが、その逆を行って、嫌いなら、えくぼも痘痕にされるということもありそうだ。

わがままな大官や社長なぞで、気の変わり易いのにかかると、ある事をして褒められても、その次には、全く同じ事をして叱られたりする。すまじきものは宮仕えで変質者みたいな人間の取扱いが、うまくないとサラリーマンとして出世しない。お天気社長などというのがあって、同じ仕事に対して、朝褒めて、午後には怒るというのがあるそうだ。

こうした話を、漢文では「余桃」という。言葉の意味は、余った桃——である。

これは『韓非子』の「説難篇」に出ている話。

昔、弥子瑕という美少年がいて、衛の国の殿様のお気に入りだった。この美少年が殿様とアベックで果樹園に行って桃を食べた。甘かったので、「これはとても甘い」と、食べさしの半分を殿様に食べさした。

「自分が全部食べたいのを我慢して、おれに食べさせようとする。なんという感心なやつだろう」と、殿様はいった。

それから、弥子瑕の容色衰え、その結果として寵を失ったのであるが、その時、殿様は言った。

「あんな礼儀を知らないやつは追払ってしまえ。いつだったか、自分の食べさしの桃をおれに食わせたことがある」

洛陽之紙價（洛陽の紙価）

立派な文章を書くとか、ベストセラーを続けるような書物を著すとかするのを「洛陽の紙価を高める」という。晋の時代に左思という学者が「三都賦」という名文を作った。それを読んだ人たちは盛んに写した。写すためには紙を買わなければならない。印刷術が発明されたのは隋、唐のころ、晋の時代には、書物はすべて筆写であった。多勢が書き写すために紙を買ったから紙の相場があがった。だから洛陽の紙価が高くなったというのは、文字どおりの事で、単なる形容ではない。

——晋書・文苑伝

洛陽というのは晋の都で、洛という川の北にあった。「陽」は北の岸の意味（日本でも京都を洛陽に見立てて、上洛とか入洛とかいう）。

紙は後漢の蔡倫の発明ということになっている。晋の時代には、発明後それほどたっていないので、貴重品であったから、多勢が買えば相場が狂ったことであろう。

紙が発明される前は、竹簡、木札が用いられた。だから「五車の書」とか「汗牛充棟」とかは、書物の多いことの形容であるが、紙でなく、木や竹の束なら、それほどのことでもない。添削の削も小刀で削るからだ。「冊」（さつ）という文字は竹の札を革ひもでしばった象形。孔子が『易経』を何度も読んで「韋編三絶」というが、革のひもが切れたということである。字典、典籍の「典」は竹の札の書物を机の上に載せた象形、大切な書物である。秦の時代に、書物を焼いたり（焚書）、それを壁の中にかくしたりしたというが、竹や木の札の書物なればこそである。

左思はどもりの醜男であったが、その書くものは美しく、堂々たるものがあった。一年かかって「斉都賦」を作り、十年思いを凝らして「三都賦」を作った「十年構思」という。

梨園・杏林

「梨園」（りえん）。「梨園の革新」「梨園の名門」「梨園の伝統」「梨園の因習」……と新聞や雑誌の演劇風聞録などで、しばしば「梨園」という文字にお目にかかる。

劇界、劇壇といえばすむところを、わざわざ気取って「梨園」という。つまり、芝居、演劇あるいは俳優、役者のことである。

「梨園」とは梨の畑のこと。りんご畑をりんご園というのと同じである。チェホフの「桜の園」は「梨の園」で大当りであった——というと複雑である。

楊貴妃で後世に名高い唐の玄宗皇帝が、即位して間もないまだ名君として「開元の治」をいたしたころの話。

玄宗は隋から伝わる古典的音楽を愛したばかりでなく、自分でもその道の大家であったが、宮廷の梨園に俳優の子弟三百人を集めて学ばせた。ときには自ら教授となった。声や調子をはずしたものがあると、皇帝はそれがだれかということをおぼえていて、それをなおさせた。それで「皇帝梨園弟子」と呼んだ。俳優のことを「梨園の弟子」ともいう。

「梨園」に似た言葉に「杏林」（きょうりん）というのがある。これは医者のこと。昔、董奉という仙人めいた医者がいて、病をなおした謝礼として一文の金もとらず、その代りに、杏の苗を植えさせた。重症には五本、軽症には一本のきめであった。そして何年かたつと十万余株の杏の林となり「董仙の杏林」と呼ばれるようになった。

『神仙伝』と云う唐時代の物語に出ている。

初隋有二法曲一、其聲清而近レ雅、明皇愛レ之、選二坐部伎子弟三百人一、教二於梨園一。（初め隋に法曲有り、其の声清にして雅に近し。明皇〔玄宗皇帝〕これを愛し坐部伎〔堂下で楽を立奏したのを坐部伎、堂上で坐奏したのを坐部伎といった〕の子弟三百人を選び、梨園に教う）——唐書・礼志楽

柳営（りゅうえい）

「柳営」（りゅうえい）。

江戸時代は漢学が盛んであったから、日本のもろもろのことを、中国式にいう習慣があった。近頃では英語を使うようなものであろうか。

水戸中納言を「水戸黄門」といったり「幕府において」というところを「柳営において」と儀式ばっていったりする。また、「将軍家におかせられては……」というのを「大樹様におかせられては……」などという。

漢の文帝が北方の蛮族に備えて戦った時、将軍周亜夫は細柳という所に駐屯していた。劉礼は覇上に駐屯、徐厲は棘門に駐屯していた。文帝は前線を慰問するために、覇上と棘門へやってくると、「天子のお成り」とばかり、さっと門を開き、大将以下全員整列して送迎した。

次に文帝は細柳へ来た。先駆が来てみると、完全武装の番兵は弓を引き絞って、矢を向けている。「天子のお成りい」というが、週番司令の将校は門を開かない、「軍中には、将軍の令を聞く、天子の詔を聞かず」という。

皇帝は止むを得ず、証明書を持った使いをやって将軍に伝えて、門を開かした。

番兵がいう、「将軍の命令です、軍中で勝手に馬を走らせてはいけません」

皇帝は、手綱を控えて徐行し、本営に至って将軍に敬礼して帰っていった。

皇帝に付いていた群臣は皆驚いた。

文帝は感心して「ああ、これこそ真の将軍である、さきに見た覇上や棘門の軍隊は、児戯にすぎない、兵隊ごっこだ」と、いった。

「軍中には、将軍の令を聞く、天子の詔を聞かず」というのが徳川幕府の旗本の考えで、「真の将軍」の幕府（キャンプ・ガバーメント）を「柳営」といった。これは「細柳の軍営」を略したもの。兵隊が皇帝を不審尋問した話はナポレオンの物語にもある。

また、この「軍中には将軍の令を聞く……」という言葉を悪用、濫用して、中央の命令を聞かないで、独断専行した出先軍部が国を誤まったそうである。

上自労レ軍、至二覇上及棘門軍一、直馳入、将以下騎出入送迎、已而之二細柳軍一、軍士吏被レ甲鋭二兵刃一、彀二弓弩一持レ満、天子之先駆至、不レ得レ入、先駆曰、天子且レ至、軍門一、都尉曰、軍中聞二将軍之令一、不レ聞二天子之詔一、…文帝曰、嗟乎此真将軍矣、郷者覇上棘門、如二児戯一耳（上、自ら軍を労う。覇上及び棘門の軍に至り、直ちに馳せ入る、将以下、騎して出入送迎す。すでにして細柳の軍にゆく、軍士吏、甲を被り、兵刃を鋭くし、弓弩を彀して満を持す。天子の先駆至る、入るを得ず。先駆曰く、天子まさに軍門に至らんとすと。都尉〔武官の称号〕曰く、軍中には将軍の令を聞き、天子の詔を聞かずと……文帝曰く、ああ、これ真の将軍なり、さきの覇上、棘門は児戯の如きのみと）——漢書・周勃伝

「彀二弓弩一持レ満」、弓を、いっぱいに引き絞ること。ここから「持レ満」（まんを持す）という言葉か出た。「持レ満而未レ発（満を持して、いまだ発せず）、事をなす用意を充分に備えること。

「大樹」は、将軍の異名である。

後漢の将軍馮異の話から。

光武皇帝が、兵隊を諸将に配分しようとすると、皆が「大樹将軍の部下になりたい」という。彼は、それほど人望があった。

論功行賞において、諸将は、いろいろ自分の手柄を申立てるが、馮異だけは、いつも樹の下に引っこんでいたという。それで「大樹将軍」という、悼名があったのである。

馮異字公孫、爲レ人謙退不レ伐、諸将論レ功、異常獨屏二樹下一、軍中號二大樹将軍一。（憑異、字は公孫、人となり、謙退にして伐らず、諸将、功を論ず、異、常に独り樹下に屏く。軍中、大樹将軍と号す）——後漢書・馮異伝

「屏」を、「しりぞく」と読むことになっているが、姿を見せないようにかくれることである。

流言飛語

「流言飛語」（りゅうげん・ひご）。

無根の風説のこと。根も葉もないうわさ。誰がいうともなしに立つうわさ。読んで字の如く、流れる言、飛ぶ語——である。

流言と飛語とは対になっているが、どちらも同じようなことを二つならべてある。言葉の文である。

「流言蜚語」とも書くが、「蜚」は「飛」という字の別の型。「飛」は鳥の飛ぶ姿からきた文字であるのに「蜚」は虫の飛ぶという意味を「非」という音であらわしたもの。

「流言」と「飛語」の二つのうち「流言」の方が古く、『詩経』に「流言以対」（流言もってこたう）とあり、それより古い『書経』には「流二言於国一」（国に流言す）とある。二千五百年以上も古い時代からある言葉である。

「流言」も初めは「言葉を流す」で、うわさを伝えるという意味だったが、責任のない説というものは無根のものが大部分であるところから、「流言」が無根の風説の意味に使われるようになったらしい。

不思議な暗合がある。今のドイツ語で lügen（リューゲン）は嘘をつくことである。

「飛語」のほうは「流言」にくらべるとずっと新しい。といっても漢の武帝のころだから、キリストより百年も古い言葉。「飛語」は出所の知れないうわさ、誰いうとも知れない無根の説である。「有二飛語一、為二悪言一、聞レ上」（飛語あり、悪言をなし、上に聞ゆ）――史記・灌夫伝　上とは武帝のことであって、総理大臣のことではない。

良賈深蔵（良賈深く蔵す）

「良賈深蔵」（りょうこ・深くぞうす）。

「良賈深蔵、若レ虚」（良賈は深くおさめて、むなしきがごとし）

店先に、いっぱい品物を並べ立てるのは、高級の店ではないという。二千何百年も大昔のことであるから、盗難の心配もあったろう。現代の百貨店とは反対の現象である。

からっぽみたいな寒々とした百貨店は良賈とは思われない、不景気な店は、客足も次第に減ってくる。

しかし、最高級の専門店ともなれば、やはり、深くおさめてむなしきが如しのようである。ロンドンで高級品の店が軒を並べているボンドストリート、そこでは、ショーウィンドーに、帽子ひとつ、手袋一対、それだけですましかえっている。そのサンプルたる帽子と手袋を見れば、店の中のストックは高級品でぎっしり埋まっていることを想像することになっている。パリのリュー・ラ・ボエシーというのは美術商の多い通りだが、ショーウィンドーのビロードを背景にセザンヌの「林檎」の小品の額が、たったひとつ飾ってある。ただ、それだけで、その店の格式が知れようというもの。

こうした店を見ると、なるほど「良賈は深く蔵して、むなしきが如し」と感じさせられる。

この反対が、場末や、田舎町の時計、貴金属商のショーウィンドーである。所せまきまでに、ごてごてと並べ立てるが、ショーウィンドーすなわちストックで、店の奥には、がらくたばかりというわけ。すべてを店頭にさらけ出している。実力というか底力というかそうしたものがないから、虚勢を張って見せびらかす。

「良賈深藏」は『史記』にある老子を批評した言葉である。

良賈深藏若レ虚、君子盛德、容貌若レ愚。

始めの句は、次の「君子は盛徳あるも、容貌愚なるがごとし」のたとえである。実力以上に見せようとして、抜け目なく賢そうな顔をしないという。

梁上君子（りょうじょうくんし）

「梁上君子」（りょうじょう・の・くんし）。

泥棒のこと。後漢の陳寔（ちんしょく）という人の話で名高い言葉。

太丘という所の長官、陳寔の家にある夜、泥棒が忍びこんで梁（はり）の上にかくれ、家の様子を窺（うかが）ってるのを陳寔が発見、子弟を集めて、人の性は元来善良なものであるが、誤って悪人となることがある、「梁上の君子（紳士）」が、その例であるという。この話を聞いていた泥棒は大いに感動、おりてきて、あやまった。陳寔は賊を見るに、悪人らしくない、貧困のためのでき心だろうと、絹二匹を与えて立去らせた。

除二太丘長一、修レ德清靜、百姓以安。時歲荒、有レ盜、夜入二其室一、止二於梁上一、寔陰見レ之、呼二子孫一、正レ色訓レ之曰、夫人不レ可レ不二自勉一、不善之人、未二必本惡一、習以成レ性、遂至二於此一、梁上君子是矣。盜大驚、自投二於地一、稽顙皈レ罪。（太丘の長に除せらる〔任命された意〕徳を修めて清静、百姓〔人民大衆の意〕もって安し。時に歳荒る〔飢饉になったこと〕盗ありて夜其室に入り、梁上に止まる、寔ひそかにこれを見る、子孫を呼び、色を正し、之に訓えて曰く、それ人自ら勉めざるべからず、不善の人、いまだ必ずしも、本悪ならず、習いて以て性と成り、遂に此に至る、梁上の君子是なりと。盜大いに驚き、自ら地に投じ、稽顙して罪に皈す）――後漢書・陳寔伝

「稽顙（けいそう）」は、額を地につけて謝ること。

遼東之豕（遼東の豕）

広い世間を知らないで、独りよがりに自分だけを偉く思うことを「遼東之豕」という、「豕」の音はシ、豚のことである。漢学者は豕を「イノコ」とも読んでいる。「豕」（し）がブタであり、「豚」（とん）はブタの子である。

東漢（後漢）の昔のことを遼東という、その名のように、はるかに遠（遼）い、東の片田舎に、豚が子を生んだが、その子の頭が白かった、これは珍らしい豚だ、（中国の豚は今でも黒いのが普通）献上したら喜ばれるだろうというので、都へのぼっていった、すると途中で豚の群に出会った。見ると、どの豚も、頭だけではなく、みな真白だったので、がっかりした。

「遼東之豕」を略して「遼豕」ともいう。遠い東の海の中にある島に住んでいながら、世界的水

準をはるかに上まわるというので、西洋の一流文化国へ行ってみたら、てんで問題にされないという場合がすくなくない。こういう場合に「遼東之豕であったか」と、がっかりする。

「豚」（とん）という字はブタであるが、「豕」（し）という字がブタであることは、あまり知られていない。

西洋小話、畜産に熱心な大臣がいた。閣議において「全国民、家毎に豚一匹ずつ飼うことにしよう」と提唱した。すると他の大臣がいった、「お前の家ではもう始めてるじゃないか」と、西洋で豚とは好色漢を意味する。

往時遼東有レ豕、生レ子白頭。異而献レ之。行至二河東一、見二群豕一皆白、懐レ慙還。（往時遼東に豕有り、子を生むに白頭なり。異としてこれを献ず。行きて河東に至り、群豕を見れば皆白し、慙を懐きて還る）——後漢書・朱浮伝

良二千石

「良二千石」とは知事、地方長官のことである。全国知事会議というものがあって、その記事が新聞に出ると、きっと「良二千石」という文字が現われてくる。「したがいまして、我々リョウニセンゴクといたしましては……」などという。「二千石」をニセンゴクと読むと、漢文の先生に直される、「石をゴクというのは俗語である。ニセンセキと読みなさい」と。

漢時代の官制では「石」（せき）をもって官等を定めたもので、二千石から百石までである。石（せき）は日本の石（こく）と同じように一斗の十倍である。年俸二千石の米は漢代の最高級、郡の太守の給料が二千石であった。今の日本では県の下に郡があるが、昔の中国では郡県といって、郡の下に県がある。

漢の宣帝は中興の英王、曾祖父の武帝が派手に荒した後の立直しをやった。八代将軍吉宗[1]の手本である。宣帝は平民の間に育てられ「民事の艱難を知った」、いわゆる下情に通じていた。皇帝となってから、地方長官を任命するのに、大臣まかせではなく、みずから「見問」した、会ってメンタルテストをした。

帝いわく「民のその田里に安んじ、歎息愁恨の声なきゆえんのものは、政が平かで、訟えが理まるからである。我と此を共にするものは、それはただ良二千石か」と。

「太守は吏民の本、しばしば、とりかえると民が安心しない」と、成績をあげたからといって、すぐに栄転させることなく、名誉を与えたり、俸給を増したりした。

「信賞必罰」（賞を信にし、罰を必す――功があれば、まことに賞し、罪があれば必ず罰する）という文句は宣帝を批評したものから始まる。

與我共レ此者、其唯良二千石乎、以爲太守吏民本也。（我と此を共にする者は、其れただ良二千石かと。おもへらく、太守は吏民の本なり）――漢書・循吏伝

（1）徳川吉宗（一六八四～一七五一）。享保改革を行い、幕府の立て直しをはかった。

壟斷

「壟斷」（ろうだん）。「利益を壟斷する」などと、利益を独占することである。

「壟」は「壟」とも書くし、『孟子』には「龍」と書いてある、「龍」は発音で、どれを書いても同じこと。で、「壟」（ろう）とは、土地が切り立ったように高くなったところ、プラットフォーム的地形。「壟二斷市利一」（市利を、ろうだんする）といって、『孟子』「公孫丑篇」に出てくる話である。

昔の市場は、我が国の終戦直後の、やみ市のような有様であったと思われる。つまらない風態の男があったが、彼は市場の高い所に登り、望遠鏡的に遠見のきく目で左右を見渡していた。市場の形勢事情を、偵察して、市場の安い物を買い、同じ市場で高く売った。こうすることによって、彼は市場の利益をひとりで占めた。これが「壟斷市利」である。

終戦直後の物の乏しい時、新宿辺りの、やみ市で安く仕入れて、それを銀座の露店で高く売って、もうけたというのに似ている。

古代の市場は物々交換のバーター制であったらしい、『孟子』には「いにしえの市をなす者、その有るところを以て、その無きところに易ゆ」と書いてある。「賤丈夫あり、必ず壟斷を求めてこれに登り、左右を望んで市利を罔す（罔す、とは、網羅独占すること）」（有二賤丈夫一焉、必求二壟斷一而登レ之、以二左右望一而罔二市利一）。

原文の「罔」は「網」と同じであること、「龍」が「壟」に同じくであるのと同じだ。「壟斷を求

め、市利を網す」（求二龍断一、罔二市利一）を略して「龍断市利」といい、さらに「龍断」とだけ使う。

轉禍爲福（禍を転じて福となす）

「禍を転じて福となす」、禍を利用して福を招きよせることである。漢文では、「転レ禍為レ福」であって、禍が転じて福となる――のではなく自分の意志と努力とで禍を転じて福とするのである。学校をなんべんも落第したのが同級生の多いのを利用して選挙で得することでもある。

戦国時代の雄弁家として名高い蘇秦の言葉の中にこれがある、「いにしえの、よく事を制する者は禍を転じて福となし、敗に因って功を為す」。「転レ禍為レ福」と「因レ敗為レ功」とは対句であり、二つとも同じような意味である。

「禍を転じて福とする」というのは古くさくて迫力がないというなら、因敗為功のほうを「失敗をして成功の母たらしめよ」とすれば、なんだか西洋語の飜訳みたいで利き目があるかも知れない。漢方薬と同じ草根木皮を原料にしても西洋語の名前で売り出すと売れるようなものだろう。

隋の煬帝のとき李淵という将軍は部下に人気があったので煬帝にけむたがられ、睨まれていた。李淵の次男世民は革命を考えてひそかに準備、機会を狙っていた。そのころ突厥というトルコ族が攻めてきた。李淵は国境に拒いで利あらず、処罰されることを恐れた。その時に世民は父にいった、「禍を転じて福となせ」と。この際軍隊を引きつれて謀反しろと説いたのである。謀反するには今が絶好のチャンス「嚢中の物を探るが如し」とは世民の言葉。この謀反は成功、唐朝三百年の基となった。李淵が唐の高祖、世民が太宗である。

文字の列べ方の違った文句もある。

因レ禍為レ福、転レ敗為レ功（禍に因って福となし、敗を転じて功となす）――史記・管晏伝

主要出典案内

（ ）内にある数字は本文中にその出典があらわれているページ数を示す。

晏子春秋（七四・一五二）
前六世紀頃の春秋時代、斉の政治家晏嬰の言行を、後人が編集したもの。八巻。戦国末から秦初にかけて編纂。儒家的思想の影響が感じられる。

尉繚子（一八六）
周の尉繚撰。五巻。二四編。「孫子」「呉子」「六韜」などと共に、兵法書の代表的古典といわれる。

易経（一七九・二三二・二五三）
「書経」「詩経」「礼記」「春秋」とともに『五経』の一つに数えられる経典。二巻。もともと卜筮（占い）の書であるが、神秘性はうすく、語句は簡潔で含蓄が多い。

淮南子（三・一一三・一九二）
漢の高祖の孫、淮南王劉安の撰。二一巻。道学の思想を中心に多くの学説を統合したもの。漢代の思想を見るのに都合のよい書である。

賈誼新書（三一）
漢時代、洛陽の賈誼によって著わされた書。一〇巻。治安策についての記述が多く見られる。

管子（一五）
春秋時代、斉の管仲が著わしたと伝えられる書。しかし、実際には後人の加筆した部分が多い。現存の書は二四巻。内容は法家的な学派の説を集めたものである。

漢書（七三・八四・一三七・一四九・一五〇・二二三・二五六・二六四）
後漢の班固の撰。その妹班昭の補。一二〇巻。前漢について記した、紀伝体の史書。「史記」にならって著わされたもので、名文をもって知られる。

韓非子（四三・八九・一〇四・一六七・二四一・二五一）
戦国時代末期、韓の公族韓非の著作。現存二〇巻。法家（刑名家）の代表的なもので、信賞必罰厳守の考えに基くため、冷酷非情な点もあるとされる。文章は自在な趣に富み、「孟子」「荘子」とともに古文の三大文章といわれる。

魏志（四六）――→三国志の項。

近思録（二九）
宋の朱熹が、呂祖謙と共同で著わした書。一四巻。内容は宋の程明道・程伊川・張横渠らの著述の中から採り、それを初学者にもわかりやすいように編纂したもの。

孔子家語（一四六・二三九）
戦国時代の魏の王粛の偽作といわれる。一〇巻。孔子の言行および問答を記したもの。

呉越春秋（一八四）
後漢の趙煜撰。一〇巻。呉・越両国の興亡を記した史書。

後漢書（二五・五七・八〇・八八・九四・一一一・一三五・一四四・一七五・一七九・一九六・二〇三・二三〇・二三九・二五七・二六一・二六三）
南北朝時代の宋の范曄の撰になる史書。一二〇巻。これは范曄が「東観漢記」などの既成の史書にならって書き改めたもの。

古今注（二一）
晋の崔豹の撰になる書。三巻。内容は種々の名物を考証して記したもの。

五代史（三三）
新・旧の二種ある。旧五代史は、宋の薛居正が勅命を奉じて編纂したもので、一五〇巻。新五代史は宋の欧陽修が著わしたもので七五巻。内容は梁・唐・晋・漢・周の五代（九〇七〜六〇）の正史を述べたもの。

西京雑記（四七）
漢の劉歆の書いたものを、晋の葛洪が編集したといわれる。六巻。昔からのめずらしい話を集録したもの。

左伝（六六・一七一・二四〇・二四八）
「春秋左氏伝」の略。春秋時代の魯の国の左丘明が著わしたとも、劉歆が著わしたともいわれている。三〇巻。春秋時代の歴史書として最も基本的な資料といえる。「公羊伝」「穀梁伝」とともに、春秋三伝といわれる。

三国志（四六・八四・九三・一〇三・一七三・一九八・二二〇・二三六）
晋の陳寿が著わした。六五巻。三国（魏・蜀・呉）の歴史を記したもの。内訳は魏志三〇巻、蜀志一五巻、呉志二〇巻。

史記（三七・三八・五九・六〇・六六・八一・八七・九八・一一七・一二〇・一二三・一五三・一六〇・一七五・一八三・一八四・二〇八・二二七・二三三・二三六・二三四・二四五・二五〇・二五八・二六〇・二六七）
漢の司馬遷の撰になる紀伝体の史書。一三〇巻。内容は黄帝から前漢の武帝までの約三千年間の歴史。紀伝体の史書の創始としての意義もさることながらその文章が名文であることをもっても有名である。

詩経（三四・一五八・二〇六・二五八）

「五経」の一つ。各地の詩歌三千余編の中から、孔子が撰んで三〇五編にしたもの。中国最古の詩集である。時代的には周の初めから戦国の半ば頃にまで及ぶ詩を収めてある。

資治通鑑（一八九・二一八）宋の司馬光の著。二九四巻。「左伝」にならって、戦国時代から五代の周までを編年体にまとめた史書。

拾遺記（二一六）五胡十六国時代、前秦の王嘉の撰。十巻。史書であるが内容には疑問な点が多く見られる。

十八史略（一〇三・一〇八・一二四・一六〇）元の曾先之の撰になる史書。七巻（初めは二巻であったが、明の陳殷が七巻本とした）。「史記」「漢書」「後漢書」「隋書」「五代史」などの十七史と、宋代の各種の資料から抜粋して、太古から宋代までの中国の歴史を略述したもの。

荀子（一二六）戦国時代、趙の国の荀子の撰になる哲学書。二〇巻。書中において、礼をもって人の性を矯正すべきであるという、有名な性悪説を説いている。

書経（一七九・二五八）「五経」の一つである。夏・殷・周の三代から秦に至る間の政治に関する記述三千余編を孔子が手を加えて百編にまとめたものといわれているが、確証はない。漢代には「尚書」といわれていた。中国古代の歴史を知るのには貴重な資料である。

蜀志（一九八）→三国志の項。

書言故事（一九・二〇六）宋の胡継宗の編といわれる。一二巻。古来の有名な故事成語を分類し、解釈したもの。

神異経（一九二）漢の東方朔の撰といわれているが、実際には晋以後の人の偽作と考えられている。一巻。

晋書（九〇・一一六・一八六・一九四・二三五・二三六・二五二）唐の太宗の勅命により房玄齢らが編集した史書。一三〇巻。西晋四代、東晋一一代のことを記している。

神仙伝（二五四）晋の葛洪の撰による書。一〇巻。「列仙伝」とともに、人間としては特異な存在である種々の仙人を伝した書物である。

隋書（六三・一六七）唐の魏徴らが、太宗の勅を奉じて編集した隋の正史。八五巻。二四史の一つに数えられる。

隋唐佳話（一三）唐の劉餗の撰になる。三巻。隋唐間の逸事を集めてある。

説苑（一八・三一）漢の劉向撰。二〇巻。春秋時代から漢のはじめまでの人々の伝記・逸事を集めて種類別にしたもの。君道・臣術・貴徳・復恩・政理・奉使など二〇編にわけて、はじめに序説、終わりに逸話をのせる形をとっている。

世説新語（二三八）南朝宋の臨川王、劉義慶の編。三巻。後漢から東晋までの名士たちの逸話を集めたもので、徳行・言語・政事・文学・方正など三六編に分けて述べている。

戦国策（三三・六六・七四・一六〇・一七八・二〇〇・二三五）漢の劉向の撰になる。三三編。旧名は「国策」「修書」などといわれた。戦国時代の西周・東周・秦・斉・楚などの十二の諸国の政策・外交策などを国別に分けて書いたもの。

荘子（一八・四〇・五七・一四八・一六三・一六七・二〇八・二一〇・二二七・二三一・二四二）荘周（荘子）著。一部は後人の編集といわれる。一〇巻。道家思想の代表作であり、その内容とともに名文をもって知られる。

捜神後記（一六五）晋の陶潜の作と伝えられる。一〇巻。内容は、鬼神妖怪の事についてふれたものである。

続幽怪録（九〇）唐の李復言の撰。一巻。

楚辞（二三三）前漢の劉向が編し、後漢の王逸が増補したといわれている。楚の屈原の作品と、その門下及び後人の作を集めたもので、「詩経」と並ぶ、古代の詩である。

太平広記（一九四）北宋の詩人李昉らが、太宗の勅令をうけて編した説話集。五〇〇巻。漢から五代に至るまでの伝説・小説等を分類集成してある。

中庸（二二六）孔子の孫の子思の作であるといわれるが、異説もあり確かではない。一巻。「大学」「論語」「孟子」とともに『四書』の一つにかぞえられる。もと「礼記」の中の一編であった。中庸の徳を説いた儒教の教典である。

枕中記（二八）唐の李泌の書いた小説。沈既済の書という説もある。内容は本文二七頁にあるとおり。

通鑑綱目（七七・二四）
「資治通鑑綱目」の略。宋の朱熹による史書。五九巻。司馬光の「資治通鑑」により綱目を作ったもの。

程史（六二）
宋の岳珂の撰。一五巻。南北宋の雑事について述べてある。

伝習録（二九）
明の王陽明の門人、徐愛、南元善らの編になる。三巻。王陽明の語録全部と門人や時人に答えた書簡の集録の形をとっており、陽明学の本質を知る基本書である。

伝燈録（一六）
宋の僧、道原の編。三〇巻。釈迦以来の法語を系統的にしるしたもの。

東軒筆録（一八）
宋の魏泰の撰。一五巻。各種の雑事を集録したもの。

唐詩選（五一・三八・八一・九一）
明の李攀竜の編といわれるが、実は明の本屋が名を借りて作ったもの。七巻。唐代一二七人の詩を、五言古詩、七言古詩、五言律詩、七言排詩、七言律詩、五言絶句、七言絶句の順に体別して集めてある。

「妙法連華経」の略。鳩摩羅什の訳。八巻。大乗経典の一つで、天台宗・日蓮宗の経典である。

蒙求（一九八）
唐の李瀚の撰。三巻。古人の逸話を集めたもので、内容は子供向きに、四字句の韻語をつらねてある。従って少年用の教科書として用いられる。

孟子（六五・二三五・二六五）
孟子の学を学んだ者が、孟子の言行や学説を集めて編集したもの。七巻。孟子は仁義の道を強調した。

文選（四一・二三六）
梁の蕭統（昭明太子）の編になる詩文集。三〇巻。周から梁までのすぐれた詩や文章を種類別に集めたもの。

野客叢書（一四五）
宋の王楙の撰。一二巻。儒教の根本的な経典の誤りを考証して、改め正したもの。

礼記（四二・一六三・一六八・二三二・二五〇）
前漢の戴聖の編になる。四九編。これはおじにあたる戴徳が、漢代すでに編述されていた古礼二一四編を削ってつくった「大戴礼」八五編をさらに削ってつくったもので、「小戴礼」ともいわれる。「五経」の一つである。

六韜（一七九）
周の呂尚（太公望）の作といわれるが、実際には後漢以後の作と考えられる。六巻。兵法書で、主として政治思想と軍略が記されている。

呂氏春秋（三・一〇三）
秦の呂不韋が賓客を集めて編集したもの。二六巻。儒家・道家・法家思想をはじめ、諸家の学説や当時の知識を総合的に記述してある。

列子（一八・三二・六七・二三一）
周の列禦寇の著といわれるが確証はない。八巻。老荘思想に基き、清虚無為を説いている。寓話が多く興味深く、かつ名文である。

列女伝（四四・八四・二四四）
前漢の劉向の著。七巻。唐虞以来の婦人の伝記を集めたもの。

論語（一三・二九・三二・六〇・七〇・七二・七六・九六・一三二・一三六・一四二・一六・一七〇・二三四・二三五）
孔子の直門の曾子や有子に続く学統の人々によって編集されたといわれる。二〇巻。孔子の言行や、またその門下生たちの言行をしるしたもので、儒教の聖典とされている。

論衡（五〇）
漢の王充の著。三〇巻。当時のあらゆる学説や思想を合理性に基づいて批判したもの。

（編集部編）

中国史略年表

時代	年代	事項	主要人名・書名（＊印は書名）
周 西周	前一三三	武王、殷を滅ぼし西周おこる。	
	前八四一	周の共和。周公・召公政治を執る。	
東周 春秋時代	前七七〇	平王、都を洛邑に移す（周室の東遷）。東周おこる。	
	前六七五	斉の桓公ら、管仲を用いる。	斉の桓公（？～前六四三） 管仲（？～前六四五） ＊管子（？）
	前六七九	斉の桓公はじめて覇者を称す。	＊書経（前六〇〇頃か？）
	前六三三	晋の文公、覇権をにぎる。	＊易経（前六〇〇頃か？）
	前六三七	晋、秦を破る（都の戦い）。	孔子（前五五～前四七九）子遊（前五三？～前四〇？）
	前五九七	楚の荘王、晋の景公を邲に破り覇者となる。	＊春秋（前五〇〇頃）
	前五五一	孔子、魯の昌平郷に生まれる。	＊論語（前四五〇頃）
	前四九七	孔子、魯を去り諸国を回る。	子思（前四八三～前四〇二？）＊中庸（前四一〇頃か）
	前四九六	呉王闔閭、越王勾践と戦い、敗れて戦死（夫差の臥薪）。	左丘明（？） 老子（？一説に戦国時代の人）＊老子（？）
	前四九五	呉王に夫差即位。	＊孫子（？一説に三国時代の書）
	前四九四	呉王夫差、越王勾践を破る（勾践の嘗胆）。	墨子（前四八〇？～前三九〇？）

周 東	時代	事項	主要人名・書名（＊印は書名）
春秋時代	前四七三	越王勾践、呉を滅ぼして覇者となる。夫差自殺。	
	前四五三	趙・韓・魏、知伯を滅ぼして、晋の地を三分する（三晋おこる）。	
	前四〇五	三晋、斉を破る。	
戦国時代	前四〇三	三晋、それぞれ独立。周の威烈王、趙・韓・魏を諸侯に列す（以後戦国時代）。	
	前三九四	斉、魯を討つ。	
	前三七六	三晋、晋主を廃する（晋滅ぶ）。	
	前三七五	韓、鄭を滅ぼす（鄭滅ぶ）。	
	前三六四	三晋、秦と戦う。	
	前三六二	魏、趙・韓を破る。秦、魏を破る。	
	前三五四	魏、趙の都邯鄲を囲む。	
	前三五三	斉、魏を攻めて趙を救う。	
	前三三三	韓、東周を攻める。	
	前三三三	蘇秦の合従策成る。ついで六国（燕・趙・韓・魏・斉・楚）の相となる。	蘇秦（？～前三一七？） ＊孟子（前三七二～前二八九？）
	前三三三	六国連合軍、秦を攻めるが敗れる。	張儀（？～前三一〇）
	前三一三	張儀、秦の相となる（～前三一〇）。	荘子（前三六〇？～前三〇〇）
	前三〇〇	楚、魏を破る。	＊荘子
	前三一八	韓・魏・趙・燕・楚の五ケ国、連合して秦を攻め	屈原（前三三二？～前二七七？） ＊楚辞
春秋時代	前四七三	列子（前四五〇～前三七五）	

時代	年代	事項	主要人名・書名（＊印は書名）
周 東周 戦国時代	前三〇三	斉・魏・韓、楚を攻める。秦、韓・魏を攻め、楚を救う。	荀子（前三九〜前三三？）＊荀子
	前三〇二	秦・斉・魏・韓、楚を攻める。	
	前二九九	秦、楚の懐王を捕える。斉の孟嘗君、秦の相となる。	呂不韋（？〜前二三五）＊呂氏春秋
	前二九八	斉・魏・韓、秦を攻める。	
	前二九六	斉、宋を攻める（宋滅ぶ）。	
	前二八四	秦・燕・趙・魏・韓、斉を攻める。	韓非（前二八〇？〜前二三三）＊韓非子
	前二六〇〜	この間、秦は趙、楚、魏、斉などを攻めて、おおむね勝利する。	
	前二五〇		
	前二五五	秦、趙を攻める。魏、趙を救う。秦と周争い、周破れる（周室滅ぶ）。	
	前二五四	秦、東周を滅ぼす（東周滅ぶ）。	
	前二二一	楚、魯を滅ぼす（魯滅ぶ）。	
	前三〇〜前三三	楚・趙・魏・韓・燕の五国、秦を攻め敗れる。この間、秦、諸国を攻め滅ぼし全国統一の足がかりをなす（滅亡年——韓〔前三〇〕、趙〔前三八〕、魏〔前三五〕、楚〔前三三〕、燕〔前三二〕、斉〔前三二〕）。	

新	年代	秦 漢 前	事項	主要人名・書名（＊印は書名）
八	前二三	秦	秦始皇帝、焚書坑儒を行なう。	
	前二〇九		陳勝・呉広の乱起こる。	
	前二〇六		項羽、西楚の覇王と称し、劉邦を漢中王に封ず。秦滅ぶ。	
	前二〇二	漢 前	項羽、漢軍劉邦に破られ（垓下の戦）烏江に自殺す。劉邦帝位につく（漢高祖）。	韓信（？〜前一九六）
	前二〇一		張騫、西域に使いす（〜前一二四）。	賈誼（前二〇〜前一六八）＊新書
	前一〇〇		蘇武、匈奴へ使いして捕えらる（〜前八一）。	淮南王劉安（前一七九〜前一二三）＊淮南子
	前九九		李陵、匈奴に降り、二十数年の後病死。	司馬相如（前一七九〜前一一七）＊子虚賦
	前八一		蘇武、匈奴より帰る。	司馬遷（前一四五〜前七七）＊史記（前九七頃）
	前三		王昭君、匈奴の呼韓邪単于に嫁す。	劉向（前七七〜前六）＊列女伝＊説苑＊戦国策
八			王莽、新皇帝と称す。	王莽（前四五〜二三）

時代	年代	事項	主要人名・書名（＊印は書名）
漢	二五	劉秀、王莽を破り漢を再興（後漢光武帝）。	馬援（前一四〜四九）
	七四	班超、西域を討つ。	班固（三〜九二）＊漢書（班固の妹班昭が完成）
	一〇五	蔡倫、製紙法を発明す。	
	一八四	黄巾の賊張角ら、乱を起こす。	班昭（曹大家）（？〜一二六）
	一九三	曹操、兵を挙ぐ。	＊王充「論衡」（一〇〇頃）
後	二〇七	劉備、諸葛亮を三顧の礼をもって迎え相とす。	
	二〇八	劉備と孫権の連合軍曹操の軍を破る（赤壁の戦）。	
国（呉・蜀・魏）	二二	劉備蜀漢の国を建て成都に都す。	曹植（一九二〜二三二）＊「七歩詩」
	二二七	諸葛亮「出師表」を作り魏を討つ。	
	二二八	諸葛亮、祁山の戦いに馬謖を斬る。	
	二二九	孫権、帝位につき国を呉と称し建業に都す。	
	二三四	諸葛亮五丈原に没す。	諸葛亮（一八一〜二三四）

	年代	事項	主要人名・書名（＊印は書名）
晋	二六〇	この頃清談流行す。	竹林の七賢（阮籍・嵇康・山濤・向秀・劉伶・阮咸・王戎）
	二六五	司馬炎、帝位につき晋を建国。	李密（？〜二九五頃）＊「陳情表」
	二三三	王羲之らの蘭亭の会催さる。	陳寿（二三三〜二九七）＊三国志
	二八三	晋の謝石・謝玄、前秦の苻堅を淝水に破る（淝水の戦）。	左思（二五〇？〜三〇五？）＊「三都賦」
			干宝（？〜三一八）＊捜神記
			＊神異経（？）
			葛洪（二八四〜三六四）＊抱朴子＊神仙伝
			陶潜（三六五〜四二七）＊「桃花源記」＊「帰去来辞」＊捜神後記
南北朝	四一〇	劉裕、帝を称し建康に都し国を宋と号す（武帝）。	劉義慶（四〇三〜四四四）＊世説新語
	四四六	北魏で仏教を禁止。	范曄（三九八〜四四五）＊後漢書
			梁昭明太子蕭統（五〇一〜五三一）＊文選
隋	五八一	楊堅、陳を滅し南北を統一す（隋文帝）。	顔之推（五三一〜五九五）＊顔氏家訓

時代	年代	事項	主要人名・書名（＊印は書名）
隋	六〇五	煬帝大運河をつくる。	
	六〇七	万里の長城を築く。	
		日本聖徳太子、小野妹子を隋に遣わす。	
唐	六一八	李淵、兵を挙げ隋の煬帝を江都に殺し、帝位につき長安に都し国を唐と号す（唐高祖）。	魏徴（五八〇～六四三） ＊群書治要
	六九〇	則天武后実権を握り（～七〇五）国号を周とす。	呉兢（六七〇？～七四九） ＊貞観政要
	七一三	玄宗「開元の治」（～七五五）。	孟浩然（六八九～七四〇） ＊「春暁」
	七五五	安禄山・史思明の乱（～七六三）。	王維（六九九～七五九） ＊王右丞集
	七五六	楊貴妃馬嵬坡で殺さる。	李白（七〇一～七六二） ＊李太白詩集
	八一五	白居易、江州司馬に左遷せらる。	杜甫（七一二～七七〇） ＊杜工部集
			＊沈既済「枕中記」（七七五頃）
			柳宗元（七七三～八一九） ＊柳河東集
			韓愈（七六八～八二四） ＊韓昌黎集
			白居易（七七二～八四六） ＊白氏文集 ＊「長恨歌」
			賈島（七六八？～八四三？）
			杜牧（八〇三～八五二）

時代	年代	事項	主要人名・書名（＊印は書名）
五代	八七五	黄巣の乱起こり、以後十年間天下乱れ唐の滅亡にみちびく。	
	九〇七	朱全忠、唐を滅ぼし後梁を建国。	＊蒙求（八〇〇頃）
	九五三	この頃木版印刷発明さる。	
宋 北宋	九六〇	趙匡胤、後周の恭帝を廃して帝位につき汴（開封）に都し国を宋と号す（宋太祖）。	薛居正（九一三～九八一） ＊旧五代史
	九七九	南唐の後主李煜、宋に降伏す。	欧陽修（一〇〇七～一〇七二） ＊新五代史
	一〇七五	王安石の新法施行さる。	司馬光（一〇一八～一〇八六） ＊新唐書
			＊資治通鑑（一〇八四）
			王安石（一〇一三～一〇八六）
			蘇軾（一〇三六～一一〇一） ＊「赤壁賦」
南宋	一二七七	宋の徽宗・欽宗、金に捕えられ北宋滅び（靖康の乱）欽宗の弟高宗、南京に即位宋室を再興す。	

時代	年代	事項	主要人名・書名（＊印は書名）
宋 南宋	一二四一	秦檜金との和議を唱え、主戦派の岳飛殺さる。	
	一二〇六	蒙古の鉄木真大可汗の位につき成吉思汗と号す。	朱熹（一一三〇～一二〇〇）　＊近思録　＊四書集注　＊通鑑綱目
	一二七八	文天祥、元と戦って敗れ捕えらる。	＊文章軌範（一三〇〇頃）
	一二七九	忽必烈、南宋を滅ぼし、大都（北京）に都をおき、国号を元と号す（元世祖）。	
	一二八一	日本遠征に失敗（弘安の役）。	
	一二八二	文天祥、獄中に死す。	＊「正気歌」（一二八一）　文天祥（一二三六～一二八二）　＊曾先之「十八史略」（一三〇〇頃）
元	一三六八	元滅ぶ。	

索引

（太字は本文中、タイトルになっているもの）
（→はその項を見よ）

〔あ〕

圧巻……一二
過まって改むるに憚るなかれ……一三
晏子の御……一五三
暗中飛躍……一四
暗中摸索……一三

〔い〕

衣食足って礼節を知る……一四
以心伝心……一五
一字千金……一三
一面識……二〇六
一網打尽……一六
一葉天下の秋……一九
一擲千金……二〇
一挙両得……二〇
一刻千金……二三
一壺天……二〇
一将功成って万骨枯る……二六
一炊の夢……二七
一石二鳥……二三
一箭双鵰……二三
一擲千金……二〇
一辺倒……二九
鷸蚌の争い→漁父の利
井の中の蛙大海を知らず→井底の蛙
韋編三絶……二五
慇懃……二〇
陰徳陽報……二三

〔う〕

烏合の衆……二〇
烏鳥の私情……二〇
烏兎……二〇
烏頭白……二〇
馬を問わず……二三
烏有……二三

〔え〕

遠交近攻……二五
燕雀いずくんぞ鴻鵠の志を知らんや→鴻鵠の志

〔お〕

烏滸……二〇

〔か〕

河海細流を択ばず……一五
和氏の璧……四〇
苛政虎よりも猛し……四三
蝸牛の角の上の争い……三八
瓜田に履をいれず……四四
鼎の軽重を問う……一七
壁をうがって書を読む……四六
河梁の吟……五六
河梁の別……五六
夏炉冬扇……五〇
管窺→管中窺豹

汗牛充棟……二五三
管見→管中窺豹
寒江独釣……五一
邯鄲の歩……五六
邯鄲の夢→一炊の夢
管中窺豹……三三
完璧……五八
管鮑の交わり……五九
〔が〕
骸骨を乞う……三七
臥薪嘗胆……一〇一
画餅……四五
画竜点睛……四七
雁書……五四
雁信→雁書
雁素→雁書
雁帛→雁書
〔き〕
驥、塩車に服す……六六
鬼哭啾々……六三
騎虎の勢い……六一

五車の書……二五三
五十歩百歩……一〇四
五斗米……一〇五
五里霧中……一一〇
言語道断……一一一
〔さ〕
塞翁の(が)馬……一二三
細君……八四
細事……一二四
細腰……一二五
先んずれば人を制す……一二六
流石……一二七
左袒……一二八
山雨来たらんと欲して風楼に満つ……一三〇
三顧の礼……一〇一
〔し〕
四海兄弟……一三三
四海同胞→四海兄弟
鹿をさして馬となす……一九〇
死屍に鞭うつ……一三三
死せる孔明生ける仲達を走らす……一三四
四知……一三五
七歩の才……一三六
指南……一一一
四面楚歌……一三六
秋扇……一三七
守株……一〇三
酒池肉林……一三〇
春眠暁を覚えず……一三一
食指……一三三
知らしむべからず……一三六
神出鬼没……六三
信賞必罰……一六四
心中の賊……一三九
〔じ〕
助長……一三四
人生意気に感ず……一三七
〔す〕
水魚の交わり……一〇二
推敲……一四一
過ぎたるはなお及ばざるがごとし……一四三
〔ず〕
杜撰……一四四
〔せ〕
掣肘……一四五
井底の蛙……一四六
折角……一四八
折檻……一四九
折衝……一五〇
〔そ〕
糟糠の妻……一五三
宋襄の仁……一八六
漱石枕流……一一八
桑中の喜び……一〇六
草盧三顧→三顧の礼
楚腰→細腰
樽俎……一五一
〔た〕
太公望……一五四
泰山は土壌を譲らず……一五六

臈足をのばす……六六
木によって魚を求む……六四
驥尾に付す……六五
杞憂……六七
九鼎大呂→鼎呂
朽木えるべからず……七一
杏林……一五三
〔ぎ〕
疑心暗鬼……六三
牛耳……六八
牛首を懸けて馬肉を売る……七三
牛刀……七〇
漁父の利……七四
〔く〕
口に蜜あり腹に剣あり……七六
国破れて山河あり……七七
〔け〕
敬遠……七八
挂冠……八〇
鶏口牛後……八一
荊妻豚児……八二
螢雪……八五
鶏鳴狗盗……八六
鶏肋……八七
巻土重来……九四
〔げ〕
逆鱗……八八
月下氷人……九〇
月旦……九二
〔こ〕
紅一点……九五
鴻鵠の志……九七
後生おそるべし……九八
狡兎死して走狗煮らる……一五〇
黄粱の夢→一炊の夢
刻舟……一〇三
虎穴に入らずんば虎子を得ず……一七九
孤城落日……一九
鼓腹撃壌……一〇七
〔ご〕
呉越同舟……一〇〇
呉下の阿蒙……一〇一

泰山を挟んで北海を超ゆ……一五七
泰斗……一五六
多岐亡羊——→亡羊の歎
他山の石……一五七
多多ますます弁ず……一六〇
他人の鼾睡……一六一
誰かカラスの雌雄を知らんや……二四四
端倪……一六二
端午……二三四
〔だ〕
蛇足……一五八
男女同席……一六三
断腸……一六四
〔ち〕
畜生……一六六
逐鹿……一八九
朝三暮四……一六七
張三李四……一六八
朝秦暮楚……一六八
朝齊暮盬……一六八
朝聞夕死……一六八
朝令暮改……一六八
直躬……一六八
陳呉となる……九八
枕石漱流……二一七
〔て〕
鼎士……一七一
鼎談……一七一
鼎沸……一七一
鼎立……一七〇
鼎呂……一七一
点額……一七六
〔と〕
桃源……一七一
盗泉の水……一七三
桃李いわざれど下おのずから蹊を成す……一七四
登竜門……一七五
虎の威をかる狐……一七六
虎の子……一七九
虎の巻……一七八
〔ど〕
読書亡羊……二三一
呑舟の魚……一八
〔な〕
泣いて馬謖をきる——→馬謖
南柯の夢……一七九
〔ね〕
拈華微笑……一六
〔の〕
嚢中おのずから銭あり……一八〇
嚢中の錐……一八二
〔は〕
敗軍の将……一八三
背水の陣……一八五
盃中の蛇影……一八六
入るを量って出ずるをなす……一八八
破鏡……一九二
白眼……一九四
白波……一九五
白髪三千丈……一九六
白眉……一九七
伯楽……一九八

伯楽の一顧……二〇〇
破胆……一六五
破天荒……二〇三
半面識……二〇五
〔ば〕
馬鹿……一八九
馬脚……一九一
馬謖……二〇一
跋扈……二〇二
跋扈将軍……二〇三
伴食宰相……二〇四
〔ひ〕
顰にならう……二〇九
脾肉の嘆……二一〇
百聞は一見にしかず……二一一
豹変……二一三
〔び〕
尾生の信……二〇六
〔ふ〕
風声鶴唳……二一四
覆水盆に返らず……二一五
不肖……二一六
釜中の魚……二一七
刎頸の交わり……二一〇
〔ぶ〕
物色……二一八
〔へ〕
辺幅を修飾す……一四六
〔べ〕
汨羅の鬼……二一三
〔ほ〕
庖丁……二一七
〔ぼ〕
暴虎馮河……二一四
旁若無人……二一六
亡羊の歎……二二〇
木鐸……二二一
〔ま〕
枕を高うして臥す……二二三
先ず隗より始めよ……二二四
豆を煮るに豆がらを燃やす……二二六
満を持す……二五六
水清ければ大魚なし……二二八
未亡人……二二九
〔む〕
矛盾……二三〇
〔め〕
明鏡止水……二三一
〔も〕
孟母……二三二
沐猴にして冠す……二三四
〔や〕
薬籠中の物……二三五
病膏肓に入る……二三六
〔ゆ〕
油断……二三八
〔よ〕
羊頭狗肉……二五〇
余桃……二五一
〔ら〕
洛陽の紙価……二五二
〔り〕

梨園……二五三
李下の冠……二五四
柳営……二五五
流言飛語……二五七
良賈深く蔵す……二五八
梁上君子……二六〇
遼東の豕……二六一
良二千石……二六二
緑林……一九六

〔ろ〕
老驥伏櫪……六六
壟断……二六五
隴を得て蜀を望む……一四六
魯魚の誤り……九九
盧生の夢――一炊の夢

〔わ〕
禍を転じて福となす……二六六

『東洋語源物語』について

新開　高明

著者渡辺紳一郎氏は、かつてNHKのラジオ番組「話の泉」の常連として、その博識を世に披露したものであったが、氏は東京大学の言語学科を修め、さらに中国文学科を出た経歴の持ち主であった事を考えると、成る程とうなずかれるのである。その氏が、敗戦後世を挙げて英語文化に押し流されていた時に、アサヒ・グラフ誌上に『古典語典』と銘うって、中国の古典に由来する故事・成語の日本人の人口に膾炙したものを取り上げ興味深く解説されたことは、そのタイトルの「コテンゴテン」という、いかにも渡辺氏らしい飄逸な味とともに、「やった！」という爽快な共鳴をもたらしたものであった。

従来、この類のものは『故事成語辞典』と呼ばれて、多くの漢学者が、その学識を傾けて解説するのであるが、大体、融通のきかぬ頭の固さから紋切型に堕してしまうのがおちであった。ところが、根っからの漢学者嫌いの氏は、知識の泉である中国の古典が顧みられない責任の一半は漢学者にあるとして、その反骨精神を燃やして、中国古典の世界を漢学者の世界から解放しようとの野心を幾分なりともこの著作で実現したものであった。

今や長く暗かった日中間の関係が、日中関係正常化の両国国民の願望のもとに正しい姿に回復された。いわば日中関係は原点に立ち戻って再出発の秋を迎えたわけである。この時にあたって、日本文化を培かって来た古い中国の文化に思いを致すならば、これを正しく理解し、さらに豊かな明日の建設に資する事がいかに重要な事か論ずるまでもないであろう。なかんずく、日常我々が使う

言葉、また接する文字の中に、それと知らずに、中国の古典に由来する故事成語がいかに多く取り入れられている事か、渡辺氏の『東洋語源物語』（『古典語典』を再編集）を一読するならば痛切に思い知らされることであろう。日本は「ことだまのさきわう国」と言われるけれども、文字の国中国の漢字・漢語を摂取して、一層その言葉の意味に重みが増したと言えるのではないか。

ここに示された『古典語』（まだまだ言及されなかった多くのものがあるが）こそは、まさに日本人の過去何千年の言語生活の歴史の中で、日本人の血となり肉となって来たものであり、今後とも正しく子子孫孫伝えなくてはならない文化遺産である。我々は、その一つ一つについて、その意味は勿論のこと、由来・出典を知ること、それ自体興味ある事であるし、また、それによって中国人の言語・文字に関するすばらしい知恵を発見し、大きくは東洋文化の精粋に誇りを感ずるのである。我々はこれを学ぶことによって言語生活を豊かにし得る。豊かな言葉は、反面豊かな教養、豊かな人間性の証左でもある。渡辺氏のこの労作によって、その豊かな世界に心楽しく分け入られんことを。

筆者――防衛大学教授。大正十四年一月生まれ。昭和二十五年東大中国哲学科卒。

旺文社文庫目録

日本文学（＊印は近刊）

阿部一族・雁・高瀬舟　森鷗外
舞姫・山椒大夫他四編　森鷗外
青年他一編　森鷗外
渋江抽斎他二編　森鷗外
吾輩は猫である他一編　夏目漱石
坊っちゃん他一編　夏目漱石
草枕　夏目漱石
三四郎他一編　夏目漱石
こころ他一編　夏目漱石
それから他一編　夏目漱石
門他一編　夏目漱石
道草他二編　夏目漱石
硝子戸の中他一編　夏目漱石
彼岸過迄他一編　夏目漱石
行人他一編　夏目漱石
虞美人草他一編　夏目漱石
坑夫　夏目漱石
明暗（全二巻）　夏目漱石
夢十夜・幻影の盾他四編　夏目漱石
二百十日・野分他一編　夏目漱石
野菊の墓他三編　伊藤左千夫
たけくらべ他三編　樋口一葉
人生に相渉るとは何の謂ぞ　北村透谷
浮雲他三編　二葉亭四迷
土　長塚節
滝口入道他五編　高山樗牛
田舎教師他一編　田山花袋
蒲団・一兵卒の銃殺他一編　田山花袋
武蔵野・牛肉と馬他四編　国木田独歩
鈴薯他四編　国木田独歩
源おぢ・忘れえぬ人々他四編　国木田独歩
運命論者・号外他五編　国木田独歩
半七捕物帳（全六巻）　岡本綺堂
修禅寺物語他四編　岡本綺堂
影を踏まれた女他十四編　岡本綺堂
魚妖・置いてけ堀　岡本綺堂
箕輪の心中　岡本綺堂
綺堂むかし語り　岡本綺堂
綺堂芝居ばなし　岡本綺堂
中国怪奇小説集　岡本綺堂
高野聖・歌行燈　泉鏡花
幽霊塔＊　黒岩涙香
生れ出づる悩み他三編　有島武郎
或る女　有島武郎
漫画漫談・ひかげの花　永井荷風
ふらんす物語　永井荷風
暗夜行路　志賀直哉
和解・城の崎にて他四編　志賀直哉
網走まで他十六編　志賀直哉
友情・愛と死他一編　武者小路実篤
若き日の思い出他一編　武者小路実篤
真理先生他一編　武者小路実篤
幸福者他詩十編　武者小路実篤
或る男（全二巻）　武者小路実篤
その妹他一編　武者小路実篤
竹沢先生という人他一編　長与善郎
青銅の基督他一編　長与善郎
次郎物語（全三巻）　下村湖人
嚥の母・一本刀土俵入他四編　長谷川伸
夜もすがら検校他十四編　長谷川伸
狼ある市井の徒・新コ半代記　長谷川伸
細雪（全二巻）　谷崎潤一郎
刺青・春琴抄他二編　谷崎潤一郎

少将滋幹の母 他四編 谷崎潤一郎
幼年時代・性に目覚める頃 他二編 室生犀星
父帰る・恩讐の彼方に 他七編 菊池寛
羅生門・鼻・侏儒の言葉 他二編 芥川龍之介
河童・或る阿呆の一生 他四編 芥川龍之介
地獄変・戯作三昧 他六編 芥川龍之介
奉教人の死・邪宗門 他六編 芥川龍之介
舞踊会 他十編 芥川龍之介
南京の基督・山鳴 他七編 芥川龍之介
偸盗・袈裟と盛遠 他五編 芥川龍之介
西方の人 他六編 芥川龍之介
阿房列車 内田百閒
第二阿房列車＊内田百閒
出家とその弟子 他一編 倉田百三
田園の憂鬱・都会の憂鬱 佐藤春夫
椎の若葉・湖畔手記 他九編 葛西善蔵
小川未明童話集 小川未明
浜田広介童話集 浜田広介
風の中の子供 他四編 坪田譲治
子供の四季 坪田譲治
河のほとりで 石坂洋次郎
晩年 太宰治
走れメロス・新樹の言葉 他九編 太宰治
津軽 太宰治
パンドラの匣 太宰治
正義と微笑 他一編 太宰治
お伽草紙 他一編 太宰治
斜陽 太宰治
人間失格 他五編 太宰治
青春の逆説 織田作之助
猿飛佐助 他九編 織田作之助
信長 他一編 坂口安吾
李陵・弟子・山月記 他二編 中島敦
落穂拾い・雪の宿 小山清
花筐・光る道 他四編 檀一雄
リツ子・その愛 檀一雄
リツ子・その死 檀一雄
詩人 金子光晴
日本人の悲劇 金子光晴
裁判（全二巻） 伊藤整
銀河鉄道の夜 他九編 宮沢賢治
学生時代 久米正雄
円朝（全二巻） 小島政二郎
場末風流 小島政二郎
葛飾北斎 小島政二郎
随筆銭形平次 野村胡堂
伊豆の踊子・花のワルツ 川端康成
雪国 他二編 川端康成
山の音 他一編 川端康成
川のある下町の話 川端康成
名人 他一編 川端康成
掌の小説（五十編） 川端康成
抒情歌・たまゆら 他八編 川端康成
旅愁（全二巻） 横光利一
帰郷 大佛次郎
天の夕顔・失楽の庭 他一編 中河与一
兄弟・ふしゃくしんみょう 山本有三
鬼涙村 他十一編 牧野信一
コタンの口笛（全二巻） 石森延男
蟹工船・一九二八年三月十五日 小林多喜二
伸子 宮本百合子
播州平野・風知草 宮本百合子
風琴と魚の町 他八編 林芙美子
二十四の瞳 他二編 壺井栄
母のない子と子のない母と 他一編 壺井栄
柿の木のある家 他十五編 壺井栄
樹々新緑 他六編 佐多稲子
歯車 佐多稲子
女の宿・水・人形と笛 他七編 佐多稲子
風立ちぬ・聖家族 他三編 堀辰雄
菜穂子 他四編 堀辰雄
檸檬・ある心の風景 他二十編 梶井基次郎
まぼろしの記 他五編 尾崎一雄
懶い春・霖雨 尾崎一雄
芳兵衛物語 他二編 尾崎一雄
楠ノ木の箱 他九編 尾崎一雄
人生劇場（青春篇） 尾崎士郎
人生劇場（愛欲篇） 尾崎士郎
人生劇場（残侠篇） 尾崎士郎
人生劇場（風雲篇） 尾崎士郎
若い川の流れ 他三編 石坂洋次郎
寒い朝 他四編 石坂洋次郎
耳学問・尋二の春 他十一編 木山捷平
茶の木・去年今年 他十編 木山捷平
大陸の細道 木山捷平
長春五馬路 木山捷平
あすなろ物語 他一編 井上靖
しろばんば 井上靖
天平の甍 他一編 井上靖
蒼き狼 井上靖
洪水・異域の人 他八編 井上靖
孤猿・小磐梯 他八編 井上靖
真田軍記 他七編 井上靖
滝へ降りる道 他十編 井上靖
巷談本牧亭 安藤鶴夫
三木助歳時記 安藤鶴夫
落語鑑賞（全二巻） 安藤鶴夫
寄席紳士録 安藤鶴夫
落語国・紳士録 安藤鶴夫
雪まろげ 安藤鶴夫
年年歳歳 安藤鶴夫
昔・東京の町の売り声 安藤鶴夫
夕鶴・彦市ばなし 他七編 木下順二
足摺岬 他五編 田宮虎彦
シベリヤ物語 長谷川四郎
俘虜記 大岡昇平
武蔵野夫人 大岡昇平
ボロ家の春秋 他五編 梅崎春生
真空地帯 野間宏
暗い絵・第三十六号 他三編 野間宏
崩解感覚・夜の脱柵 他四編 野間宏
赤い孤独者 椎名麟三
運河 椎名麟三
遁走 椎名麟三
神の道化師 他四編 椎名麟三
愛について 椎名麟三
摩周湖・海豹 他五編 八木義徳
女人 他四編 八木義徳
喰鉄道 戸川幸夫
遺書配達人 有馬頼義
背後の人 有馬頼義
三十六人の乗客 有馬頼義

「旺文社文庫」刊行のことば

いかなる時代においても、書物は人間の最大の喜びであり、最高の教いである。若い日読んだ書物は、人間の生涯にわたって影響をあたえ、第二の天性となり、人格となるであろう。

かかる観点から旺文社は、若き世代のための出版社としての使命感にたって、ここに旺文社文庫を刊行する。内容は、洋の東西にわたり、時代の古今をつらぬき、文学・科学・伝記・随筆・思想、万般におよび、いやしくも知識人たらんとする者が、生涯の教養の基盤として、若い日一読すべき価値のあるものを可及的に多く刊行せんとするものである。

読むに価値あるものを、でき得るだけ楽しく、消化しやすく、読みやすく提供することは出版社の義務である。出版道義を強く信奉せんとしているわが社は、この目的にひたむきに献身するものである。あえてわが社の志を理解されご支援あらんことを。

旺文社社長　赤尾好夫

〔編集顧問〕　小田切進　茅　誠司
外山滋比古　森戸辰男　(五十音順)

旺文社文庫　東洋語源物語　定価はカバーに表示してあります

1973年8月15日　初版発行
1979年　第8刷発行
(落丁・乱丁本はお取りかえしますので本社に直接お申し出ください)

著者　渡辺紳一郎
発行者　立澤節朗
印刷所　株式会社厚徳社／合資会社中村印刷所
製本所　有限会社西林製本所

発行所　株式会社旺文社
162 東京都新宿区横寺町
電話　(編集)03-266-6372
(販売)03-266-6415

0195 | 640-47 | 0724
909099
Printed in Japan

© 渡辺菊江　1973
(許可なしに転載，複製することを禁じます)